ロキ・ファミリアの弓使い

中輩

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

〝弓使いは大成しない〟。
それは冒険者の間でも有名な定説であった。

目次

レイン・スヴァルト――プロフィール（ネタバレ注意）――1
序章【邂逅】
第一話［50階層の異常事態（イレギュラー）］――6
第二話［撤退戦］――20
第三話［遠征の帰途］――39
第四話［ステイタス］――56
第五話［豊穣の女主人］――73
第一章【怪物祭（モンスターフィリア）】
第六話［兎の葛藤］――87
第七話［妖精の心境］――101
第八話［遠雷（グロム）対猛者（おうじゃ）］――115
第九話［愚者の道］――130
第二章【リヴィラ攻防戦】
第十話［出立］――149
第十一話［リヴィラ攻防戦［序］］162
第十二話［リヴィラ攻防戦［破］］175
第十三話［リヴィラ攻防戦［急］］195
第十四話［誓い］――213

第三章【白宮殿（ホワイトパレス）の死闘】
第十五話［遠雷（レイン・スヴァルト）
対　白宮殿の骸王（ウダイオス）〔上〕］ 230
第十六話［仮面の内側］ 244
第十七話［怪物（レイン・スヴァルト）
対　怪物（ウダイオス）〈下〉］ 272

レイン・スヴァルト――プロフィール（ネタバレ注意）

《基本情報》

名前：　レイン・スヴァルト
二つ名：　遠雷（グロム）
所属：　ロキ・ファミリア
種族：　エルフ
職業：　冒険者
到達階層：　５８階層
武器：　剣，弓矢
所持金：　５，６０２，０００ヴァリス（ヘファイストス・ファミリアへの納金前）

《ステイタス》

Ｌｖ　：　５
力：　Ｂ　７２６

耐久：　Ｅ　４７８
器用：　Ｓ　９９９
敏捷：　Ｃ　６５７
魔力：　　Ｉ　０
弓士：　Ｆ
耐異常：　Ｇ
狙撃：　Ｇ

《魔法スロット》
［――――］
・詳細不明。

《スキル》
［妖精鋭感（フェアリー・センス）］
・聴覚に関する高補正。
・耳の触覚も鋭敏になる。
［雷轟一殲（ライジング・ボルト）］

・矢の威力，飛距離への高補正。弓を引き絞れば引き絞るほど際限なく補正がかかる。
・剣技によりスキルを疑似的に起動させる事が可能。

《装備一覧》

［仮面］
・名称及び製作者不明。
・額から鼻先まで覆う白色の仮面。レインは肌身離さずこの仮面をつけている。
・レインはファミリアに入団する前からこの仮面を身につけている。

［白鷺のサーコート］
・【ヘファイストス・ファミリア】作。価格は４５０，０００ヴァリス。
・下層域に出現する《白鷺》と呼ばれる怪鳥のモンスターのドロップアイテムを素材としている。
・白を基調に青色のラインの入ったマントとコート。内側に鎖帷子を着ている為、彼の耐久力を補っている。

［狩人の矢筒（オリオン・クイヴァー）］
・【ヘルメス・ファミリア】アスフィ・アル・アンドロメダ作。価格は２００，０００，０００ヴァリス。

・アスフィの神秘アビリティを用いることによって生み出された魔道具（マジックアイテム）。
・矢筒の中の空間が拡張されており、最大３００本ほどまで矢を収納することができる。

［ケラウノス］
・長弓。レインの主武装。
・【ヘファイストス・ファミリア】椿・ゴルブランド作。価格は１２０，０００，０００ヴァリス。レイン自身が本来の意味を理解した上で命名している。
・レインがＬｖ．５にランクアップした際に椿に依頼して作成した弓。
・弦以外の部分が不壊属性（デュランダル）となっており、レインのスキルの最大出力にも耐えられる仕様になっている。弦も複数の素材を配合することにより強度としなやかさを両立させている。
・使用する矢の値は一本あたり５０，０００ヴァリスほど。

［魔弾］
・魔剣の亜種。
・【ヘファイストス・ファミリア】椿・ゴルブランド作。価格は２，０００，０００ヴァリス。
・現状では、火、氷、雷の三属性の魔弾が存在する。

［エリュシオン］

・片手両刃剣。レインの副武装。

・製作者不明。

・素材となっている白亜の鉱石は都市外では稀少な素材であるが、迷宮（ダンジョン）の下層域では比較的よく発掘される鉱石である。

序章【邂逅】

第一話［５０階層の異常事態（イレギュラー）］

――迷宮（ダンジョン）第４９階層《大荒野（モイトラ）》。

地平の果てを埋める程の大群が津波のように押し寄せる。

群を形成する怪物の名は《フォモール》。人を遥かに上回る巨躯を持ち、おぞましい顔立ちは潜在的な恐怖を駆り立てる姿であった。

「盾ェッ！構えぇッ――!!」

夥しい怪物の群れに対峙するのはヒューマンをはじめ、エルフ、ドワーフ、獣人と様々な亜人種で構成された集団であった。

ルーツの違う彼等であるが、互いに背を、命を預けて共に戦い続ける。

そんな彼らを繋ぐものはただ一つ。

陣の中央で舞う戦旗。そこに描かれた滑稽に笑う道化師（トリックスター）のエンブレム。

それこそが彼等を繋ぐ絆であり、一柱の神と契りを結んだ証である。

彼等こそ、迷宮都市オラリオの最強ファミリアの一角を担う《ロキ・ファミリア》。
今は迷宮（ダンジョン）の最下層。未知領域を目指す〝遠征〟の真っ最中であった。

◇

「【――間もなく、焔は放たれる】」
陣形の最後方に立つ緑髪のエルフは凛とした声音で詠唱を唱える。足下には輝きを増してゆく翡翠色の魔法円。彼女を中心として魔力の奔流が形成されつつあった。
それは戦場において一発逆転をもたらす奇跡――魔法。
千年にも及ぶ冒険者の歴史においても魔法の存在は不可欠なものであった。幾ら神の眷属となり得た《ステイタス》を持つ冒険者であっても無限に生み出されるモンスターを相手取るには限界がある。現に世界最高峰の冒険者が多数いるロキ・ファミリアですら九魔姫（ナインヘル）と呼ばれる彼女の魔法を用いずにフォモールの大群を突破するのは至難の業だろう。
それほどまでに魔法という技術は、冒険者にとって絶対的なものであった。
彼が現れるまでは――。

広域に広がった戦場を俯瞰的に見渡せる小高い丘に仮面をつけたエルフが弓を構えて立っていた。

「――左翼が圧されているな」

ギュンという音を鳴らし弓を引き絞る。

【忍び寄る戦火。免れえぬ破滅。開戦の角笛は高らかに鳴り響き、暴虐なる騒乱が全てを包み込む】

「詠唱はまだかかるか……ハァッ――!」

放たれる豪速の矢は広がった戦場の上空を流星のように翔けた。

その矢は陣形の左翼付近、前衛が崩れかけたところを先頭のフォモールを一射にて仕留めることによりフォローする。

続いて二射、三射と次々とフォモールを屠ってゆく。彼が立つのは陣の反対側である右翼後方。広々と展開された戦場の端から端という距離でありながら彼は正確に射抜く。全てのモンスターに共通した急所である魔石を。彼の地点からでは豆粒大にすら見えない小さな点を正確に穿ってみせる。埒外の命中精度に既に見慣れた筈のファミリアの面々ですら時折呆れた表情を浮かべるほど。

十ほど援護射撃を行い左翼の前衛は勢いを取り戻した。

「レフィーヤ!?」

「――チッ。左翼に時間を割き過ぎたか」

アマゾネスの少女の慌ただしい声音を聞き取り彼は舌打ちを打つ。

その声の先、陣形の中央の一部が割れ後衛に立つエルフの少女の元にモンスターが雪崩れ込んでいた。

接近戦で優れない非力な彼女はフォモールの振るう得物により生じた空圧に吹き飛ばされる。倒れ込む彼女に向けフォモールは続け様にその巨腕に持つ鈍器を振り上げた。

素早く矢を装填し放とうとする彼だが、戦場を横断し倒れ伏す少女の元に駆け抜ける黄金の軌跡を察知した。

（このままでは同着か。ならば……）

照準を僅かにズラし矢を放った。

高速で飛翔する矢は少女に向けて振り上げられたフォモールの得物を正確に貫き破壊する。貫通した矢はついでとばかりに更に後ろから迫る別の個体の魔石をも穿ってみせた。

放たれた矢とほぼ同じタイミングで金髪を揺らす剣士がその場に辿り着く。

得物を失い少女への一撃を空振ったフォモールを一刀の元に斬り伏せた。

「アイズさん!!」

少女は自身の憧れる剣士の登場に歓喜する。

同胞の弓兵も手を貸したのだが少女がそれに気づく事はなかった。

アイズと呼ばれた剣士は後方をチラッと見つめる。全体を援護する弓使いへ向けて〝こっちはもう大丈夫〟と視線を送ろうと思ったのだが――。

「フン」

仮面の彼は既に別方向へと矢を放っていた。なんならアイズが飛び出した事により生まれた陣形の穴に向けて。

無視された事によりガーンとショックを受けるアイズ。弓兵は類稀な聴覚により視線を向けずとも彼女の機微を理解していたが無視を決め込む。

（勝手に飛び出した貴様が悪い）

【汝は業火の化身なり。大いなる戦乱に幕引きを】

オラリオ一の魔導士と呼ばれた彼女の詠唱も最終盤に突入する。膨大な魔力の渦が大地を包みつつあった。

「前衛後退ッ!!」

広域殲滅魔法に巻き込まれないために、団長である小人族（パゥルム）の指示を受けフォモールを抑え込んでいた前衛が撤退する。

「【焼き尽くせ、スルトの剣――我が名はアールヴ】」
フォモールの群れ。その足元に幾十もの魔法円が形成される。
その魔法円の輝きにか。或いは渦巻く魔力の奔流を察知してか。自らの絶命を予感した数匹のフォモールが身を翻し、広がった魔法円の外へ逃げ出す。
「――逃すものか」
魔法円の範囲から外れた三匹のフォモールを速射にてほぼ同じタイミングで射抜く。あまりの早業にこの場の大半の冒険者は魔法円から漏れたフォモールが射抜かれたことにすら気がついていない。
「【レア・ラーヴァテイン】!!」
高らかに詠唱が終わり天へと登る業火が生まれる。
範囲の全てを呑み込まんとするそれは呆気なくフォモールの大群を灰塵に帰した。
燃え盛る業火が周囲を照らす中、彼は戦闘の終わりを悟り静かに弓を下ろした。

彼こそが《遠雷（グロム）》の二つ名で呼ばれるＬｖ．５の冒険者《レイン・スヴァルト》。
これまで魔導士という戦場の花形が存在するため、弓使いなどの遠距離武装を用いる冒険者の地位は決して高いものではなかった。
〝弓使い〟は大成しない。

これまで冒険者の中ではそのような定説が囁かれていた。
なぜなら高位の冒険者であればあるほど大なり小なり魔法という技術は必ず取得しているからだ。
一を潰す弓矢と十を、百を一度に殲滅する魔法。どちらがより効率的かは火を見るよりも明らかである。
そんな常識をレインは完全に破壊した。
魔法が十を、百を殲滅するまでにはそれ相応の時間が要求される。ならばその間に十を、百を射抜けばいい。
弓も極めれば魔法と並ぶことができる。レインという弓使いの存在がそれを証明しつつあった。
いまや都市最高の弓使いと名高いレイン・スヴァルト。
彼の名は遠距離戦闘の覇者の一角として世界中に轟いていた。

◇

毎回の遠征でも難所と呼ばれる４９階層のフォモールの大群を突破したロキ・ファミリアは、一部の主力メンバーを除き、モンスターの産まれない安全階層（セーフティポイント）であるこの５０

階層で束の間の休息を取っていた。

「フ――ッ!!」

大半の者が簡易的な拠点にて遠征の疲れを癒すなか、レインは拠点から少し離れた場所で自身の愛剣を黙々と振るっていた。

弓の腕前に隠れがちになるがレインは優れた剣士でもある。ただ、主力メンバーに接近特化の者が殆どのため遠征などの場で披露する機会は少ない。

白刃に合わせるように束ねられた輝く銀髪も揺れる。舞のような美しい光景でありながら一切の無駄がない剣技は彼の合理性をよく表すものであった。

「精が出るな」

「……リヴェリアか」

背後から声を掛けられレインは剣を止め振り返る。

そこに立っていたのはロキ・ファミリアの副団長でありハイエルフの魔導士である《リヴェリア・リヨス・アールヴ》。

「だが、少しは身体を休めろ。何のためにフィンが冒険者依頼（クエスト）からお前を外したと思っている」

現在、レインとリヴェリアを除くファミリアの主力メンバーは51階層に降りていた。それは《ディアンケヒト・ファミリア》より依頼された冒険者依頼を果たすためで

ある。

依頼の内容は強竜（カドモス）が立ち塞がる泉から希少な泉水を採取するというものであり、立地条件もあり主力メンバーによる少数精鋭での立ち回りとなった。

しかし４９階層でフォモールの群れを退けるために尽力したレインとリヴェリアは疲労を考慮し今回の冒険者依頼のメンバーから外れた。

未到達領域を目指す遠征はむしろここからが大一番であるため、今回はリヴェリアの弁が間違いなく正しい。

「……ふん。貴様の指示に従ってやろう」

高圧的な態度は変わらないレインだが大人しく剣を鞘に収めた。

頑固で自分の意思を貫くことが多い彼だが、それなりに付き合いの長いリヴェリアが自身の身を案じて述べた言葉を無下には出来なかった。

「……ふふ。しかし、いまだに慣れないな。同胞とこうして肩を並べて会話を交わすのは」

エルフの王族であるリヴェリアは同胞の中でもよく知られた存在であり、彼女の実力も相まってエルフからは深い敬意を持たれている。リヴェリア自身もそんな同胞達の気持ちを汲み王族としての威厳を持った態度で接していた。

そんなリヴェリアにとって同族でありながら彼女に対して臆することがないレイン

という存在はとても新鮮なものであった。
「女王（アールヴ）と呼んで激怒したのは貴様だろうが……」
「当然だ。今の私はそのような立場にはないからな」
リヴェリアの言葉に仮面越しに額を抑えてため息をつくレイン。
レインのリヴェリアに対する態度は同胞からは少なくない反感を買っている。それでもレインは態度を改めることはしない。
リヴェリアが望んでいないと言うこともあるが、それ以上に彼自身が元からエルフの間では異端の存在であったからだ。
レイン・スヴァルトはハイエルフであるリヴェリア以上にエルフの中ではよく知られた存在であった。しかしそれはリヴェリアとは真逆の意味であるが。
〝呪われた仔〟。
かつての彼は同胞達の間でそのように呼ばれ、卑しい存在として扱われていた。

◇

「う、うわぁぁぁぁぁ――ッ!!」
その叫びはあまりに唐突なものだった。

場所が休息地帯（レスト・ポイント）としてよく知られる５０階層だったこともあり陣を張る全員に少なくない油断があった。

「……ッ!!」

リヴェリアからの命もあり仮眠を取っていたレインは素早く立ち上がった。

そして目を瞑り鋭く尖った耳に全神経を集中させる。

エルフの中でもとりわけ優れた聴覚を持つレインの耳は視覚では辿り着けない箇所にも感覚を広げることができる。

それにより広域に及ぶ俯瞰的な視野をレインにもたらしていた。この類稀な聴覚がレインの才能であり、弓の精度にも大きな影響を及ぼしている。

「――チッ！俺としたことがここまで接敵を許すとはッ……!!」

レインが感じ取ったのは野営地を囲うように群がる無数の気配。

その蠢く群れの発する〝音〟はレインの経験上では聞いたことがないものであった。

（新種か、それとも異常事態（イレギュラー）か。いや、それ以上に数が問題だ……。それにこれは……鉄が、皮膚が焼ける音。モンスターの持つ毒かッ）

耳に意識を傾けつつ装備を整え、素早く自身のいた天幕からレインは飛び出す。そして、この火急の事態に自身が対処する為に必要な人材のもとへと足を運ぶ。

「オータムッ!!」

レインは自身の探していた黒髪の猫人（キャットピープル）を見つけ声を張り上げて呼ぶ。
「レ、レイン!?」
彼女はその声に驚いたように黒耳をピクリと動かしてレインの方へ向いた。彼女の名は《アナキティ・オータム》。ファミリア内において彼女は二軍メンバーの中核を成す存在であり、癖の強い主力メンバーと下位の冒険者のパイプ役を担っている。
レインもまた実力以上に彼女を評価していた。
「撤退の指示を出すようリヴェリアに伝えろ！・モンスターが下から登ってきている以上、この先の遠征は不可能だ」
「けど団長達はどうするの!?・それにあのモンスターをこのまま放っておく気!?」
レインと同期であるアナキティであるが幹部の一人であるレインの指示に迷いなく意見を述べるのは彼女の強みでもあった。
「奴らはそう簡単にくたばる連中ではない。それよりも此方だ。武具が溶かされていてはジリ貧だ」
レインは冒険者依頼へと向かった主力メンバーの安否については露ほども疑ってはいない。それは信頼の裏返しでもあるのだが、本人は頑なに認めることはないだろう。
戦場へと耳を傾ける。次々と盾や鎧、はたまた迎撃にあたる者たちの皮膚や肉が焼けつく音がレインの頭の中を響いてゆく。

遠征に帯同するだけあって彼等も並の冒険者ではない。それでも問答無用に全てを溶かすモンスターが相手では部が悪すぎた。

「――迎撃に関しては俺一人で十分だ」

仮面の隙間から見える深紫色の瞳はとても鋭いものであった。

同期としてレインの実力をよく知る彼女は、これ以上何かを述べることなく彼の指示通り行動を始めた。

◊

それはまさに雨と形容すべきものであった。

ロキ・ファミリアの野営地を取り囲んでいた芋虫型のモンスター。その頭上を無数の〝矢〟が降り注いだ。とても一人の人間が放っているとは思えない密度でその矢の雨はモンスターを襲った。

それでも矢は決して闇雲に放たれたものではない。その一矢一矢が黄緑の皮膚を身に纏うモンスターの急所、内側に潜む魔石へと直進していた。

一射では足りない。矢が魔石に到達する前にモンスターの腐食液によって溶かし尽くされてしまうからだ。

ならばどうするか。レインの出した答えはシンプルだった。一射で開けた穴に二射目を撃ち込めばいい。

二射必殺にて屠ってゆく。

「分かってはいたけど……やっぱ無茶苦茶だわ」

大量の矢をレインのそばにある大籠に詰めながらアナキティはその光景を見てため息をついた。

先ほどレインがアナキティに述べた指示は二つ。一つはリヴェリアに全体の撤退指示を出させること。

もう一つは遠征のために用意された矢を全てかき集めること。

レインも自身の矢を用意しているが、今回は敵数が圧倒的に多く矢が不足するのは目に見えていたため取った措置である。

しかしその多量の矢もたった数分で半分を消費している。

威力と精度。そして神業的な速射。

この三つを高次元で掛け合わせた弓術こそが遠雷（グロム）の本領であった。

第二話［撤退戦］

――迷宮（ダンジョン）第５０階層。

地を埋め尽くす黄緑色。

後に巨蟲（ヴィルガ）と呼ばれる芋虫のようなモンスターはブヨブヨとした体躯を地に這わせながらロキ・ファミリアの野営地へと押し寄せている。

無数に湧く巨蟲であるが、野営地にはあと一歩到達できずにいた。

『――――――――――――アアア!!』

咆哮を上げる大群の最前線では次々とモンスターの断末魔と破裂音が響き渡る。

矢の雨が巨蟲の急所である極彩色の魔石に降り注ぎ、確実にその命を刈り取ってゆく。

ロキ・ファミリアが誇る弓使いが押し寄せる巨蟲の波をたった一人で押さえ込み一進一退の状況が作り出されていた。

――しかしその均衡も長くは続かない。

「レイン！もう矢が――!!」

「チッ！キリがないッ……！」

遠征のためにファミリアの物資として無数に用意された矢すら残り僅かとなってしまう。

対して巨蟲の大群は視界の端、５１階層へ下る急斜面までの道のりを完全に埋めていた。

そもそもレインほどの腕前があれば大概のモンスターは一矢で屠ることができる。しかしこの巨蟲は体内の腐食液が魔石を保護しているため突破するために二本目の矢を要してしまう。それに加え魔石を穿つ二射目の矢も巨蟲の断末魔とともに巻き散らかす腐食液により溶かされてしまい矢を回収することが不可能であった。

まあ幾百もの矢をものの十数分で無駄なく消費してしまうあたり規格外の速射であるのだが。

いずれにせよジリ貧。追い込まれているのは圧倒的に防衛側である。

『――迎撃に関しては俺一人で十分だ』

先ほどの大口を叩いた自身の発言がレインの脳裏を過ぎる。
「チッ。仕方ないか……」
目の前の光景を見て苛立ちながら小声で呟いたレインは手を底が見えている大籠ではなく自身の愛用する矢筒へと手を伸ばした。
一見すると中身が空に見える筒であるが、レインが筒の口に手を伸ばすと一本の矢が現れた。
この矢筒は魔道具（マジックアイテム）の一つであり、稀代の魔道具作成者（マジックメーカー）と称される《アスフィ・アル・アンドロメダ》の渾身の逸品である。この矢筒により積年の弓使いの弱点である用意できる矢の絶対数という問題は大幅に解消されたのだったが。如何せん並の冒険者が一生遊んで暮らせるぐらいの値が張るため、現状レインのみの一品ものであった。
「虫風情にこれを切るのは業腹だが――」
レインがつがえた矢。それは今までのものとは違い鏃が紅に染まっている。
そしてなにより矢そのものが強力な魔力を帯びていた。
『――――ッアアアア!!!』
レインの構える矢へ警戒したのか巨蟲はいきり立つように叫びその速度を上げた。
一斉にモンスターが押し寄せるなか、レインは冷たい瞳で弓を引き絞る。
しかしすぐには放たない。

この矢は一を射抜くものでは無い。十を、百を殲滅する矢。
滅多なことでは切らない奥の手。なぜならとてもお高いから。
（これを切る以上求めるは最上の結果のみ。ゆえに、限界まで引き付ける……!!）
目と鼻の先。
当然、本当の意味でそれほどの接敵をしているわけではないが。長年培ってきた冒険者としての本能が大きく警鐘を鳴らすほど、巨蟲はレインの面前まで迫っていた。
そして狙い通り弓を引き絞る右腕の力を解放しようとした瞬間――。

『――――――ッ!!』
巨蟲の群れは突如、その動きを止めた。
それを見てレインも弓を下げる。

「――なるほど。そう言う仕組みか」
得心した様子のレインはバックステップで素早く距離を取りながら奥の手である矢を筒にしまう。そして通常の矢を装填と同時に二連射した。呆気なく一匹の巨蟲が絶命した。
「しかし全く……」

呆れたような口ぶりのレイン。その視線はキャンプへ押し寄せる大群の最後方へ向けられていた。

エルフの中でも際立って発達した聴覚がその声（詠唱）を聴きとっていた。

「【目覚め（テンペスト）よ】」

レインもよく知る《剣姫》の詠唱であった。

その声音に続くように見知った七つの気配をレインは感じる。

「――ようやく戻ってきたか」

口調とは裏腹に僅かに安堵の笑みを溢すレイン。

その視線の先には巨蟲の大群を次々と屠ってゆく冒険者たちの姿。

冒険者依頼（クエスト）へ向かっていたロキ・ファミリアの主力メンバーが５０階層へ戻ってきたのであった。

その後、巨蟲の群れは呆気なく蹂躙されていった。

それも当然のことだろう。相手は《勇者（ブレイバー）》や《剣姫》と言った世界に名を轟かせる第

一級冒険者達。
幾ら凡ゆる物を溶かし尽くす体液を持つモンスターと言えど彼等ほどの戦闘力と経験値が有ればある程度対処ができる。
「【ヒュゼレイド・ファラーリカ】!!」
数百、数千の魔力により生じた火矢が僅かに残存した巨蟲の群れに降り注ぐ。
《千の妖精（サウザント・エルフ）》と呼ばれるエルフの少女の魔法によって蹂躙劇は幕を閉じた。

後輩である少女が生み出した光景を見て、レインの唯一仮面に覆われていない口元が複雑に噤んでいた。
（相変わらず派手に放つ。アレだけの魔法が俺にあればどれだけ――）
そこまで内心で呟いてレインは自嘲気味に笑った。
（下らない夢想だ。ガキの頃から一つも変わっていない。全く、リヴェリア辺りに知られれば灸を据えられるな）
巨蟲の大群に追い込まれいつになく感傷的になるレイン。彼は幼少期の記憶ゆえに同胞であるエルフに暗い感情を秘めていた。
憎しみと嫉妬。
奥底で渦巻き続ける黒い感情。

その感情に身を委ねていたかつてのレインはとても荒れていた。
それでもロキ・ファミリアに入団して自身の内で燃え盛る業火を御する術を学び、表面的には落ち着くことができるようになった。
それでも底で燻る火を完全に消し去ることは未だに出来てはいない。
とりわけエルフの中でもとりわけ優れた才を持つ少女には複雑な思いを抱いていた。

ふと、そんな彼の頭を黒髪の猫人（キャットピープル）は後ろから軽くチョップした。
痛みすらないものであったが自身の頭に触れながら背後を振り返った。
「そんな顔しないの。レフィーヤが頑張ってるのは私たちもよく知ってるでしょ？ならそれでいいじゃない」
あっけらかんとそう述べるアナキティ。
同期の一人であり苦労を共にした彼女だからこそ示せる距離感があった。
「……俺は、そんなに分かりやすいか？」
少しだけ驚いた表情を浮かべたレインは自身の顔に張り付く仮面を抑えながらアナキティに尋ねた。
同期でありそれなりに信頼を置いている彼女に対しても心の底にある黒い感情について述べたことはない。

それを知ってるのは主神であるロキとファミリア最古参の三人だけだ。
「当然よ。私もラウルも貴方とは何年の付き合いだと思ってるのよ。気がつかないはずがないわ。まあラウルは遠慮して口にしたりはしないでしょうけどね」
「ふっ……違いないな」
互いに《超凡夫(ハイ・ノーピス)》の二つ名で呼ばれる腰の低い同期の姿を思い出す。少しだけ穏やかな笑みを浮かべたレイン。
その内側で燃え盛ろうとしていた炎がゆっくりと鎮まってゆく。
「――すまない。迷惑をかけた」
「べ、べつにお互い様でしょ。今日だって貴方がいなければ私達は犠牲を覚悟して戦わなくちゃいけなかったんだしっ」
レインの素直な言葉に狼狽え後ろを向くアナキティ。
後方でリヴェリアの指揮の下に撤退を完了した仲間達へと目を向けながらそう述べた彼女の首筋はほのかに赤くなっていた。
だがここは迷宮(ダンジョン)。それも深層と呼ばれる領域だ。
「――――ッ!?」
穏やかな時間はそう長くは続かない。

「ど、どうしたの？」
　レインが不意に殺気立ちながら５１階層へ向かう急斜面に向けて鋭い視線を送りアナキティは動揺した。
「――――来る……!!」
　彼の聴覚が聴き取ったのは地底より響く轟音。これまで野営地を強襲していた巨蟲の群れを上回る存在感。
「なによ、あれ……」
『――――――――アッ!!!!』
　階層全体に響き渡る人ならざる叫び声。
　５１階層への道行を繋ぐ急斜面を破壊しながらそれは姿を現した。
　６Ｍ（メドル）にもなる体躯。黄緑色の皮膚ながら上半身は巨大な女性を連想させる姿であったが、その下半身は先ほどまでレインが苦汁を飲まされていた巨蟲そのものであった。
「――あれが本命か」
「あ、あんなのが破裂したら……」
　ぶくぶくと膨れる巨体。その体内に多大な腐食液が詰まっているのは容易く想像ができた。

「相変わらずだな。フィン」

巨躯を誇る女体型のモンスターの最も近くにいる集団。その中でも最も背の低い小人族（パウルム）の冒険者に向け何かを察したようにレインは呟いた。

彼こそがロキ・ファミリアの団長であり《勇者（ブレイバー）》の二つ名で呼ばれる《フィン・ディムナ》。

レインが最も信頼をおく冒険者である。

この局面において勇者の下した選択は――

◇

「総員、撤退だ」

短く告げたフィンの言葉に即座に反応したのは二人。

「おい、フィン!?逃げんのかよ！」

「あのモンスターを放っとくの!?」

狼人（ウェアウルフ）の《ベート・ローガ》とアマゾネス姉妹の妹《ティオナ・ヒリュテ》である。

ほかの者も声には出さないがほとんどの者がフィンの命令に納得してはいなかった。

「僕も大いに不本意だ。でも、あのモンスターを始末して、かつ被害を最小限に抑えるに

はこれしかない。アイズ。あのモンスターを討て」

《剣姫》と呼ばれるヒューマン《アイズ・ヴァレンシュタイン》の前に立ちフィンはそう告げた。

「ま、待ってください、団長!?」

「……ラウル。レイン達に撤退の合図を出してくれ」

アイズがその命令に首を縦に振ろうとした瞬間、彼女を誰よりも慕うエルフの少女《レフィーヤ・ウィリディス》は悲鳴を上げるように異を唱えた。

そんなレフィーヤの言葉を無視するフィンはサポーターとして帯同した《ラウル・ノールド》に指示を出す。彼も彼でフィンの決定に思うところがあったが、その気迫に圧倒され「は、はいっス」とだけ答えて準備を始めた。

「ねぇ、ちょっとフィン!?なんでアイズ一人だけなの!?あたしもいくよ!」

「女にケツを守られるなんて、なおさら冗談じゃねぇぞ!?」

「団長、私からもお願いします。ご再考を」

ティオナとベート、そして普段はフィンに従順である《ティオネ・ヒリュテ》までもがフィンの命令に食い下がる。

それも残されるアイズを思ってのこと。

しかしそれでも――。

「二度も言わせるな。急げ」
こうなったフィンは梃子でも動かせない。感情論では決してフィン・ディムナを動かせない。
それにアイズだけがこの場で明確に巨蟲に対抗手段を持っている。フィンがアイズを指名したのは十分な勝算があってこそ。
ゆえにフィンを動かすには明確な合理性が必須であった。

◇

アイズ・ヴァレンシュタインが巨躯を誇るモンスターに向け単独で疾駆するなか、フィン率いる他の者は撤退を進め野営地の目前に辿り着いた。
防衛を務めたレインや後退の指揮を担ったリヴェリアの尽力もありその場所はすでにもぬけの殻となっていた。
ただ一人を除いて、であるが。
「撤退の合図は見えていただろう。レイン？」
腕を組みながらその場に立つレイン。既に撤退の合図に従ったアナキティの姿はない。

あえてこの場に残ったレインにフィンは厳しい目を向ける。
「フィン。貴様の作戦、その勝算を少し上げてやろうと思っただけだ」
「その必要はない。あのモンスターはアイズ一人で対処可能だ」
レインの言葉をキッパリと否定するフィン。
二人の間にはどこかピリピリとした雰囲気が漂っていた。
効率重視で何処か似通った思考を有する二人。ティオネ程では無いがレインがフィンの指示に異を唱えるのは珍しい光景であった。
「俺ならあのモンスターの影響を受けない距離でも援護ができる」
鋭い視線を向けるフィンに対して臆することなくレインは断言した。
「……確かに君なら可能だろう。だがアイズの強みは機動力を生かした剣技だ。君の矢は彼女の足を殺しかねない」
レインの提案に僅かに黙考したフィンだが、すぐさま生じるデメリットを挙げた。
現状でも緑風に乗るアイズは舞うようにモンスターの周辺を飛び交っていた。仮にアイズが背後から放たれた矢を考慮に入れながら戦闘を行えば、その風のように自由な動きが阻害されてしまうだろう。
フィンの言うことは至極最もであった。
「――なら一矢だけ。それでダメなら俺も大人しく引き下がろう」

フィンはその言葉でレインの意図を汲み取った。
本来、レインという弓兵の最大の強みは圧倒的なまでの速さで為される連射にある。
そんな彼が敢えて一射という制限を設けた。
「……君がアレを自主的に使うなんて珍しいこともあるね」
「フン。矢の大半も蟲共に溶かされた以上、今更出し惜しんだところで何も変わらん。どの道、貴様らの到着がもう少し遅れければ切らざるをえない状況になっていた」
レインの言葉にフィンはため息を吐き諦めたように笑みを浮かべた。
「いいだろう。ただしやるからには外すことは許さない」
「無論だ。この程度の距離で外すなどありえん」
フィンからの指令に堂々と断言するレイン。
アイズがモンスターを意識的に遠くに引き離していることもあり、アレほどの巨大さを誇ったモンスターも野営地からでは並程度のサイズにしか見えない。
ましてやそのモンスターの周囲を高速で飛び交うアイズの姿などまともに目視で捉えられない。
それでも迷いなくレインは矢を筒から取り出した。
「えー!なんでー!!レインだけズルいー!!」
「そうよ!そもそも私の団長に偉そうな口叩くんじゃないわよ!!」

矢を構えるレインに文句を叫ぶアマゾネス姉妹。相変わらずのティオネの発言にフィンは苦笑いを浮かべた。
「黙れヒリュテ。集中している」
「ヒリュテでまとめんなー!!」
レインの雑な扱いにウガーと激怒するヒリュテ姉妹。
その光景を見ていた狼人は苛立つようにレインに言い放った。
「弓しか能がねぇんだからさっさと撃てや。クソ仮面」
「尻尾巻いて逃げ帰ってきた犬風情がよく吠える」
「ああッ!!?」
ベートの口撃に間髪入れずに応酬するレイン。
二人の関係を一言で表すなら水と油。決して相入れない間柄であった。
そのレインの返しに飛びかかろうとするベートを丸太のように太い腕が止めた。
「あれだけの啖呵を切ったのじゃ！さっさと矢を放たんか、バカタレ!!」
ここまで静観を貫いてきた最古参のドワーフ《ガレス・ランドロック》はあまりに気の抜ける光景に怒りを爆発させる。
「ああ。わかっている」
それだけ述べレインは弓を引き絞り矢を構える。

その矢を中心に膨大な魔力が周囲に帯び始める。
先程の矢と違いその先端は蒼色に染まっていた。
「この魔力量……あれは一体……?」
「アレは魔剣の亜種さ」
いち早く魔力の変化を感じ取ったレフィーヤは小さく呟く。彼女の疑問に隣に立っていたフィンが明瞭な声で答えた。
魔剣とは魔法と同じ技能を再現する武具のことである。例え魔法を使えないものでも魔剣を振るえばその奇跡を再現することができる代物だ。
だがレインの持つ矢は通常の魔剣とは僅かに違う。
「亜種、ですか?」
「ああ。通常の魔剣は複数回使うことができるだろう?アレはその魔剣が持つ魔力を一撃に集約した矢だ」
魔剣はその武器が持つ魔力が尽きるまで数回行使することができる。
しかし矢という武器は複数回の使用を前提とした武器ではない。その為、あの矢はあくまで一撃の威力を追求した魔剣。
この矢をレインと作り手である《椿・コルブランド》は魔弾と称していた。
「故にその一撃は、高位魔法の域にある」

「ハァッ――――!!」
蒼色の軌跡が流星の如き速度で放たれた。

◇

「ハァ……ハァ……!!」
複数の器官から放たれる無数の腐食液。それに加えて女体型の二対の複腕から生じる爆粉。
殆ど隙の無い波状攻撃によりアイズは攻め時を見つけられずにいた。
『――――ッァァ!!』
「風よ」
叫喚を上げモンスターは腐食液を吐き出す。
アイズの声に応じるように彼女の纏う緑風が勢いを増し、向かってくる腐食液を弾き飛ばした。
「――――ッ!!」
その瞬間、溜めを行い一点突破の構えを見せるアイズだが、自身を穿とうとするアイズの動きを悟ったモンスターは間髪入れずに爆粉を撒き散らした。

風に乗り一瞬で爆炎の領域を退くアイズ。しかし先程から変わらぬ状況に、人形のような無表情にも少なくない焦りが見受けられた。

突如、後方の上空を高速で飛来する魔力をアイズは感じた。

「レイン？」

蒼色の閃光を放つ矢を見てアイズは呟く。

それはモンスターの中心へと一直線に向かった。

アイズに遅れて女体型もその矢に気が付き咆哮をあげようとするが、もう遅い。

「――――!!??」

矢がモンスターに到達した瞬間、鏃に封じられていた膨大な魔力が一気に解放され、黄緑色の表皮を一瞬で白銀に染め上げる。

大規模な氷結の魔法を身に浴びたモンスターの上半身は完全に動きを止めた。

『今だ。やれ！』

「……!!」

あまりに一瞬で景色が塗り変わった状況に呆けてしまったアイズは聞こえるはずのない声を聞き、自身の愛剣をモンスターへ向ける。

「ふう……」

重心を極限まで下げ、まるで矢を引き絞るかのように剣を構え一つ息を吐いた。

そして神風の如く一瞬で加速した。
暴風を纏ったアイズの突貫。
彼女の魔力に反応したモンスターは力尽くで氷から解き放たれようと動き出す。
『――――――ッァァ！』
しかしアイズの渾身の一撃を受け止めるには間に合わない。
「リル・ラファーガ」
風の矢となったアイズが女体型のモンスターを完全に貫き、予期していた通りモンスターは腐食液を広範囲に撒き散らしながら爆散した。
そのあまりの規模に遠巻きで見ていた彼らも少なからず不安になる。
しかしすぐにその中心地に風を纏った無傷のアイズの姿を発見し、激闘を見守ったファミリアの皆が大歓声を上げた。
この難局を乗り切ったロキ・ファミリアは無事に帰還の途につくことできたのであった。

第三話［遠征の帰途］

――迷宮（ダンジョン）第１７階層

新種のモンスターの出現により遠征の進攻を阻まれた《ロキ・ファミリア》の面々は地上への帰路についていた。そんな彼らの現在地は深層より遥か上方の中層域、１７階層であった。

「まだまだ行けたのに～。暴れたんないよ～」

「しつこいわよ、あんた。団長がもう何度も説明したでしょ？あのモンスターにやられて、物資が心許ないって」

今回の遠征の結果に口を尖らせるティオナを嗜めるのは姉のティオネ。

「でもさ～レインがキャンプ守ってたから武器も食べ物もけっこー残ってるじゃん……」

ティオネの言葉に納得のいかないティオナは淡々と前を歩くレインを見ながら呟く。

背後からの視線に気がついたレインは一つため息をついてから頭だけをティオナへ

向けた。
「はぁ……食料も武器も限界がある。あの虫共を相手に無策に消耗戦を挑むなら先に限界を迎えるのはこちらだ」
「けどけど！アタシは素手でも戦えるよっ！」
　食い下がるティオナに再びため息をつくレイン。
「……誰も彼もがお前達のような狂戦士ではない。少しは我慢を覚えろ、ヒリュテ」
「ちょ……！〝達〟ってもしかしてアタシも含めてんのッ!?」
「いつもいつもヒリュテでまとめんなー!!」
　レインの言葉にティオネとティオナはいつものごとくウガーっとは怒りを爆発させた。
　喚くヒリュテ姉妹達の前に苛立ちを募らせた狼人がズンズンと近寄ってきた。
「いちいちウルセェな。黙って歩けねぇのかバカゾネス共」
　ティオナが「なんだと～」とベートに応戦する横でレインが小さく口を開いた。
「――貴様こそ黙っていればいいだろう。全く、これだから躾がなっていない犬は困りものだな」
「あぁ!?いっぺん死ぬかクソエルフ!?」
「煩いぞ！いい加減にしろお前達!!」

獣人として優れた聴力を持つベートはレインの呟きを容易く拾う。面前に詰め寄りメンチを切るベートを仮面越しに見下ろすレイン。

相変わらずな二人に激昂したのはリヴェリア。フィンやガレスは後続の部隊を率いているため、レイン達を指揮している彼女であった。

しかしリヴェリアの叱責も遅く騒ぎ立つ彼等に引き寄せられるように複数の気配がロキ・ファミリアの前に姿を現した。

『ヴヴォオオオオオオオオッ!!』

赤銅色の筋肉質な体躯に分厚い石斧。そして目を見張るのは人体の天頂に乗せられた牛頭。

「チッ……《ミノタウロス》か」

「リヴェリアー、これだけいるし私達もやっちゃっていい？」

本来、中層域程度のモンスターが出現したところで第一級冒険者であるレイン達が手を出す事はない。むしろ遠征に帯同する第二級、第三級の冒険者にこのような機会に経験値（エクセリア）を積ませる事が大切であった。

しかし今回ばかりはミノタウロスの数が多い。

「ああ、構わん。ラウル、フィンの言いつけだ。後学のためにお前が指揮を取れ」

「は、はい！」

リヴェリアの指示に緊張した面持ちで応えるラウル。
その横をレインは通り過ぎながら一度彼の肩にポンと手を置いた。
「れ、レイン……」
ラウルは他の第一級冒険者達と共にミノタウロスの大群へ向かう同期の背を見た。
ファミリアの首脳陣からフィン・ディムナの後釜と目されているラウルだが、彼は事あるごとに同期のレインと比較されてきた。ラウルもまたレインと己を比べ自信を持てない節があった。
『しっかりな』
レインの背中から聞こえるはずのない檄がラウルに届く。彼は決してそのような類いの言葉を口にする事はない。
それでも同期として下級冒険者の時から背中を預けあってきたラウルは察することができた。
「……ッ！ぜ、前衛の人達はとりあえず一旦下がるっス！あの人達に任せるっスよ」
堂々と指揮を飛ばし始めるラウル。彼の指示に従いすぐさま前衛組は後退した。
代わりにミノタウロスの前に立ち塞がったのはロキ・ファミリアが誇る先鋭達。
愛剣を引き抜くレインの横にちょこんとアイズが姿を表す。

「弓は置いてきたの？」
「……ミノタウロスごときには不要だ」
本当は矢を消費し切ってしまっただけのレインであるが弓矢を使うほどの相手ではない事もまた事実であった。
「クソ仮面ッ！さっさと動けや！！」
アイズとレインが交わした僅かな会話に嫉妬するベート。
小言を呟こうとするレインだが後ろから鋭い視線を向けるリヴェリアの威圧を感じ取り、大人しくミノタウロスの群れへと向かった。
『ヴォオオオオオオオオッ!?』
瞬きの間にミノタウロスの半数を削ったレイン達。
圧倒的な力の差に容易く幕を閉じるかに見えた蹂躙劇だったが――。
「ええっ!?」
「お、おいっ!?テメェ等モンスターだろ!?」
第一級冒険者との隔絶した戦力差に恐怖を感じたミノタウロスの群れは一斉に身を翻したのだ。
モンスターの集団逃走というダンジョンでの数多の経験を有する第一級冒険者達ですら見たことがない光景に、思わず動きを止めてしまう。

「追え、お前達！」
リヴェリアの号令が響き、弾かれたように彼等はミノタウロスの背を追いかけた。
誰よりも早く動き出したのはレイン。彼は〝とある事情〟によりモンスターの例外的な行動に理解があった。
アイズやベート達も彼に追従するように駆ける。
「ちょっと、そっちは?!」
「チッ……！」
次々と背を見せるミノタウロスを屠っていくレイン達。
しかし体躯の良いミノタウロスが複数固まればダンジョンの狭い路地が塞がる。その為、ミノタウロスの殲滅にてこずってしまった。
処理しきれなかった複数の個体が上層へと至る階段に足を伸ばす。その光景にいよいよ彼等も慌て始めた。
一層、また一層と破竹の勢いでダンジョンを駆け上るミノタウロス。各階層に散らばった個体を討伐するために一人、また一人と散ってゆく。
そうこうしているうちに遂に最後の一匹は第5階層にまでたどり着いていた。
駆け出しの冒険者も多くいる領域にまで足を運ばせてしまった。このまま他の冒険

者とミノタウロスを遭遇させてしまう訳にはいかない。
「こっちだ……！」
類い稀な聴力によりミノタウロスの現在地をすぐさま把握したレインは迷う事なく走り出す。彼と同じくこの場まで到達したアイズとベートもレインに続いた。
『ヴォオオオオオオオオオッ!!』
「ほぁあああああああっ!?」
レインの耳でなくてもハッキリと聞こえた。怪物と人間、二つの叫声。
「っ！」
それを聞きアイズはレインとベートを抜き去り加速する。
彼等の面前に見えたのは、真っ白な白髪が特徴の小柄なヒューマンの少年。身に包む防具は管理機関（ギルド）からの支給品である貧弱なものであった。
「ド素人じゃねぇか!?」
そんな駆け出しの冒険者に向けて今にもミノタウロスの石斧が振り下ろされようとしていた。対する少年は深紅の瞳を見開き目の前の光景に恐怖のあまり硬直していた。
（アイズも一歩間に合わない……ならば……）
レインは全速力での疾走から一転、その場で急停止。
その勢いを保ったまま剣を持つ手を弓の要領で引き絞り、力強く愛剣を投擲した。

遅れて雷鳴のような音が周囲に響く。
レインの投擲した剣は駆けるアイズを雷速の如き速度で抜き去り、石斧を持つミノタウロスの右腕へと一直線に向かった。
『ヴ……ヴォオオオオオオッ!!??』
ミノタウロスの腕は、剣の投擲により文字通り爆散した。ついでとばかりに石斧も大きくひしゃげてレインの剣ごと壁に突き刺ささっていた。
レインとミノタウロスの間にはそれなりに距離があるため、本来ならただの投擲でこれほどの破壊力を生み出す事はない。
しかし、レインは自分の持ちうる弓矢に補正をかけるスキルを疑似的に剣で再現することにより威力を上昇させた。
『ヴォオオオオオオ!?……ヴぉ?』
「……え?」
遅れて現れる痛みに咆哮を上げるミノタウロスを追い付いたアイズが一刀のもとに斬り伏せた。
アイズの刻んだ軌跡に沿ってミノタウロスの半身が崩れ落ちる。
ミノタウロスの血飛沫を一身に受けた少年へ向けアイズは手を差し伸べた。
「……大丈夫ですか?」

少年はアイズへと目を向けたまま硬直している。
さすがのアイズも少年の反応には困惑した。
「あの……立てますか？」
「だっ……だぁあああああああああああああああ!?」
少年は全速力でアイズから逃げ出した。
その姿に彼女はぽかんと立ち尽くす。走り去っていった方向から聞こえる少年の奇声だけがこの場に木霊していた。
「……」
「……っ、……っっ、……くくっ！」
呆然とするアイズの姿に腹を抱えて笑いを堪えるベート。
一方のレインはというと。
「……」
壁から引き抜いた自身の愛剣を無言で握りしめていた。その刀身の先端はよく見ると僅かに歪んでいる。
彼のスキルの威力に刀身が持たなかったのだ。
（矢や諸々アイテムの補充……それに加えて剣の修理……）
そこまで心の中で呟きレインは明後日の方へと目を向けている。

たった今、彼の赤字が確定したのであった。

◇

「――おっかえりぃいいいいいっ！」

ダンジョンから地上に帰還しロキ・ファミリアの本拠（ホーム）である《黄昏の館》に到着した面々。

合流したフィンの合図で館の門が開く。開門を待ちわびたとばかりに中からは両手を広げた主神が立っていた。

「みんな無事やったかーっ!?うぉーっ、寂しかったーー！」

彼女は男性陣には目もくれることなく女性陣のもとへとまっしぐらに突き進んだ。

彼女の嗜好もありロキ・ファミリアは女性冒険者の比率が高い。その為、男性陣は肩身が狭い場面が多々ある。

ロキのターゲットとなったレフィーヤが押し倒されるなか、フィンはいつも通りの彼女にゆっくりと近づく。

「ロキ、今回の遠征で犠牲者はなしだ。到達階層も増やせなかったけどね。詳細は追って報告させてもらうよ」

「んんぅー……了解や。おかえりぃ、フィン」
「ああ。ただいま、ロキ」
にヘラっと笑みを浮かべる彼女こそがこのファミリアの主神たる《ロキ》。
言動こそろくなものでないが、彼女が子に見せる愛は紛れもない本物であった。
次々と皆に労いの声をかけてゆくロキ。
当然のようにレインの下にも近寄ってきた。
「なんやなんや随分元気なさそうやな？レイン」
「……そんなことはない」
自身にひっついてくるロキを厄介そうに引き剥がそうとするレイン。力を込めないあたり彼なり弁えているのだ。
「まあどうせ〝コレ〟やろ？」
ふひひと見透かしたような笑みを浮かべるロキは親指と人差し指で丸を作る。彼が目に見えて落ち込んでいる時は大抵お金絡みの問題である。まあ他の悩みに関しては表に出そうとすらしないが。
「……違う」
「おっ当たりやん！残念やったなー！レイン！うちらに嘘を通じん――って、い、でででで!!くひ、くひ、ひあい!!」

ロキに心の内を見透かされるレイン。
昔から口で勝ったためしがないため彼女を両頬をつねり黙らせた。
「――ひだいっくひなうなっあう!!」
「……その辺にしておけ、レイン」
「……チッ」
リヴェリアの諭しに従い仕方なく両手を離したレイン。「うげっ」という声を上げながらロキはその場に倒れた。
ロキがレインに絡み自爆するのは昔からあるいつもの光景であるため他の団員は気にする素振り見せなかった。
レインは呆れたようにため息をつき、ロキに目を向けることなく館の中へと足を進めた。
「――痛たたた。ふぅ……おかえりぃ、レイン」
そんなロキの小さな呟きに、レインは耳をピクリと動かしてから右手を上げて応えた。
ロキ・ファミリアの食事はロキの方針もあり基本的には団員全員で揃って摂っていた。

その為、館に用意された大食堂は朝夕の食事の時間になると非常に混み合っていた。
いくつもある食卓用の長机を囲み団員達が談笑を広げる中、ポッカリと大食堂の角にある机だけは異様な雰囲気を醸し出していた。
八人がけの長机の角と角を占拠してるのは二人。
レイン・スヴァルトとベート・ローガである。
片や弱者を嘲笑い見下す一匹狼。
片や食事中でも仮面を外さない陰険エルフ。
普段はラウルやアナキティがレインを同じ卓に無理やり引っ張る為この現象は起きないが、遠征後という特殊な状況もあり生じてしまった組み合わせ。
もはや関わるだけ損なので件の二人すら視界に入れていない。

酒が周り始めたベートはハッと嘲笑を加えてからレインへと視線を向ける。
「――相変わらず気持ち悪りぃぐらい葉っぱばっか食ってんなァ?この際、庭の草でも食ったらどうだ?」
菜食主体の食事の多いレインに向けてベートの先制パンチが入る。
「葉っぱだの草だの……違いのわからん貴様にはゴブリンの肉の方が似合ってるぞ」
当然の応酬をするレイン。

毎度の如く繰り返される二人の言い争いは徐々にヒートアップしていく。
「――酒が入ると随分と強気になる。貴様の底が知れるな」
「ハッ！テメェみてぇな金欠じゃ酒も満足に飲めねぇだろうな!?」
「……ここで死にたいようだな、犬」
「その面引き千切ってやろうかァ!?クソエルフッ！」
取っ組み合いすら始まるのではないかという状況。
だがこれまで誰も近寄らなかった机にズンズンと詰め寄る一人の気配。
「良い加減にしろ!!子供か貴様らはッ!!」
「ババア！テメ――ッ!?」
「クッ……!!チッ……」
ロキ・ファミリアの誇る母親（ママ）の鉄拳制裁が降り注いだ。
脳が揺れるほどの衝撃に二人は一瞬で沈黙した。
「ふ～おっそろしいわ～」
リヴェリアの迫力に感想を述べるロキ。彼女は何かを思い出したかのように手を叩き団員達へと顔を向けた。
「忘れてとったわ。今日中に《ステイタス》更新したい子おったら、うちの部屋来てなー。明日とかまとめていっぺんにやるのも疲れるし。そうやなー、今晩は先着十人で！」

気まぐれな主神らしい発言だが毎度のことなので皆、気にすることはない。
レインは後頭部をさすりながら顔を上げ、全く同じ動作で顔を持ち上げたベートと目が合う。
「……チッ」
お互いに顔を背け、残った食事を口の中にかき込み席を立った。
ここまで似通っていると実は仲が良いんじゃないかという噂すら団員達の間では流れている。まあ、そんなことはないが。
（……ステイタスの更新でも済ませるか）
レインは主神ロキの部屋へ向かい歩みを進めた。

◇

コンコンっと均一なリズムでノックをし、レインは扉の前で佇む。
『ちょっと待ってな～』
伸びきった声音が扉越しに聞こえる。
レインもいつも通りの先客がいることを理解している為、その場で大人しく待つ。
やがてゆっくりと扉が開かれる。姿を見せたロキは満足気な表情を浮かべていた。

「ふひひ、残念やったな～レイン。アイズたんの柔肌を拝めるのはウチだけの特権やわ～」
「どうでもいい。さっさと通せ」
　室内ではレインとロキの絡みに気に留めることなく手に持つ羊皮紙をじっと見つめるアイズの姿があった。相変わらず人形のような無表情だが、その瞳からは悔しさが見え隠れしている。
　大概ステイタスのタイミングがアイズと被るレインは、彼女が悔し気に自身のステイタスを眺める光景を何度も見てきた。
「んじゃレインもさっさと始めるか～。ほらほらとりあえず仮面取りぃ」
「……え」
　ステイタス更新の際のみ素顔を晒す事が主神の命令で昔から決められている。レインも大人しくロキの指示に従い仮面に手をかけるがそこで手を止めた。
　羊皮紙から視線を外し興味深々という目でレインを見つめるアイズへと視線を送った。
「……何をしている。さっさと出て行け」
「こらっレイン。少しはオブラートに包んだ言い方をしぃや。そんなんだからベートといっつも喧嘩になるんや」

「アレに関しては突っ掛かってくるヤツが悪い」
レインの言い回しに叱るロキだが彼は歯牙にも掛けない様子であった。
ベートに関してもレインの実力を認めているがゆえに〝とある事〟に思うところがあるだけなのだが本心を語らない為、拗れた関係になってしまっているのだ。
レインの態度に困ったように頭を掻くロキは困惑するアイズの方へと視線を向けた。
「ごめんなぁアイズたん。下がってもらってええかぁ？」
「分かりました……」
アイズが静かに退室していったのを確認してからレインはゆっくりと仮面を外した。
透き通った鼻筋に形の良い眉骨。エルフという種族柄、際立った容姿をしていた。だが、それ以上に目立つのは彼の瞳。
仮面をつけていた際は深紫色だった瞳は真紅に染まっており、縦長に鋭い瞳孔が刻まれている。
その瞳からは超越存在（デウスデア）であるロキですら気圧される威圧があった。
「んじゃちょいと始めよっか」
彼の本当の姿にケラケラと笑みを浮かべながらロキはレインのステイタスの更新を始めた。

第四話［ステイタス］

――オラリオ北区《黄昏の館》

複数の尖塔の並ぶ館。その天頂にあるロキの部屋ではレインのステイタスの更新が進められていた。

上裸となり丸椅子にかけるレイン。細身だが無駄なく鍛えられた白肌にゆっくりと触れる。

「んじゃちょいと始めよっか」

ロキが指を動かしていくとレインの背に刻印が浮かび上がる。

横書きで刻まれたそれは神血（イコル）を媒介とした神聖文字（ヒエログリフ）。様々な能力や可能性を眷属にもたらす神々の恩恵。

今、レインの背中に刻まれているのは現状のステイタス。そこからレイン自身が蓄えた経験値（エクセリア）をロキの手によって本人に還元していく。

「――ほいっ、とこれでいっちょ上がりや。紙に書くからちょい待っとってな」

レインの背中を滑らせていたロキの指が止まり、新しく背に刻まれた神聖文字を羊皮紙に共通語（コイネー）に翻訳して記していく。

ロキが作業をしている間にレインは服に袖を通し仮面を付け直す。

少し経ちロキがステイタスを記した羊皮紙を渡すためにレインの方へ振り向く。

「できたで～……ってもうお面つけたんか～。イケメンやのにもったいないなぁ」

「そんな事はどうでも良い。早く寄越せ」

「は～つれないわぁ。ま、ええわ。ほれ見てみぃ」

レインの冷たい態度に気にすることなくロキは羊皮紙を彼に手渡した。ゆっくりと書かれた内容へと目を向けていく。

レイン・スヴァルト

Ｌｖ：　５

力：　Ｂ　７２１→Ｂ　７２６

耐久：　Ｅ　４７５→Ｅ　４７８

器用：　Ｓ　９９９→Ｓ　９９９

敏捷：　Ｃ　６５３→Ｃ　６５７

魔力：　Ｉ　０→Ｉ　０

弓士：　F
耐異常：　G
狙撃：　G
《魔法スロット》
［――――――］
・本人の意向により無記載。
《スキル》
［妖精鋭感（フェアリー・センス）］
・聴覚に対する高補正。
・耳の触覚も鋭敏になる。
［雷轟一殲（ライジング・ボルト）］
・矢の威力・飛距離への補正。弓を引き絞れば引き絞るほど際限なく補正がかかる。
・剣技でスキルを擬似的に起動させる事が可能。

「……チッ」
レインの握る羊皮紙に皺が入る。
約二週間の遠征で深層域のモンスターを幾百と屠ったレインだがステイタスの上昇

は微々たるものであった。
（やはり〝此処〟が限界か……）
目を瞑り黙考するレイン。
遠征前にステイタスの更新を行った際も僅かな変化しか無かった。その為、ステイタスの頭打ちはレインも想定していた。
（ならば、やるべき事は一つ……）
レインが見据える先。
己の限界を超え、高次の器への昇華を目指す。その為に果たすべき〝偉業〟。
（狙う首は――）
「ふー」
「――ッ!?ロキ……!貴様ァ……!!」
鋭い視線で遠くを見つめるレインの耳にロキが息を吹きかける。その吐息が耳の先に触れ全身をビクッと震わせるレイン。
エルフの中でも類稀な聴覚を持つレインの耳は敏感な触覚も有している。ゆえに彼は昔からとても耳攻めに弱いのだ。
「にっししし相変わらずレインは可愛いなぁ」
レインから飛ぶ殺気にも一切動じる事のないロキは愛くるしい子供を見つめるよう

な目を彼に向けた。
「……なあ、レイン」
　悪戯っ子のような笑みから少しだけ寂し気な表情を浮かべるロキ。彼女の雰囲気の変化を察しレインは大人しく口を噤む。
「前を向き続けるんは悪いことやない。けど、たまには足を止めて後ろを振り返ってみるのも大事やで」
　ロキはずっとレインを見守ってきた。
　彼はアイズとは違う意味合いで強さへの渇望を持ち合わせている。とりわけ入団したばかりの頃は無茶無謀を繰り返してフィン達の悩みの種となっていた。
　今こそ表面上は取り繕う事が上手くなり理性的な印象を持たれがちだが、それでも時折危うい雰囲気を見せる事があった。
「……」
「アイズたんにも言ったんやけどな……つんのめりながら走りまくってたら、いつか必ずコケる。ウチはな、そんな子供達の姿を見たくないんや」
　何も答えないレインに諭すように述べるロキ。そんなロキの視線から逃げるようにレインは背を向ける。
「……俺は、」

レインには内に秘める野望がある。
誰にも言ったことがない。この先、誰かに言うつもりもない。なぜなら本人ですらそれが下らなく意味の無い願いだと理解しているから。
だが、それでも――。
「――俺は止まらない」
ロキの言葉を退けるようにレインは部屋を後にする。レインの背を彼女が寂しげな笑みで見つめていることを彼が気がつく事はなかった。

◇

「フッ――!!」
翌朝、まだ薄暗く日も昇り始めてはいない時間にレインは黄昏の館の中庭にて木剣を振るっていた。黙々と鋭い連撃を虚空に刻んでいく。
無駄が一切省かれた合理的な剣技。技と駆け引きという点に置いてオラリオ最高とレインが評している男の槍術がその剣には反映されていた。
幾度なく刃を振り続けたレインは、一度耳をピクリと動かしてからゆっくりと木剣を下げた。

少しの間を置いて、中庭に一人の影が姿を現した。
「……やはり来たか」
「……おはよう……レイン」
眠い目を擦りながら現れたのはアイズ。その右手にはレインと同様木剣が握られていた。
「眠いなら無理に来る必要はない」
「……この時間じゃないと、レインが付き合ってくれないから」
どっかの狼人（ウェアウルフ）が嫉妬しそうなアイズの言い分にレインは小さくため息をつく。
レインにとって昔からの習慣となっている早朝の稽古であるが、時折アイズもこのような形でレインの稽古に参加することがあった。
とりわけステイタスの更新をした後などにアイズはレインと剣を交えることによって調整を行う事が多い。だからこそ、レインもアイズの合流はおおよそ予測がついていた。
「……時間もあまりない。始めるぞ」
「うん」
木剣を構えるレイン。
その威圧を受け取りアイズも一気に覚醒し木剣をレインへ向けた。

「ッ――！」

得物を構える両者の視線が交差した瞬間、アイズが急加速し間合いを詰める。矢のような一直線の疾走、その勢いを乗せた高速の突きを放つ。

「――甘い」

「まだ……！」

アイズの動きを読み切っていたレインは刀身の側面を叩き軌道を逸らす。

それでも彼女はステップを刻みながらレインの周囲を駆け抜け不規則に剣撃を放ち続ける。

「――単調になっているぞ」

そんな無数に迫る剣を彼は全て叩き落としてゆく。

レインの剣技はアイズとは対極。相手の動きを全て読み切り到達する前に潰す。効率的かつ無駄のない守護の剣。

（……テンポを変えてくるか。だが、少しばかり素直過ぎるな）

レインはアイズの動きの変化を動き出す前から読み切った。

この高精度の〝読み〟を支えているのは彼の聴覚。彼の耳は呼吸音や心拍、筋肉の萎縮から関節の律動に至るまで身体の奥底で響く音を聞き取る。

身体から奏でられる複数の音が情報として伝わり常人では理解できない領域で初動

を読み切る事ができる。

「……クッ！」

アイズは緩急をつけながら縦横無尽に駆け抜け刃を振るう。

それでもレインは揺るがない。僅かな足捌きで回避を行い、無駄のない動作でアイズの剣撃を打ち消し続ける。

拮抗する両者であったが先に膝を屈したのはやはり――

「ハァ、ハァ……！」

「ここまで、だな」

アイズの方であった。

どうにか呼吸を整えようとする彼女の首筋にレインは軽く剣尖を添える。仮面をつけていて表情こそ分からないがその立ち振る舞いからレインの側に余力が残っているのは明らかだ。

この結果は両者の本来の実力を表すものではない。レインは弓を、アイズは魔法を使ってはいないからだ。仮にアイズが風を纏えば形成は一気に逆転する。

しかしそれでも純粋な剣技における競い合いではレインの方が一歩抜ける。アイズの剣は対モンスターに特化したものであるのに対して、レインの剣は対人に特化したも

のだからである。

「……ステイタスに頼りすぎだ。速度を必要以上に重視するな。常に相手を崩すことを考えろ。それから――」

その後もガミガミと続くレインの指摘にアイズは徐々にシュンとなってしまう。巷では《剣姫》とも呼ばれている彼女がその本領であるはずの剣技で負けるというのはなかなかに落ち込むのだ。

「……何でレインは……そんなに強くなれたの？」

年上であるが自身よりも後に入団したレイン。レイン同様、彼女も強くなるための努力を惜しんだことはない。ステイタスの成長にそこまでの差はないはずなのだ。それでも今レインはアイズに追いつきレベル5となっている。

特別なスキルがあるのか。特別な特訓をしているのか。彼の成長スピードの理由を知るためという理由もあり早朝の稽古を共にしているのだ。

「……経験値（エクセリア）とは何だと思う？」

「……？」

レインの突然の問い。

しかしアイズはその質問がどのような意味で尋ねられているかを理解できないため答えられない。

「自身の経験が数値として記録される事であるが……この数値は一定ではない。第一級冒険者（俺達）がゴブリンを数百、数千と屠ったとしてもステイタスが上昇することはない。だが、俺達が駆け出しだった頃はゴブリンと対敵するだけで数値の上昇があった」

そんな事は当たり前だ、と言わんばかりの表情を浮かべるアイズ。

「……要は何が言いたいかと言うとだな。経験値（エクセリア）の値はその時の条件により変動すると言う事だ。自分や相手のレベル。敵対数、戦闘環境、自身の得物、敵との相性……条件を挙げればキリがないだろう」

いまだ話が見えてこないアイズであるが次の彼の言葉にハッとさせられる。

「この条件の幾つかは俺たち自身で変えることができる」

「……どうやって？」

「例えばフォモールだが……俺達の実力があれば何も考えず奴等を両断することができるだろう……。だが奴等の魔石のみを正確に突き刺して仕留める。高速戦闘かつ大群が押し寄せる状況でこれは決して容易くはないだろう？」

レインの例えにアイズはコクンと頷きで答える。

「条件を変えるとはそういうことだ。戦闘方法や武具など俺たちに調整可能な部分に変化をもたらす事によってより条件を厳しくする。それを続けるなら自然と経験値（エクセリア）の値も変わっていく」

彼の言葉にアイズは目を見開いた。

自身が無我夢中にモンスターを屠っている間にレインは様々な事を模索していたのだと初めて知る。

「これは色んなことに言える事だが……お前達はいつも単純な武力にばかり目を向け過ぎだ。大切なのはいつも頭を回すこと。気合や根性などは二の次だ。いかに効率良く高みへ至れるかを考えろ」

「……どうすれば……強くなれるか……」

剣においても弓においても正確さという一点においてレインはロキ・ファミリアの中でも頂点にあった。その絶技の根幹を支えている部分は普段からの試行錯誤にあった。

「心配するな。お前はまだ未完成だ。まだ幾らでも強くなる余地はある」

誰よりも強さに対して思考を重ねた男の断言はアイズの内側にスッと溶け込んでいった。

「……うん。やってみる」

そんな言葉が自然に出るくらいにはアイズの心は既に前を向いていた。

◇

ロキ・ファミリアの面々は団員ほぼ総出で遠征の後処理を行なっていた。ギルドへの遠征の結果報告に始まり、戦利品の換金、武具の整備やアイテムの補充など遠征後にやるべきことは多岐に渡る。

幹部も含め団員達に様々な役割分担がなされる中、レインはフィンの命を受け北西のメインストリートへと足を運んでいた。

「……フン」

カンッ、カンッと均一な金属音が響く建屋の前でレインは足を止め、躊躇いなく中へ踏み込んでいった。

鉄の香りと熱気が充満する工房へと足を進めるとレインの目的の人物が槌を力強く叩き続けている。

（……相変わらず此方に気づきもしないか）

目の前で作業を続ける鍛冶師の性質を理解しているレインは諦めて目を瞑り壁に寄りかかる。そしてリズム良く響き渡る槌の音へと耳を傾け続けた。

やがて最も力強く振り抜かれた音を最後に槌の響きは鳴り止んだ。作業の終了を察したレインは、自身の作品の完成に目を向ける件の人物へと近寄った。

「コルブランド」

「むっ……おぉっ!!来ておったのか!レイン!」

彼女は《椿・コルブランド》。鍛冶を生業とする《ヘファイストス・ファミリア》の団長であり、レインが武具の整備を一任する専属契約を結んでいる相手でもあった。
「幾つか依頼を頼みたい」
「ふむ。まあそれは構わんが、工房に引きこもりっきりで人肌の温もりが恋しいのだ。抱きしめてくれー」
屈託のない笑みを浮かべ両手を広げ近寄る椿。レインは彼女の言葉を完全に無視して鞘に収まる愛剣を突きつける。
《エリュシオン》の刀身が歪んだ。早急に直して欲しい」
「……むぅ。お主が武具の修理を依頼するなぞ珍しい事もあるものだな」
無視された椿は不満気にレインの愛剣を受け取り、その白刃を確認する。椿の目から見ても刀身には僅かなズレがあった。
「……いつまで此奴を使い続ける? 何度も言うが、この剣は明らかにお主のレベルには見合っていない。幾らお主の技量があっても此奴の限界はいずれ来る。手前ならお主に見合った――」
「コルブランド……分かっている」
椿の言葉をレインは完全に遮った。
本来、効率の塊とも言える男が持つ数少ない拘り。

それはかつての記憶。
エルフの里を飛び出した後、外の世界での最初の出会い。
『貴方、名前はなんて言うの？』
『うるせえ……殺すぞ、ババア』
『バ……!?口の聞き方からたたき込む必要がありそうね……クソガキ』
両手の指をパキパキと鳴らし近づく彼女。その腰には揺れる純白の剣。同郷の種族とは思えぬ言動に最初は驚愕したレインであるが。
その出会いは決して悪いものではなかった。

「……とにかく頼む」
レインがこの剣を無理に持ち続けることなど元の持ち主も望んではいないだろう。彼も剣そのものに関心があるわけではない。
エリュシオンはかつての誓いを忘れぬために持ち続けているのだ。
（俺は強くなる。誰よりも――）
目指すべき場所がある。その為に、力がいる。

「はぁぁ……手前はお主のために言っておるんだがなぁ……まあ承った。より鋭く鍛え上げてやる」

諦めたように両手を上げる椿。

まあ彼女の本音としては自分が作ったわけではない剣をレインが使っているのが気にくわないというのも少なからずあるのだが。

「……助かる。それから矢の依頼を頼む。ファミリアの分で５００。俺個人に２００……いや、１００頼む」

「なんじゃいつもより少ないのう？もしや金欠か？」

言い止まったレインの言葉に面白おかしく笑う椿。

「ふざけろ、貴様らの矢が高すぎるんだろうが……！」

「お主のステイタスに見合う矢だからのう……諦めろ」

苛立ちをぶつけるレインに先程の意趣返しとばかりにハッキリと告げる椿。ちょっとばかりスッキリした。

その後、諸々の日取りを決めレインは椿の工房を後にする。

「……仕方ない。向かうか」

あまり乗り気ではないレインは西のメインストリートにある《豊穣の女主人》という

酒場を目指し足を進める。一度すっぽかした際にレインは痛い目を見ているので大人しく向かった。

ロキ・ファミリア恒例の遠征帰還後の宴会が始まろうとしていた。

第五話［豊穣の女主人］

――オラリオ西区《豊穣の女主人》

西のメインストリートで最も繁盛している酒場《豊穣の女主人》にてロキ・ファミリア一行が集っていた。

主神のロキはもちろんのこと幹部から末端の団員までほとんどが勢ぞろいのためかなりの大所帯である。

「ミア母ちゃーん、来たでー！」

先頭を進むロキが酒場の扉を開けその店の主の名を呼ぶ。事前に予約をしていたため、ウエイトレス姿の店員が出迎えすぐに店内へと案内する。

「ここの料理美味しんだよね～。つい食べすぎちゃってさ～」

「てめえはいつも食べまくってるじゃねぇか……」

続々と席にかけていく面々、打ち上げともありファミリアの面々は普段とは違う和やかな雰囲気で会話を交わす。

「……」

そんな彼等の後ろを歩くレインは足を止めて明後日の方向を見つめる。彼は予約したロキ・ファミリアのために開けられたスペースではなく、他の冒険者が酒を酌み交わしている場所へ視線を向けた。

「レイン？」

「……いや。なんでもない」

そんなレインの姿に不思議そうに尋ねるアイズだが、レインは答えることなく用意される席に腰をかける。アイズも彼の様子にとりわけ気にすることなくその隣に座った。

皆が席につき飲み物が用意されたタイミングでロキは大きく口を開いた。

「よっしゃあ、ダンジョン遠征みんなご苦労さん！今日は宴や！飲めぇ!!」

ロキの音頭に合わせ皆が一斉に杯をぶつけ合う。和気藹々と盛り上がる中、隣でアイズがレインの方を見ながらちょこんと杯を上げたため、大人しく乾杯を交わした。

（やはり、ここの果実酒は美味だな）

普段はあまり酒を好まない彼だが、この酒場で出される林檎酒は唯一まともに飲める酒であった。

ちびちびとグラスに口をつけながら騒ぎ立つ団員達へと視線を向ける。

「団長、つぎます。どうぞ」
「ああ。ありがとう。ティオネ。だけどさっきから、僕は尋常じゃないペースでお酒を飲まされているんだけどね。酔い潰した後、僕をどうするつもりだい？」
「ふふ、他意なんてありません。さっ、もう一杯」
「本当にぶれねえな、この女……」
「うおーっ、ガレスー!?うちと飲み比べで勝負やー！」
「ふんっ、いいじゃろう、返り討ちにしてやるわい」
「ちなみに勝った方はリヴェリアのおっぱいを自由にできる権利つきやァッ！」
「じ、自分もやるっす!?」
「俺もおおおお！」「俺もだ!!」「私もっ！」「ヒック。あ、じゃあ、僕も」
「団長ーっ!?」
「リ、リヴェリア様……」
「言わせておけ……」

（相変わらず……酒が入ると馬鹿が増える……）
　他の冒険者もいる場で醜態を晒す彼等に、内心頭を抱えるレインだが、このような明るいロキ・ファミリアの雰囲気は彼も決して嫌いではないため口を挟むことはしない。

笑い声の絶えない愉快な時間が過ぎて行く。それなりの時間が経ち酔いが回ってきた者も少なくない。

遠征の話題で盛り上がっていた時、どこか陶然としているベートが何かを思い出したかのように口を開いた。

「そうだ、アイズ！お前のあの話を聞かせてやれよ！」

ベートの弁を直ぐに理解できなかったアイズは小首を傾ける。

「あれだって、帰る途中で何匹か逃したミノタウロス！最後の一匹、お前が５階層で始末しただろ!?そんで、ほれ、あん時いたトマト野郎の！」

話を振られたアイズ、そしてベートの述べている現場に居合わせたレインは彼が何を言わんとしているかを理解した。

「ミノタウロスって、１７階層で襲いかかってきて返り討ちにしたら、すぐ集団で逃げ出していった？」

「それそれ！奇跡みてぇにどんどん上層に上がっていきやがってよっ、俺達が泡食って追いかけていったやつ！こっちは帰りの途中で疲れていたってのによ～」

ベートは詳細を知らないティオナ達に説明していく。

「それでよ、いたんだよ、いかにも駆け出しっていうようなひょろくせえ冒険者（ガキ）が！抱腹もんだったぜ、兎みたいに壁際へ追い込まれちまってよぉ！可哀想なくらい震えがっち

まって、顔を引きつらせてやんの！」

（やめて……）

　アイズはなんとも言えない感情が溢れ、思わず隣に座るレインへ懇願するような視線を向ける。

「アイズが間一髪ってところで細切れしてやったんだけどな、そいつ、あのくっせー牛の血を全身に浴びて……真っ赤なトマトになっちまったんだよ！くひひっ、ひーっ、腹痛ええ……！」

　レインはアイズの視線に気がついてくれない。先程も目を向けていた店内の隅へと目線を向けたままだ。

「アイズ、あれ狙ったんだよな？そうだよな？頼むからそう言ってくれ……！」

「……そんなこと、ないです」

　目に涙を溜め大笑いするベートの言葉をアイズはどうにか声を絞り出して否定する。

「それにだぜ？そのトマト野郎、叫びながらどっか行っちまってっ……ぷくくっ！うちのお嬢様、助けた相手に逃げられてやんのおっ！」

「……くっ」

「アハハハハッ！そりゃ傑作やぁー！冒険者を怖がらせてまうアイズたんマジ萌えー!!」

「ふ、ふふふ……ご、ごめんなさい、アイズっ、流石に我慢できない……！」
　レフィーヤやロキ、ティオネなどのファミリアの面々だけでなく聞き耳を立てていた周囲の客からも笑い声が漏れる。
「しかしまぁ、久々にあんな情けねぇヤツを目にしちまって、胸糞が悪くなったな。野郎のくせに、泣くわ泣くわ。ほんとざまぁねぇよな。ったく、泣き喚くくらいだったら最初から冒険者になんかなるんじゃねぇっての。ドン引きだぜ、なぁアイズ？」
　ベートの言葉にアイズは口で応えられない。彼女はどうにか拳を握りしめて感情を抑えていた。
　ベートはそんなアイズの態度に気がつくことなく呆れたように言葉を重ねる。
「ああいう奴がいるから俺達の品位が下がるっていうかよ、勘弁してほしいぜ」
「――ふっ。品位、か」
　ベートの言葉にここまで無言を貫いてきたレインが鼻で笑った。彼が口を出したことにベートはあからさまに機嫌を悪くする。
「ああ？何が言いてぇ？」
「いやなに、品性の欠片もない貴様には似合わぬ言葉だと思ってな。そもそもミノタウロスは俺達が取り逃したモンスターだ。それを酒の肴にするなど、自らの恥を晒すことに他ならない」

レインの冷たい言葉に笑い声に満ちていた場の雰囲気が一気に暗くなる。声を上げて笑っていた団員達は皆、気まずそうな表情を浮かべていた。

「自分の身も守れねぇ弱者を擁護して何になる？雑魚を蔑むのが強者の特権だろうがッ！」

「これ、やめぇ。ベートもレインも。酒が不味くなるわ」

いつものようにヒートアップし始めようとした二人を見かねてロキが仲裁に入る。ベートの側はそれを聞き僅かに冷静さを取り戻しつつあったが――。

「強者か……少なくとも俺はこの場に強者など一人もいるようには思えない」

レインの言葉に空気が凍る。

ここにはオラリオ最強の一角、ロキ・ファミリアの主力が集う。第一級冒険者と呼ばれる彼等一人一人が自身の実力に少なくない自負を抱いていた。

「……テメェ、そりゃどういう意味だ？」

「言葉通りの意味だ、凶狼（ヴァナルガンド）。オラリオの歴史から顧みても俺達は強者の部類には入らない。せいぜいそこそこと言ったところだろう」

迷宮都市オラリオの千年もの間紡がれてきた歴史。神々の恩恵により数多の英雄がこの地で誕生していた。

フィンやリヴェリア、ガレスと言った最古参のメンバーはレインの言葉に難しい表情

を浮かべていた。
「そんな古臭え話なんざどうでもいいんだよッ！今の強者は俺達だろうがッ！」
「比較対象の問題だと言っている。貴様がそこら辺の駆け出しの冒険者と自分を比べてつけ上がるのは一向に構わん。が、ファミリア全体にその考えが浸透されるならさすがに困り物だ」
　レインは騒ぎ立つベートの方から視線をフィンへと移す。
「フィン。俺は現状に満足している組織に未来はないと思っている」
　彼の厳しい指摘にフィンは苦笑いを浮かべるだけにとどまる。そんなフィンも続く彼の言葉には少なくない驚きを抱いた。
「俺だけか？本気でゼウスやヘラの奴等を越えようとしているのは」
　レインの宣言に皆が息を呑んだ。酔ったベートですら口を開くことができないほどの雰囲気を彼は帯びていた。
　ゼウス・ファミリア。ヘラ・ファミリア。かつての迷宮都市オラリオの二大巨頭と言うべきファミリアである。今のオラリオには存在しないＬｖ．９やＬｖ．８などの団員が複数もいた。紛れもない伝説の存在である。
　彼等を知っている者であればあるほどこのような発言は決して口にはできない。
「――今回の遠征。俺達は何か一つでも成し遂げたか？異常事態（イレギュラー）があったとは言え、結

果は紛れもない敗走だ。俺達は負けたんだ、迷宮（ダンジョン）に」

あの時、無駄な犠牲を避けるために真っ先に撤退を進言したレインであるが、その実、誰よりも悔しさをにじませていた。

少なくとも遠征の結果に関しては打ち上げなどする気分にもなっていない。

「奴の発言に笑った者もよく考えておけ。俺達に下の者を嘲笑っている余裕が本当にあるのかどうかをな」

誰もが口を開こうとしないのを見たレインは場が冷め切ってしまった事もあり、「失礼する」とだけ述べて静かにその場を後にした。

彼の後ろ姿を見送ったロキはなんとも言えない表情で口を開いた。

「失礼するって……完全にお通夜になってしもうたやん」

「……彼には随分と難しい宿題を残されてしまったね」

変わらぬ苦笑いを浮かべるフィン。今回の件に関してはフィンも少なからずレインと同じように感じていた。ただ口にするならばこうなる事は目に見えていたためあえて何も言わなかった。

「また随分と大きく出たな……。だが、やつの口振り、まるで彼等を本当に知っているような言い草だったが――」

レインがオラリオに来た時期はゼウスやヘラのファミリアが衰退した後、暗黒期と呼

ばれる最中である。
噂で知っていたとしても、実物までは見たことがないはずなのだが――。
そんな時、酒場全体がいまだ静まり返る中、隅にいた一人の少年が動き出した。
「お代、ここに置いていきますっ！」
「べ、ベルさん!?」
店員の叫びと共に、白髪の少年が駆け出し、店の外へと飛び出す。
アイズは走り去った少年の姿を見て、目を見開いた。
（――!?あの時の……）
そこで初めて彼に全て聞かれてしまったことを彼女は悟った。
彼を傷つけてしまった。それが分かっていてもアイズは動き出すことができなかった。

◊

店を出たレインは、夜風を身に浴びながら閑静な路地を意味もなくゆっくりと歩いていた。
「……酔いが回っているのは俺の方だ。余計なことまで述べてしまった」

先程の発言は彼が普段から感じていた不満。

自分と他の団員では明らかにモチベーションが違う。それは当然なのだ。冒険者になった目的など人それぞれ。自分と足並みを揃えることを強要するのは正しいことではない。

「だが、俺は止まらない」

成し遂げたい野望がある。

その為にはこれまでオラリオの伝説を刻んできた英雄達をも越える力がいる。

（――たかがＬｖ．５で止まれるかよ）

「あ、あのッ!!」

後ろから走り寄ってきて少年がレインに声を掛けた。その存在を察知していたレインは驚くことなく少年の方へと振り返った。

「……何のようだ?」

「あ、ありがとうございます。さっき僕のことを庇ってくれたんですよね」

ベートが嘲笑を浮かべ大声を上げている時、レインとこの少年は一瞬だけ視線を交差させていた。

「別にお前を庇ったつもりはない。ミノタウロスの件は単純に俺たちの不始末だっただけだ。本来、此方が謝罪するのが筋だ」

「い、いえ！何も無かったので！僕は全然――」
「それでも、だ。すまなかった」
下級冒険者相手にレインは躊躇いなく頭を下げた。
少年はレインの思わぬ態度に慌てふためく。
「あ、頭を上げてください！この通り、全然大丈夫ですから!!」
慌て過ぎて何故か少年は細腕を曲げて力こぶを作ろうとする。まあ、全然盛り上がってないのだが。
少年の行動の甲斐もあってようやく頭を上げたレインであったが、二人の間には何とも言えない静寂が包まれる。
「――あのっ！」
「……何だ？」
一瞬の間があり、少年は口を開く。
「……どうすれば、強くなれますか？」
真摯な瞳で告げる少年の問いにレインは僅かに目を見開いた。
レインにとっても少年の抱く思いは決して悪いものには思わない。それでも見極める必要はある。
「なぜ強さを求める？」

少年の願い。その芯によってレインの述べる答えも変わってくる。
「……僕は……」
（さすがに早過ぎたか……）
レインの問いに少年は答えを渋ってしまう。レインは少年の様子に目を伏せる。
冒険者として大成する者には必ず芯となる目的意識が存在する。どんな試練に直面したとしても挫けぬ為の動機が不可欠なのだ。
「……辿り着きたい場所があります。例え分不相応な願いでも、僕は……僕は諦めたくない！」
少年の内から生じる叫びにレインは僅かに笑みを溢す。

かつてファミリアに入団する際にロキに述べた自身の発言が脳裏を過ぎる。
『なんで強うなりたいんや？』
『俺は誓ったんだ。必ず、越えてみせると』
白剣を掲げ宣言するレインをロキは快く歓迎した。
時は暗黒期。身元もまともにわからない子供を引き取るなど躊躇いがあるはずだが、何かが彼女の琴線に触れたのだろう。

レインは少年に静かに語りかける。
「早朝、日が昇り始める頃に都市北西の市壁上部に来い。お前が望むのなら、俺が冒険者として必要なものを教えよう」
「――よ、よろしくお願いします！」
緊張した面持ちで少年は頭を下げた。
本来、ロキ・ファミリアの幹部であるレインが他の派閥の団員と接触する事はご法度である。それでもレインは迷いなく少年に手を伸ばした。
どうしても過去の自分と少年を重ねてしまうため、放ってはおけなかった。
「レイン・スヴァルトだ。お前の名前は？」
「ベル・クラネルです。よろしくお願いします。スヴァルトさん！」
レインから差し伸べられた手にベルは応えた。
この少年は後にレインですら想像もできないほどの飛躍を遂げていく。
少年を覆う運命に、レインもまた巻き込まれてゆくのであった。

第一章【怪物祭（モンスターフィリア）】
第六話［兎の葛藤］

――オラリオ北西区　市壁上部

薄れてゆく夜色。空の下方にある霞んだ月が静寂に包まれた都市を照らす中、市壁の上では少年の咆哮が木霊していた。

「はぁぁっ！」

待ち構えるレインの下へ一直線に駆け抜けたベルは荒削りな動きで短剣を振るってゆく。

無手にて立つレインはたった一歩の動きで次々と振り下ろされる斬撃を回避した。

「――グッ！」

彼は不意に足を伸ばして、前がかりに攻めるベルを転倒させた。

倒れ込むベルはすぐに立ち上がれず顔だけをレインの方へと向ける。既に半刻近く激しく動き続けたベルは滝のような汗を流していた。

「刃を振るうことに意識を向け過ぎだ。視野が狭まっている。それに――」
ピッとレインの指先から小石が弾かれる。
高速で飛来するそれを疲労が蓄積したベルが躱せる筈もなく額の中央に直撃した。
「あがっ……！」
「倒れたならすぐに起き上がれ。モンスター共はお前が立ち上がるのを待ちはしない」
「は……はい！」
赤く腫れ上がった額の痛みにベルは顔を顰めるが、レインの指摘を受けすぐさま起き上がり短剣を構える。
「――行きますッ！」
「……」
地を蹴り再度向かってくるベル。その動きをレインは仮面越しに見つめる。
《豊穣の女主人》での出来事からは既に五日が経過していた。

◊

「痛ッ……！」
早朝の鍛錬を終えた僕は本拠（ホーム）である教会の地下室へと戻り、先ほどの鍛錬でできた傷

の手当てを行っていた。傷といっても僕が転倒してできた擦り傷がほとんどだ。
レインさんとの鍛錬を行うようになってから数日が立つけど、行っていることは短剣の素振りと避け続けるレインさんに攻撃を行うことの繰り返し――。
（……僕は、本当に強くなれてるのかな）
三日ほど前から神様が本拠（ホーム）を留守にしていることもあってステイタスの更新もできていない。だから余計に自分の成長に不安を感じてしまう。
そんな暗い感情をかき消すように僕はかぶりを振った。
（レインさんも冒険者の成長は小さな積み重ねだって言ってただろ。今できることをやっていくんだ……！）
師として親身に接するレインさんの言葉を思い出した僕は「よしっ」と一度気合を入れ直し力強く立ち上がった。
レインさんとの訓練により手に馴染んできた短刀を腰の鞘に刺す。
「行ってきます」
誰もいない本拠（ホーム）にそれだけを告げ、僕は扉へと手をかけた。
ボロボロな教会である本拠を後にした僕は慣れた足取りで路地裏を抜け、西のメインストリートへと辿り着く。

冒険者で溢れかえる大通り、その先にはつい先日に訪ねた酒場《豊穣の女主人》があった。どうやら開店前の準備をしているようでカフェテラスでは店員の人が忙しく働いていた。

「おーいっ、待つニャそこの白髪頭ー！」

白髪という単語に反応し振り返ると酒場の店員の一人であろう猫人（キャットピープル）の少女が此方へ大きく手を振っていた。

僕は自分に指を向けて確認すると、少女がコクコクと頷いたため小走りで近づいた。

「おはようございます、ニャ。いきなり呼び止めて悪かった、ニャ」

「あ、いえ、おはようございます。……えっと、それで何か僕に？」

「ちょっと面倒ニャこと頼みたいニャ」

彼女、アーニャさんの話を聞いた僕だが彼女の説明だけではいまいち理解できなかったので、後から来たリューと呼ばれるエルフの店員さんがフォローをしてくれてようやく状況が把握できた。

「……つまり、その怪物（モンスターフィリア）祭って言うお祭りに行ったシルさんにお財布を届ければ良いんですね」

「そうニャー。祭り見に行って財布忘れるニャんてシルはおっちょこちょいニャー」

やれやれといった様子であるアーニャさんから僕はシルさんのお財布を預かった。

さっそく東のメインストリートで行われているという怪物祭（モンスターフィリア）へと向かおうとした僕にリューさんから声がかかる。
「クラネルさん。〝彼〟との修練はどうですか？」
リューさんの言う彼がレインさんの事というのはすぐにわかったけど、一つ僕には気になることがあった。
「あの、どうしてそれを……？」
「クラネルさんが彼に目をかけられている、とミア母さんが」
ああ、成る程と僕は得心がいく。

四日前、レインさんとの修行が始まった日。僕は豊穣の女主人でお金を置いてそのまま出て行ってしまった事をレインさんに話した。するとレインさんからは思わぬ言葉が返ってきた。
『一度、顔は出しておいた方がいい。あの酒場……もとい、あの女傑を敵に回すのは得策では無い。今すぐ向かうぞ』
『は……はい』
仮面越しに見えるレインさんの目は僅かに震えているようにも見えたけど、きっと気の所為ですよね。

数年前、まだ荒んでいた頃のレインはいつものごとくベート絡みで騒動を起こし、酒場で主である《ミア・グランド》にまとめて叩き潰された。そのような経験（トラウマ）がレインにあったのだが、当然ベルが知る由もない。

そんなこんなで僕は再度、豊穣の女主人を訪ねた。

ちなみにレインさんも僕について来たが、入り口の手前で僕の話が終わるのを待っていてくれる事になった。

『あ、あの！』

『――ベルさんっ!?』

開店準備の行われているであろう店内に僕は意を決して声をかけた。すると顔見知りであるシルさんがひょこっと現れて僕の姿を見て驚きの表情を浮かべていた。

『昨日はすいませんでした。勝手に出て行ってしまって』

『……いえ大丈夫ですから。また、こうしてお会いできて嬉しいです』

彼女の呼びかけを無視して走り去ってしまった事もあり少なからず負い目を感じていた僕にとって、シルさんが暖かく微笑んでくれた事に少なからずホッとした。

不意にシルさんは思い出したように手を叩いた。

『あっ！そう言えばお釣りを返してませんでしたね！今、持ってきますね！』

『そ、それは大丈夫なんですけど！女将さんにも、一応一言……』

確かにお釣りをもらい忘れた事を少しだけ後悔したけど、さすがに後から渡されるのも恥ずかしかった事もあり、シルさんに女将さんとも話をしたい事を伝えた。
『分かりました。今、ミア母さんを呼んできますね』
『はい。ありがとうございます』
小走りで店内の奥へと向かって行ったシルさん。
すぐに奥の扉が勢いよく開き、件のミアさんが姿を見せた。ドワーフの中でも一層貫禄のあるミアさんは縦も横も僕よりも遥かに大きかった。
『なんだい坊主。朝のこんな忙しい時に人を呼び出すなんて』
『す、すいません。昨日お騒がせしてしまった事を謝りたくて……』
僕が腰を折って頭を下げると、ミアさんは腰に手を当てて感心したように笑みを浮かべた。
『ほお、アタシの料理を残して帰った輩だからどんなガキかと思ったが、なかなか礼儀はしっかりしてるじゃないか。いつぞやの生意気なクソガキとは違うね』
ミアさんの最後の一言に入り口の壁に寄りかかっていたレインさんの耳がピクッと動いた。後方で静観を貫くレインさんへとミアさんは目線を向けた。
『アンタが他所のファミリアの坊主の面倒を見るなんてどう言う風の吹き回しだい？』
『……なぜ貴様に教える必要がある？』

ミアさんの指摘に尊大な態度を示すレインさん。

正直、レインさんがなぜ親身に接してくれるのかは僕にも分からない。気にならないと言えば嘘になる。

『ウチの娘（シル）がこの坊主を気にかけてるようだからね。取って食おうとでもするつもりならさすがのアタシも黙って見過ごすわけにはいかないさ』

『……』

僕の肩に手を置きながらミアさんはそう述べる。力強さと同時に真心も感じられる手だ。だけど、ミアさんの目だけは鋭くレインさんを射抜いていた。殺気というべき視線を向けられてもレインさんは涼しげな表情を崩さない。

僕を挟んで睨み合う二人。少しの間を置いてからレインさんのため息が聞こえた。

『はぁ……仮に何か企てがあるなら同伴してこんな場所に訪れたりはしない』

呆れたようにミアさんに述べるレインさんは僕へと視線を向ける。その目はいつにも増して真剣なものに見えた。

『強くなりたいという渇望（ねがい）。その芯となる部分に共感するものがあった。ただ、それだけだ』

レインさんの言葉にミアさんは「へぇ」と感心したように笑みを浮かべた。

一方の僕は、遥か高みにいるはずのレインさんに評価されている事に驚きと共に嬉し

さが込み上げてきていた。そんな僕の背をミアさんは力強く叩き押す。
『これだけ期待されてるんだ。気張りな坊主!』
『は、はいっ!』
まるで初めから全部分かっていたかのようにニカッと笑みを浮かべるミアさん。そんな彼女の様子にレインさんが再びため息を吐いていた。
『まあそれに坊主はしっかり金を払ってるんだ。そこまで気にすることはないさ。寧ろ――』
再度、ミアさんはレインさんへと目を向ける。
『ウチのお得意さんの宴のムードを台無しにして売上を落としてくれたクソエルフには文句の一つでも言ってやりたいけどね』
『……それは、すまない』
素直に頭を下げるレインさん。仮面越しにも関わらず少しだけションボリしているように見える。
レインさんもそのお得意様の一人なんじゃ、と思ったけどミアさんの迫力に負けて僕は口を閉ざす事に決めた。

四日前の事を思い出していた僕。そんな僕の手足に残る擦り傷に目を向けたリュー

さんが落ち着いた声音で尋ねてくる。
「彼の指導は厳しいですか？」
「えっと……」
僕はリューさんの質問に言い淀んでしまう。
レインさんとの修行は朝早くから激しい動きをするため決して辛くないとは言えない。でも同時に、僕にレインさんの期待に応えるだけの才能がないのではないかと思ってしまっているからだ。
リューさんは僕の表情を見て何かを察したのか静かに語り始めた。
「……駆け出しの冒険者だった頃の彼は決して注目された存在ではなかった」
それはファミリアに所属していた頃のリューが知るレインという冒険者の過去。当時、暗黒期と呼ばれていた時期にとりわけ若手筆頭の冒険者として目されていたのはロキ・ファミリアの《戦姫》やアストレア・ファミリアの《疾風》であった。
それが今や《遠雷》の評価は個人としてではアイズと同等にまで至り、戦術的な評価では第一級冒険者の中でも上位に名を連ねている。生まれ故のハンデを持っているにも関わらずに、だ。
「彼は弛まぬ努力で強さを得た。技術だけではない、彼の足跡からも学べる事は多く有ると思います」

どんなに優れた冒険者にもベル同様、駆け出しであった時期がある。
そこから何を積み重ねていくかで結果は大きく変わっていく。
レイン・スヴァルトの歩みは痛快至極の英雄譚ではない。
泥臭く足掻き、血の滲む努力の果てに高みに登り詰めた凡人の軌跡である。
だからこそ彼だけが伝えられるものもある。
「貴方は、素晴らしい師を得た」
ずっと無表情に見えていたリューさんの表情。
レインさんの事を話す彼女の顔は少しだけ寂しげに微笑んでいるように見えた。

◇

ベルとの早朝の鍛錬を終えたレインはその足で北西のメインストリートにある椿の工房を訪ねていた。
椿が腕を組んで見守る中、レインはテーブルの上に置かれた複数の矢を一本ずつ手に取り確認をしていた。
「……なあ、手前の腕はそこまで信頼できんか？」
一時間近くも続くレインの確認作業に訝しげな表情で見つめる椿が呟いた。

「まさか。少なくともオラリオ一の鍛冶師だとは思っている。だからこうして仕事を頼んでいるんだろ？」

当然だとばかりに述べるレイン。

そこまではっきり称賛されるとさすがの椿も照れる。だが、認められているならば尚更、彼の行動に納得ができない。

「むぅ……ならどうしてそこまで徹底的に確認をするのだ」

「此方は金を支払っているんだ。矢の一本とて金額に見合わぬ粗悪品を見逃すつもりはない」

断固たる決意を浮かべるレインの姿に心底呆れた表情を浮かべる椿。

「……第一級冒険者とは思えんケチくさい理由だのう」

はぁぁと椿が大きなため息を吐く中、レインの厳しい品定めは続いた。

椿に注文していた矢１００本に加え修繕を頼んだエリュシオンが無事にレインのチェックを通過し、彼は椿の工房を後にした。

怪物祭（モンスターフィリア）が開催されているため自然と人の通りが東のメインストリートに流れる中、レインはさっそくダンジョンへと向かおうとしていた。

「――フン」

迷いのない足取りで進んでいたレインは日の光すら入り込まない細い路地の前で足を止める。そして視線だけを暗闇に包まれる通りへと向けた。

「……要件は何だ？」

人の気配を一切感じない空間に声をかけるレイン。

すると誰も居なかったはずの路地に突如、黒衣を身に纏った人物が姿を現した。

「怪物祭（モンスターフィリア）のモンスター達が逃げ出してしまった。君の手を借りたい」

深々と被られたフードの内側から発せられた嘆願にレインは舌打ちを打つ。

「チッ……前にも言ったはずだ。怪物祭（モンスターフィリア）など無意味だと。貴様らがすべき事はモンスターと人間の協調を目指すことじゃない。奴らとモンスターの違いを証明することだ」

「すまない……」

黒衣の人物は僅かに俯いて謝罪を述べる。

それを見たレインは自身の顔を覆う白い仮面にそっと触れた。

「――だが一度約諾したものを無下にはしない。仕事は果たす」

腰に下げていた弓にレインは手をかける。彼は東の空を見上げた。

「すまない。そして、ありがとう。きっと彼等も君達という存在には感謝している筈だ」

黒衣の人物の放った言葉にレインはピクッと耳を動かし、現場へ向かおうとしていた

足を止める。

「勘違いをするなフェルズ。俺は奴らの望んでいるような人間ではない」

レインは背中越しに言い放ち、今度こそ怪物（モンスターフィリア）祭の行われている闘技場の方角へと走り出した。

「……例え、そうであったとしてもだ。君が彼等をただのモンスターと断じていないだけで彼等は少なからず救われてるんだ」

残されたフェルズは走り去るレインの背にそれだけを呟き、闇に溶けるように姿を消した。

第七話［妖精の心境］

――オラリオ北区《黄昏の館》

「え～っ、アイズ、ロキとフィリア祭行くの～？」

怪物祭（モンスターフィリア）当日を迎えた朝。

アイズ、ティオネ、ティオナ、レフィーヤといったいつもの四人が大食堂で朝食を取っていた。

いつものメンバーで怪物祭（モンスターフィリア）を回ろうと思っていたティオナは、アイズに先約があった事に思わず声を上げた。

「ごめん、ティオナ……」

「気にすることないわ、アイズ。先に声かけてなかったこっちが悪いしね」

しょんぼりと謝るアイズにティオネがすかさずフォローを入れる。

「あーぁ、ロキに先越されちゃったなー」

（むぅ……アイズさんと一緒に回りたかったのに……）

悔しげな仕草を示すティオナ。レフィーヤも服の裾を握り少しだけがっかりした様子。

「こーら、いつまでも二人して不貞腐れないっ。向こうで会ったら一緒に合流すれば良いだけじゃない」

姉として振る舞うティオネの言葉によりどうにかその場は収まる。

そのままのんびりと談笑をしながら朝食が続くが、ふとティオナが周りをキョロキョロと見回しながら口を開いた。

「そう言えば今日もレインいないね～」

「どーせ、また一人で迷宮（ダンジョン）にでも潜ってるんじゃないの」

呆れた様子を示すティオナの言葉を否定するようにアイズは首を振った。

「ううん。昨日、夜に部屋に行ったら居たよ」

アイズのまさかの発言に三人娘は驚愕と共にすぐに食い付く。

「な、な、なんでアイズさんがあの人の部屋にっ!?」

「え～！なになにどういうことっ？」

「中々やるわね、アイズ……」

あからさまな動揺を見せるレフィーヤと興味津々なティオナ。何故かティオネだけは関心した様子であった。

そんな三人の様子に意味がわからないと首を傾げるアイズ。
「また一緒に稽古したかったから……」
すぐに色恋沙汰に絡めたくなるお年頃の三人でもそのアイズの一言には「あ～」と思わず納得してしまう。レインとアイズ、二人の第一優先事項は常に自己の強化。あくまで二人の関係は研鑽を高め合う同士というもの。彼女達の脳裏に一瞬だけ過ったような甘い関係では決して無い、
アイズの言葉はまだ続いていたようで「けど……」と述べ、ずぅーんと少し落ち込んだ様子で口を開いた。
「忙しいから構ってられないって……」
「ハァッ!?」
まさかのレインのお断りにティオネはあからさまに苛立ちを見せた。
アイズがレインに彼女達に対するものとは違う信頼を置いているとティオネは感じていた。そんな奴が可愛い妹分であるアイズを無碍に扱った事に腹が立っているのだ。
「あのクソエルフ。一回本気で痛い目見るべきだわ」
そんなティオネの呟きにレフィーヤも思わず頷いてしまった。

その後、ロキとの予定があるアイズと別れた三人は東のメインストリートを歩き

怪物祭（モンスターフィリア）のメイン会場である闘技場へと到着した。

大衆の目の前で広がるのはモンスターと調教師（テイマー）の駆け引き。

レフィーヤの隣に座るティオナは、もう数回は見たことがあるであろう光景にも関わらず「お～」と感嘆の声を上げていた。ティオネも態度にこそ表さないものの感心した様子である。

一方のレフィーヤはと言うと、目線こそ面前の光景へと向けているものの、その表情は明らかに心ここに在らずといったものであった。彼女が思い出しているのは先程、食堂での一連の出来事。

（アイズさんはきっとレイン（あの人）を心の底から信頼してる……）

レフィーヤ・ウィリディスはアイズ・ヴァレンシュタインに憧れている。彼女の側に立てるようになりたい、彼女に頼られたいと思っている。

けどアイズが何かを頼る時、とりわけ武力に関わる事については大抵レインの元へ向かっていた。最古参の三人やティオナとティオネでも、ましてやレフィーヤでもない。

レフィーヤの抱く感情が、レインに対するただの嫉妬や羨望であればそこまで複雑に悩む事はなかった。自分の実力が不足しているという理由で一応は納得ができるからだ。

しかし、エルフである彼女にとってレイン・スヴァルトという存在は一筋縄でいくも

のではなかった。

（あの人はどうしてスヴァルト（忌み名）を名乗り続けるの……？）

それは、エルフの伝承に古くから伝わるエルフのフリをした怪物の名前。

その怪物は災禍の化身。森を枯らす者。光を貪り喰らう者など様々な表現で記されている。

怪物（スヴァルト）は数千年の周期で現れると言われており、学区にいた頃のレフィーヤは他のエルフの里で怪物（スヴァルト）が現れ、エルフの王族や戦士達が怪物（スヴァルト）を討つ為に躍起になっていたという噂も耳にし驚愕したものだ。

エルフにとってスヴァルトは災厄の象徴として恐れられていた。

しかし、まさかその張本人と同じファミリアになるとはレフィーヤは想像だにしていなかった。

ファミリアに入ったばかりの頃、レフィーヤは同胞（エルフ）の年長者であるアリシア・フォレストライトにレインについて相談した事がある。

なぜ彼がいるのか、彼は危険ではないのか、と自分の中にある戸惑いを素直に彼女に伝えたのだ。しかし、彼女から返ってきた言葉はレフィーヤを安心させるものでは無かった。

『正直に言えば、私もどう接して良いか分からないの。団長やリヴェリア様達が彼を信

頼してるのは分かるけど、彼が同胞（私達）をどう思っているかが分からないから……』

アリシアは複雑な表情でレフィーヤにそう答えた。

レインをファミリアの仲間と信頼したいという思いと、いずれ怪物の牙が自分達に向かうのではないかと言う不安でせめぎ合っている様子である。

それもそのはず、怪物（スヴァルト）は恐れられているゆえに激しい迫害を受けていたと言うのは他のエルフの里でも有名な話である。仮に彼がそれだけの仕打ちを受けていたなら、なおさら同胞（エルフ）に対して決して良い感情を持っているはずがないのだ。

レフィーヤがロキ・ファミリアに加入して3年が経つが、レインとまともに会話を交わした事すらほぼ皆無であった。しかしそれはレフィーヤだけに関わらずリヴェリア以外のエルフの団員も同様である。

同じ種族（エルフ）であり同じ眷属（ファミリア）でもあるのにも関わらずレイン本人のことを彼女は何も知らない。

（あの人は本当に怪物……？それとも――）

「――ィーヤ……フィーヤ！レフィーヤっ！」

「はっ！はいっ！」

周りの声が聞こえないほど考え込んでいたレフィーヤ。ティオナが肩を揺らしながら呼びかける事によりようやく彼女は顔を上げた。

「大丈夫、レフィーヤ？」
「だ、大丈夫です！」
「本当かしら……それより、外の様子が明らかにおかしいわ。見に行きましょ」
ティオネの言葉を聞きレフィーヤは意識を周囲に向ける。歓声を上げる観客達の端でガネーシャ・ファミリアの団員が慌ただしく動いている姿が見えた。

「ロキっ！」
三人が闘技場の外に出るとギルドの職員やガネーシャ・ファミリアの団員が奔走していた。
そんな緊迫した状況でも落ち着いた様子で周囲を見回す主神（ロキ）の姿をティオナは発見し、詳しい状況の説明を求めた。
「簡単に言うと、モンスターが逃げおった。ここら辺一帯を彷徨っとるらしい」
「えっ、不味いじゃん、それ!?」
「まあ、さっきまではそうやったんやけどなぁ……」
ロキは「あの通りや」と述べてティオナ達の背後の方向へと指を指す。三人がロキの指先の方へと視線を向けると、地面に見覚えのある矢が突き刺さっていた。
それだけで三人はすぐにロキの言いたい事を察した。

「なんでか知らんけど、ウチとアイズがギルドの娘に頼まれた時にはレインがもう動き出しておったみたいや」
「じゃあ、他の逃げ出したモンスターも？」
「ん、まああと一体だけみたいやからそれもレインが対処するやろ。アイズにガネーシャのとこの手伝い頼んだから、三人も行って――あン？」
不意にロキの言葉が止まる。
ティオナとティオネもすぐさまその異常を察し揺れる地面へと目線を向けた。
振動は徐々に凄まじくなり、敷かれた石畳にヒビが入った。
「――ッ！ロキッ!!」
「レフィーヤっ！掴まって！」
地面が弾け崩壊する瞬間、アマゾネス姉妹はロキとレフィーヤを連れて間一髪で後方へと退いた。
上がった土煙が晴れ、新たなモンスターが姿を現す。
「こんなモンスター、ガネーシャのところはどっから引っ張ってきたのよ……」
「新種、これ……？」
細長い胴体に凹凸のない皮膚。頭部とも呼ぶべき先端には眼を始めとした器官は何もない。さしずめ顔の無い蛇といった姿だが、彼女達が気になるのはそのモンスターの

皮膚色。
その毒々しい黄緑色は、先日の５０階層で異常事態（イレギュラー）として遭遇した芋虫型のモンスターを彷彿とさせる。
「レフィーヤ！わたしたちが叩くから様子を見て詠唱を始めてちょうだい」
「は、はいっ」
レフィーヤに手短に指示を飛ばし、ティオナとティオネはモンスターへ疾駆する。対敵するモンスターは鞭のように体躯をしならせて二人に向かい体当たりを行った。
面前で激しい打撃戦が繰り広げられる中、レフィーヤは詠唱を開始する。
「【解き放つ一条の光。聖木の弓幹。汝、弓の名手なり】」
山吹色の魔法円（マジックサークル）を構築しながら速やかに詠唱を進めてゆく。一方のモンスターは、アマゾネス姉妹の息のあったコンビネーションに翻弄されているのか、レフィーヤの様子に気が付いていない。
「【狙撃せよ、妖精の射手。穿て、必中の矢】！」
唄を終え、魔力が収束し一点に魔力の矢を形成しようとした時、これまで無反応だったモンスターが顔の無い頭部をレフィーヤの方へと向けた。
「――ッ!?」
地面を突き破って現れた黄緑色の太い触手がレフィーヤの身体を貫こうと迫る。レ

フィーヤはモンスターの思わぬ攻撃に驚愕するものの反応できない。
来るべき痛みにレフィーヤが思わず目を瞑った瞬間――神速の如き速度の矢がレフィーヤの面前に降り注ぐ。レフィーヤの足元では複数の矢により地面に縫い留められたモンスターの触手がある。
彼女は顔を上げて周囲を見渡すものの、矢を放ったであろう本人の姿はない。
「一体、どこから……」
思わずそんな呟きをレフィーヤがしてしまうが、当然答えが返ってくる事はなかった。

◊

「――ウィリディスに加えてヒリュテ姉妹……近くにはアイズもいるか」
周囲を見渡せる場所から既に八体ものモンスターを狙撃したレインは、大きく広げた感覚を絞った。突然、地中から出現したモンスターの方へと意識を向け、半ば反射的に矢を放つ。
明らかに闘技場から逃げ出したモンスターとは危険性の違う個体であるが、よく意識を集中させると周辺には複数の実力者が揃っていた。

「……ダイダロス通りに逃げた一体を仕留めるほうが先決だな」

闘技場から逃げ出したモンスターは九体。

そのどれもが調教（テイム）の為に用意されたものであり、第一級冒険者であるレインにとってはたとえ無手であろうと容易く息の根を止める事ができる。

しかし恩恵（ファルナ）が刻まれていない一般人にとって、どんなモンスターであろうと脅威に他ならない。

レインは目を閉じ、鋭敏な感覚を有する耳へと意識を集中させる。

（――複雑な路地を抜ける空気の流れ……逃げ隠れする住民の悲鳴……）

視覚を制限しているにも関わらず、複雑な迷宮路に感覚を伸ばす。レインのスキル《妖精鋭感（フェアリーセンス）》は千里眼とも言うべき感覚をもたらしていた。

（地に引きずられる鎖の音……そしてモンスター特有の、息遣い……）

「捉えた」

呟いた瞬間には既に豪速の矢を放ち終えていた。

ダイダロス通りの上空に大きな弧を描く。それは一人の冒険者と主神を追いかけていたモンスター《シルバーバック》の魔石へ一直線に向かい、確実に仕留める――――筈であった。

「なッ――!?」

レインの放った矢は周囲に金属音を響かせながら明後日の方向へと弾かれる。驚愕するレインの視線の先、その屋根の上には一人の偉丈夫が立っていた。

かなりの距離があるにも関わらず並々ならぬ威圧感を放っている。漂わせるは覇者の気配。凡百の冒険者であれば彼と視線を合わせる事すら畏れを抱く。

多くの冒険者が彼をこう呼ぶ――都市最強、と。

「なぜ、貴様が俺の矢を遮る……《猛者（おうじゃ）》」

フレイヤ・ファミリア所属。オラリオ唯一のＬｖ．７の冒険者である《オッタル》がレインの前に立ち塞がる。

相手は遥か格上。接近戦であればレインと言えど分が悪いという次元の差では無い。ものの数秒で制圧されてしまう。

（……貴様がどんな目的を持ってそこに立っているのかは知らん。だが――）

しかし、今の間合いは遠間。遠雷（グロム）の二つ名を有するレインの最も得意な形である。このままの距離を維持されれば、例えオッタルと言えど防戦一方とならざるを得ないだろう。

感覚を広げればすぐに分かるがオッタルの背後にはレインが最も嫌悪する女神の姿もある。彼女がいる限り、そもそもオッタルは攻勢に出る事ができない。

圧倒的なアドバンテージがレインの側にあるが、そんなことは彼にとって至極どうで

もいい。

（例え、貴様であろうと……）

レインにも誇り（プライド）がある。それは世界最高の弓使いとして誇り（プライド）。

魔法が使えないから、弓を取ったわけではない。魔法を越える為に、弓を極めたのだ。

（俺の弓（道）を遮ることは許さん）

レインは力一杯に弦を引き、猛者へ向けて照準を定める。

ダイダロス通りで暴れ回るシルバーバックと一人の見知った冒険者が対峙しているのは既にレインも理解している。しかし猛者や女神（フレイヤ）が見守っている場である以上、そちらは滅多な結果にはならないだろうと判断した。

「雷轟一殲（ライジング・ボルト）――起動（トリガー・オン）」

呟きと共にレインの内側でカチッと意識が切り替わり、引き絞る腕に更なる力が籠る。愛弓（ケラウノス）はギギギという軋むような悲鳴を上げる。

早打ちを得意とするレインは限界まで弓を引き絞る事は殆どしない。Ｌｖ．５のステイタスもあり大概のモンスターは速射のみで容易く屠れるからだ。

スキル《雷轟一殲（ライジング・ボルト）》は威力を重視した一射。

魔弾は十を、百を殲滅する事に特化した矢。対して雷轟一殲（ライジング・ボルト）は一を確実に破壊するための矢である。

その威力は、猛者（おうじゃ）と言えど無視できるものではない。

「シッ――――!!」

弦に込められた力を勢いよく解放した。

飛翔する矢は直線の軌道を描いて駆け抜ける。矢に遅れるように雷鳴のような轟音が迷宮都市の上空に鳴り響く。

遠雷（グロム）対猛者（おうじゃ）の一戦が幕を上げた。

第八話［遠雷（グロム）　対　猛者（おうじゃ）］

――オラリオ第三区画〝通称〟《ダイダロス通り》

「……ごめんなさい。神様は、このまま先へ進んでください」
ベルは自身が閉ざした鉄格子越しに此方を見つめる主神（ヘスティア）へ向けて頭を下げた。
「ボクは、って……君はどうするつもりだよ!?」
「……あのモンスターを引き付けて、時間を稼ぎます」
境になってしまった鉄格子に掴みかかりながらヘスティアは自身の大切な眷属（子ども）の言葉に問い詰めた。
「な、何を馬鹿なこと言ってるんだ、君は！」
「お願いします、神様。これっきりで良いんです、僕の言うことを聞いてください！僕は……僕はもう、家族を失いたくないんです」
「……！」
切実な声でそう述べるベルの姿にヘスティアはなんとも言えなくなってしまう。

「……ここから早く離れて、助けを求めてください！」
「っ……ベル君！」
呼び求める主神を背にベルは一気に駆け出した。
ベルが走り出すとその気配を感じ取ったのか、一度此方を見失った筈のシルバーバックはすぐにベルを捕捉する。
『ルァッ!!』
「来い、こっちだっ！」
高らかに声を上げ挑発するベル。それに気づいたシルバーバックは興奮した様子で雄叫びを叫ぶ。モンスターが自身へと狙いを定めたことを確認しベルも走り出す。
ダイダロス通りは複数の通路と階段が入り乱れる複雑な迷宮路である。その為、逃げるだけなら小回りが効くベルの側に有利がある――――事はなかった。
『グルァ！』
（まさか、上っ――!?）
建ち並ぶ家屋を利用した三次元的な動きでシルバーバックはベルに迫る。
間一髪のところで転がるように迫る巨腕を回避したベル。だが、彼がたどり着いた場所は楕円形に空いた広場。
どうにかすぐに体勢を立て直したベルは周囲を見回す。

（くそっ、どう逃げれば……）

彼が立つのは細い路地の多いダイダロス通りには珍しい広場。ここから逃げ続ける為には最低でも一度はシルバーバックの攻撃を完全に回避する必要がある。

『グルァァァッ!!』

思案するベルを他所にシルバーバックはますます苛烈に攻め立てる。

かの獣は両の手首に嵌められた鎖を利用し鞭のように使用し始めた。今までよりも大きくかつ変則的になったリーチに対応できず攻撃をいなそうとしたベルは一撃をもらってしまう。

「〜〜〜〜!?」

モンスター用の極太の鎖が頭に直撃し、広場の中央にある噴水の縁にまで吹き飛ばされる。どうにか立ち上がろうとするベルだが、視界がグワングワンと揺れ、身体はまともに言うことを聞いてくれない。

（……くそ、やっぱりダメだ……僕じゃ……）

視界の端に徐々に詰め寄ってくるシルバーバックの姿が見える。体力も気力ももはや底を突きかけている。

ベルが自身の命を諦めかけていたその時――。

上空で、雷鳴の如き轟音が鳴り響いた。

それは、一度だけでは無い。二度、三度と次々に打ち鳴らされていく。

『グルゥ……』

シルバーバックは顔を上に向けて怯えた様子を示している。

（この、雷鳴（音）聞き覚えがある……）

ベルは記憶を辿る。そして思い出したのは、強い憧憬を抱いたあの日。

『……大丈夫ですか？』

激しく動揺していたため曖昧だった記憶を整理していく。

ミノタウロスを斬り伏せた黄金の彼女。雷鳴が聞こえたのは、その直前だった。

命の恩人（アイズ）の背後には、レインの姿もあった。

（そうだ、思い出せ。あの時、アイズさんが倒したミノタウロスは武器を持っていなかった）

誰が、ベルに振り下ろされる筈だった石斧を消し飛ばしたのか。今ようやく正確な答えにベルは辿りついた。

（アイズさんだけじゃない……僕はあの時、レインさんにも助けられてたんだ）

ベルは、グッと歯に力を込め立ち上がる。

（僕はあの人に助けられてばっかりじゃ無いか……!!本当に、それで良いのかよッ!!）

迷宮（ダンジョン）でだけではない。レインはベルに豊穣の女主人でも手を差し伸べた。そして今は、時間を割いて修行にまで付き合ってくれている。

このまま死んでいいのか。彼に何も言わずにここで倒れ果てて良いのか、とベルはどうにか自身を奮起させた。

そして、思い出すのはレインがベルとの修行を始める際に最初に述べた言葉。

『冒険者にとって勝利条件は、生存することだ。無様でも泥臭くても構わない。生き残った者こそが勝者だ』

ベルはギルドの支給品であるナイフをギュッと握りしめる。

「――何としてでも、僕は生き抜いてみせるッ!!」

この場での勝利を手繰り寄せる為に、ベルは駆け出した。

◇

迷宮都市の上空では轟然たる雷鳴が鳴り響いていた。

「噴ッ――!!」

雷の声音を撃ち消すのは空気を切り裂く炸裂音。

猛者（おうじゃ）は轟音を唸らせながら迫る矢を自身の大剣で叩き落としていく。
次々と放たれる雷撃。
幾ら速射を捨てた威力重視の矢でも、遠雷（グロム）の腕前であれば連射は容易く行える。
一射がオッタルの元へと到達する頃には二射目が放たれているためオッタルは身動きが取れないでいた。
（此方の目的を終えるのが先か……彼方の矢が尽きるのが先か……）
オッタルはチラッと視線を下方へ向ける。主の目的である駆け出しの冒険者がどうにかシルバーバックの動きを躱していた。
『ねぇオッタル。あの子の戦いが終わるまで邪魔立てさせないでちょうだい』
（……さすがに時間はかかる、か）
主神（フレイヤ）が何故あの駆け出しの冒険者を気にしているのか、オッタルには分からない。だが、主命である以上どんな横槍も許さない。
「覇アッ――!!」
無骨な大剣を力強く振り下ろし一直線に駆け抜けてくる矢を破壊した。更に続いて轟音と共に新たな矢が放たれるかに思えたが――。
（音が、消え――――ッ!!）
驚愕するオッタルの面前に音もなく迫っていたもう一つの矢。それは轟音を響き渡

らせる強射に紛れた速射。猛者（おうじゃ）の不意をついた一撃。

オッタルの顔面に鏃が到達しようとしている。このタイミングでも回避をする事はできる。だがオッタルがその選択を取れば背後の主神（フレイヤ）に危害が及びかねない。

ならば、どうするか――。

「……」

文字通りの面前まで辿り着いた矢へ鋭い視線を飛ばすオッタル。彼は唐突にガッと口を大きく開き――――口内に侵入した鏃を齧り潰した。

スキル《雷轟一殲（ライジング・ボルト）》の効果を受けていないとは言え、大抵のモンスターを一撃で屠る威力を持つ矢を歯で受け止めるなど正気の沙汰ではない。

「苦戦しているわね、オッタル」

「申し訳ありません、フレイヤ様」

ペッとひしゃげた鏃を吐き出したオッタルにこれまで階下の光景にしか目を止めていなかったフレイヤが述べた言葉にオッタルはすかさず謝罪を述べる。

「あの子は、貴方が考えているような野暮な事はしないわ」

オッタルが最も懸念しているのはフレイヤを狙った狙撃。レインと言う男がそんな馬鹿げた事をするのはオッタルにも考えられないが、それでも両者のファミリアの関係は複雑なものである。その万が一をオッタルの判断で否定する事はできない。

だが、そんなオッタルの忠義を理解しているフレイヤは彼に発奮の言葉をかけた。
「むしろ私の眷属（子）がこのまま防戦一方で終わることの方が、私は許せないわ」
主神（フレイヤ）の言葉を聞き、オッタルは得物を力強く握りしめる。
彼にとって都市最強という名には過度な拘りはない。それ以上に、重要なのは敬愛する方の眷属であるという事。
彼女の最強の盾であり、最強の矛であり続ける事こそが彼の存在意義。
「少し遊んできてあげなさい。オッタル」
「――御意」
遠間にいる狙撃手へ向けて振り返る。
受けに徹していたこれまでとは違う。漂わせるは蹂躙する暴君の気配。
真の意味での猛者（おうじゃ）が、その一歩を踏み込んだ。

◊

「……ッ」
たった一歩、猛者（おうじゃ）が此方へ歩を進めた。ただそれだけで雰囲気が一変した。これまでの攻勢の勢いが霧散するほどの重苦しい圧力（プレッシャー）。

（――――来るッ！）

ドオンという衝撃音が響く。

立ち並ぶ建造物の屋根を蹴り上げるオッタルは弾丸のように加速した。その一歩は軽々と大通りを飛び越える。

（雷轟一殱（ライジング・ボルト）ッ!!）

一気に距離を詰めるオッタルへ向けて弓を構える。

右腕は力強く弦を引き絞るものの僅かな痙攣を見せていた。それも当然である雷轟一殱（ライジング・ボルト）は本来乱発するスキルではない。レインの中でも扱いとしては魔弾と同等の切り札の一つ。

（この一撃は、外せない）

この一射でオッタルを揺るがせなければ、二射目を放つ頃には接敵を許してしまう。そうなればレインに勝ちの目は完全に消える。

もう既に両者が目視で認識できる距離にまでオッタルは辿り着いている。

自身の心臓の声音が騒がしく聞こえた。理性と本能、共に猛者（おうじゃ）には勝てないと警鐘を鳴らす。

「ふぅぅ……」

雑念を捨てる為に、大きく息を吐き集中力を極限まで高めた。照準を猛者（おうじゃ）へ定める。

両者の視線が交差した瞬間――。

「――起動（トリガー・オン）」

静寂を切り裂く雷鳴。

コンマ数秒で面前に辿り着いた雷矢。それをオッタルはギリギリでその場で反転し回避する。

そこまでは、レインの想定の範囲内。

（狙いは――――貴様ではない）

オッタルの避けた矢は、彼の足場となっていた屋根に衝突し陥没させた。足場を失ったオッタルは咄嗟に無事だった屋根の縁に掴まろうとするが、２Ｍ（メドル）近くある偉丈夫の落下には耐えられず崩れ落ちてしまう。

レインは悠々と二射目を構える。

オッタルであればすぐに体勢を立て直すだろう。レインが狙うのはその瞬間、上空に舞い戻ったタイミングを撃ち抜く――筈であった。

屋根の一部が崩れた家屋、その外壁が突如崩壊し、黒々とした鉄塊が急加速でレインの方へと向かう。

彼の放つ矢と同速の速さで飛来する鉄塊。その正体はオッタルの得物である大剣。この局面を打破する為にオッタルは自身の武器を投擲したのだ。

「な……に――ッ!!」

不意をつかれた形となったレインは咄嗟に愛剣(エリュシオン)を引き抜き迫る衝撃に備える。激しい衝突音を持って到達する大剣。投擲にも関わらずレインの体感では深層のモンスターの突貫のような圧力を感じる。

「くッ――!!」

どうにか大剣を逸らし真正面から直撃を退ける。

しかし崩れた体勢を立て直したレインが視線を上げると、オッタルは既にレインの弓の間合いよりも内側に到達していた。目の前まで猛者(おうじゃ)が辿り着くまで数秒と無い。

(弓は……間に合わん)

左手を前にかざし、右手に持つ剣を引き絞る。

カチッと自身の中での意識が切り替わる。今日、十数度目のスキルの使用。

(雷轟一殲(ライジング・ボルト)――起動(トリガー・オン))

それは、雷轟一殲(ライジング・ボルト)を応用した雷速の突き。自身を矢の弾丸と模す事によりスキルを擬似的に起動させる荒技。

迎え撃つは、得物を投擲し無手の猛者(おうじゃ)。膂力では遥かに分が悪いが、この局面であれば地に両足を付けたレインに利はある筈。

オッタルが到達した瞬間、レインは雷速の如き加速を見せ一直線に猛者(おうじゃ)の心臓を貫く

――――事はできなかった。

「見事な技だ。だが――」

獣の如き凄まじい反射速度でレインの突きを躱す。そしてすれ違う瞬間にレインの頭蓋に万力のような握力で掴みかかる。

「――ガッ……!!」

「その程度では、猛者（俺）には届かん」

勢いのまま床に叩きつけられるレイン。

猛者（おうじゃ）が見下ろす中、レインは木床に頭をめり込ませたまま動きを止める。

「……」

オッタルは彼が動き出さないのを確認し主の元へ戻る為に背を向けた。

頭に重い一撃を受けたため途切れかけるレインの意識。彼は霞む視界の端に映る猛者（おうじゃ）の後ろ姿をぼーっと見つめていた。

（――勝負は決した。元より、敵う相手では無かった……）

未だに剣を握る右手から力が抜けていく。

相手は都市最強のＬｖ．７。単独で彼を打破できる者などこの世に殆ど存在しない。

思い出すのは最近の自身の言葉。

『――迎撃に関しては俺一人で十分だ』

『俺だけか？本気でゼウスやヘラの奴等を越えようとしているのは』
『俺の弓道を遮ることは許さん』
（大口を叩くだけ叩いて……俺は、何一つとして成し遂げてはいない）
完敗という無様な結果。そして猛者（おうじゃ）とのあまりの差にレインの心が折れかけようとしていた。
そんな時、右手にある白剣（エリュシオン）の刃が太陽の光を反射してキラキラ美しい輝きを放つ。視界の端に見える愛剣の姿に僅かに目を細めた。

『何で物語の英雄達がキラキラと輝いて見えるか知ってる？』
思い出すのは、この白剣（エリュシオン）の本来の持ち主の言葉。
『彼等はみんな強いからよ。心か体かは人それぞれだけど、英雄は誰にも負けない強さを持ってるの』
多くの英雄達を見てきた彼女だからこそ断言できる言葉。物語だけではない未知の大穴に挑む実在の英雄達の物語をレインは彼女から聞かされていた。
『レイン、強くなりなさい。誰よりも強くなれば貴方を否定できる人はいなくなるわ』
誰よりも強く自由な師。
彼女と共に世界を周り、色んな事件に巻き込まれた。しかし師でありながらも大した

事はそれほど教わっていない。
　それでも、エルフの里という狭い世界で爪弾きにされて一生を終える筈だったレインにとって彼女との日々は掛け替えのないものであった。

（あんたが、今の俺の姿を見たらどう思うだろうな……）
『はぁー!?ダッサっ！レインダッサいわ～っ!!』
　師である女が言いそうな事を思い浮かべピキリと青筋を浮かべるレイン。しかしその口元だけは僅かな笑みを浮かべている。徐々に右手に力を込めていく。
（嗚呼。先は、遠いな――）
　目指す高みは遥か彼方。自身が完敗した猛者（おうじゃ）ですら通過点でしかない。途方もない道のり。
　しかし、歩むと決めたのは己自身。
（……今日の敗戦は、素直に認めよう。だが心までも負けるつもりはない）
　剣を杖代わりにどうにか立ち上がるレイン。
　さすがにオッタルもレインが息を吹き返した事に気がつきに振り返る。
「まだ、立ち上がるか。勝てない事など理解している筈だろう」
「――そんな事は関係ない。俺の目指す先を考えれば、此処で無様に引き下がることの

方が問題だ」

レインはオッタルへと剣を向ける。

ボロボロな姿とは反し先程以上に強まった殺気。勝機は無いと分かった上で挑む愚者の姿に、オッタルは微かな笑みを溢した。

「精々足掻かせてもらうぞ!!猛者(おうじゃ)ッ!!」

レインはそう叫び、猛者(おうじゃ)へと向かっていった。

第九話［愚者の道］

――オラリオ東区　闘技場近辺

「す、すごい……」

立ち尽くすレフィーヤの前で繰り広げられるのは、第一冒険者達が繰り広げる高速戦闘。ティオネとティオナに加えて異変に気がつき合流したアイズの三人が、黄緑色の三対に増えた頭と対峙していた。

先程、レフィーヤの詠唱中にモンスターの矛先が変わったこともあり、対敵するモンスターが魔力に反応すると彼女達は判断した。その為、生粋の魔導士であるレフィーヤには彼女達をサポートする術が無い状況である。

「かったぁー！あ～、武器用意しておけば良かったー!?」

「くっ……！打撃じゃ埒が明かない！」

「……ッ!?」

更に、元より怪物祭（モンスターフィリア）を見るだけの予定であったアマゾネス姉妹は得物を持っておら

ず、帯剣しているアイズも前回の遠征での酷使により愛剣（デスペレート）を修理に出している為、振るっているのは代剣である。

幾ら深層域のモンスターを相手取って無双する三名でも、本来の実力が発揮できない現状では決定打に欠けていた。

ジリ貧な状況が続く中、バキッという破砕音と共に均衡は崩れ始めた。

（――アイズさんの剣がッ!?）

「――――」

それだけでは無い、一瞬だけ崩れた屋台の影へと目を向けたアイズは風を最大限に纏ってモンスターに突貫した。魔力に反応する三対の首が一気にアイズに向かい呆気なく彼女を拘束した。

アイズの動きの意味を理解できなかったレフィーヤは彼女が一瞬だけ見た屋台の方へと視線を向ける。

（――子供が……！）

避難できなかった獣人の子供が瓦礫の影で蹲っているのだ。その子に被害が出ないようにアイズは敢えて身を犠牲にすることを選んだのだ。

（私に、出来る事は……）

無い。必死に考えるレフィーヤであるが、魔法の使えない自身に出来ることなど一つも浮かばなかった。自分がどれだけ無力で足手纏いなのかを痛感させられてしまう。

（私なんかじゃ何も――）

その時、南の空で雷鳴が轟いた。

思わずレフィーヤは顔を上げる。見上げた先に黒々とした雷雲は無い。ならば轟音を奏でるのが誰なのかロキ・ファミリアの団員なら良く知っている。

（あの人も、戦ってる……）

誰と或いは何とか彼女には分からない。レフィーヤと同じように空を見上げる彼女達にも雷鳴を響かせ続けるレインが何故戦っているのかは分からないだろう。彼女達からしても自分を曝け出さないレインは謎が多い。

それでも、彼は――。

「レイン……」

「よーしっ、さっさとこのモンスター倒してレインの方を手伝いに行くよ～っ！」

「あのクソエルフ、居るならこっちにも援護しなさいよ」

彼は、ファミリアから信頼されている。

レフィーヤの憧れるアイズも彼を並び立つ存在として認めている。守られているだけのレフィーヤとは違う。

（あの人は……どれだけ……）

今や周知の事実となっている彼の同胞（エルフ）としては致命的なハンデ。魔法を使えないという欠陥。彼は、千の妖精（サウザント・エルフ）と呼ばれるレフィーヤとは対極の存在である。

魔法が、魔力が足を引っ張っている今だからこそ実感できる。彼がどれほどの積み重ねを持って今、あの場所に立っているのかを。

『俺だけか？本気でゼウスやヘラの奴等を越えようとしているのは』

あの時、彼の非難の言葉に最も貫かれたのはレフィーヤであった。

最初はベートが大声で語る不甲斐ない駆け出しの冒険者の話にただただ可笑しかっただけだった。ゼウスやヘラのファミリアの話も若い彼女にとっては昔話に等しく、実感の湧くものではなかった。

しかしその次に述べた彼の一言は大きく彼女の内に響いた。

『――今回の遠征。俺達は何か一つでも成し遂げたか？異常事態（イレギュラー）があったとは言え、結果は紛れもない敗走だ。俺達は負けたんだ、迷宮（ダンジョン）に』

無事に遠征が終わった、と安堵していた彼女にとってその一言は認識を改めさせるものだった。そもそも、遠征をよく振り返って見ればレフィーヤはアイズ達に守られてばかりであった。

（私は……あの時、笑ってしまった冒険者の人と何も変わらない）

守られるだけの存在。それが、今のレフィーヤ・ウィリディスの現在地。
（変わりたい……ううん、変わらなきゃ。あの人はきっと、前に踏み出したから今、あそこに立っているんだ）
前を向いたレフィーヤは大きく息を吸った。
レイン・スヴァルトが魔法を使えないとすれば、レフィーヤ・ウィリディスは魔法しか使えない。
変えるべきは戦い方ではなく、心の在り方。
「【ウィーシェの名のもとに願う】！」
アイズにモンスターが群がるのを見計らいレフィーヤは詠唱を唱え始める。
それは、世界で彼女だけが持つ魔法。
「【森の先人よ、誇り高き同胞よ。我が声に応じ草原へと来たれ】」
その譜にレフィーヤは自然と、彼の背を思い浮かべた。
「【繋ぐ絆、楽園の契り。円環を廻し舞い踊れ】」
レフィーヤ・ウィリディスはきっと一人では戦えない。同胞（エルフ）との絆が鍵を握るこの魔法が何よりもその事実を物語っている。
だからこそ、ただ守られるのでは無く背中を預けられる存在になりたい。
「【至れ、妖精の輪。どうか――力を貸し与えて欲しい】」

弱い自身に。変わりたいと願う自身に。どうか――。
前進する勇気を。後戻りしない決意を。歩み続ける覚悟を。
（――貴方の持つ強さを、私は知りたい）
山吹色の魔法円（マジックサークル）から膨大な魔力を帯びる。
願いを乗せた唄が形を成そうとしていた。
「【エルフ・リング】」
（だから教えてくれませんか？貴方の歩んできた物語を――）
それはきっと美しい譚では無いだろう。
それでも彼女は知りたいと思った。歩み寄りたいと思った。
同族（エルフ）の怪物である彼ではなく、ロキ・ファミリアのレイン・スヴァルトという一人の冒険者に。
形成逆転の奇跡（魔法）が、間もなく完成する。

◇

ボロボロの廃墟と化した建屋。その壁には大きな斬撃の傷や崩れた石壁など至る箇所に激しい戦闘の跡が残っていた。

オッタルの片腕で壁に押さえつけられるレイン。その右手はダラリと力なく下がり足腰には完全に力が入っていない。口の周りに残る吐血の跡が過酷な戦闘であったことを物語っている。

しかし、割れた仮面の隙間から見える紅の眼光だけは猛者（おうじゃ）を鋭く睨みつけていた。

「ふん」

オッタルが手を離すだけで、レインは腰を砕き壁に寄りかかるように床にずり落ちた。静寂に包まれた空間にレインの整わない息遣いだけが聞こえた。

そんな中、不意にオッタルが口を開く。

「――お前が、あの少年に目をかけていると聞いた。何故だ？」

（誰から、となど聞くだけ野暮だな。チッ……相変わらず気味の悪い女神（おんな）だ）

恐らくオッタルは主神（フレイヤ）から件の話を聞いたのだろう、と見当をつける。全てを見透かしているかのような女神の微笑を思い出しレインはあからさまに顔を顰めた。

「……何故、貴様に答える必要がある」

いつぞやの酒場と同様の問答。あの時はベルの為に警戒心を示してきた女傑の問に答えたが、主神（フレイヤ）の意向を絶対とする猛者（おうじゃ）がベルとレインの関係にそこまで口を挟むとは思えない。

「ただの興味だ。高みを目指し最短で進んできたお前にとってあの少年は邪魔ではない

のか、そう思っただけだ」

不相応な高みを目指し強者に挑むレインの姿。その姿をオッタルは若い頃の自身と重ねていた。最短最速を目指す筈のレインがベルに与えている時間は明らかな寄り道にしか見えない。

オッタルの問いはただの興味でしかない。レインに答える義理は無い。だが――。

「……最初は、ファミリア間の問題ではなく個人間の問題で終わらそうと思っていただけだった」

ミノタウロスを取り逃したあの時、少しでもレイン達の到着が遅ければベルの命は無かっただろう。迷宮（ダンジョン）での落命は自己責任と言えばそれまでだが、探索系ファミリアの大手であるロキ・ファミリアには相応の責任がある。罰則（ペナルティ）はあり得ないとしてもファミリアのブランドに傷がつきかねない。

酒場でベルがいるのを気づき庇ったのも、そのような理由が少なからずあった。

「だが――」

『……辿り着きたい場所があります。例え分不相応な願いでも、僕は……僕は諦めたくない！』

レインは少年の叫びを思い出し微笑を浮かべる。それは張り詰め続けていた糸を少しだけ緩めたような穏やかな笑み。

「ミノタウロスという遥かに格上のモンスターに殺されかけてなおブレない芯の強さ。本人も高みを目指している。もしアイツが折れずに突き進めるなら――」

いずれ英雄に。その呟きに敢えて声を乗せなかった。

きっと彼の紡ぐ物語は愚者の物語だろう。不相応な兎が苦悩しながら高みを目指すそんな物語。それはまるで始まりの英雄譚のような。

師である女から聞いた譚で、レインの心に最も響いたのはそんな道化の物語であった。

「それを、少しだけ見てみたくなった」

オッタルがレインに若い頃の自身を重ねるように、レインはベルにかつての自分を重ねている。愚者がどこまで進めるか、何となくその答えをベルが持っているような気がしたから。

「変わったな……お前も」

感慨深く呟くオッタル。自身に追いつき、いずれは超えるであろうと目していた一人だからこそ彼には昔から注目していた。

だからこそ目ざとく感じるレインの変化。昔の彼はもっと無我夢中に高みを目指していた。他者などどうでもいい自分さえ高みに至れば、そんな風に考えているようにオッタルには見えていた。

「もしそうなら、どっかの五月蝿い奴らの影響だろうな」
呆れたように述べるレインは、いつまでも居座るオッタルへジト目を向ける。
「……と言うか、さすがにもう俺は戦えない。お前もさっさとあの女神のところに戻ったらどうだ？」
「あの方の近くにはアレンも控えている。多少なら問題ない」
「はぁ……揃いも揃って女の尻ばっか追いやがって気持ち悪りぃ奴らだな」
そんな奴に負けたのか、と呆れるレイン。彼は無意識に昔の口調に戻っているが気が付いていない。
やがてレインの尖った耳がピクッと動く。彼の耳が聞き取ったのは歓声。
「どうやら……決着がついたようだな」
それは、ダイダロス通りに響き渡る大歓声。初金星を飾った少年の名を呼ぶ民衆の歓呼。
それは、英雄の産声である。

主神の見初めた少年の戦いが終わった事を理解したオッタルはすぐに主の元へと向かった。残されたレインはまだ立ち上がる事ができず壁に寄りかかったまま休息を

取っていた。

不意に崩れかけた柱の影から魔力の迸った。レインはその魔力に身を委ねるように目を閉ざした。

「【ピオスの蛇杖（つえ）、ピオネの母光（ひかり）、治癒の権能を持って交わり、全てを癒せ】」

唱えられる詠唱と共に白色の魔法円（マジックサークル）がレインの身を覆う。影から姿を現したのは黒衣を纏ったフェルズ。白骨と化した右手をレインへ向けた。

「【ディア・パナケイア】」

光が包み込み、レインの体中に負っていた傷と蓄積された疲労を癒す。万能薬（エリクサー）と同じ完全な治癒がレインにもたらされる。魔力が途絶え魔法の終了を確認したレインはゆっくりと目を開きフェルズの方へと視線を向ける。

「さすがの回復力だな。フェルズ」

「……未だに君の呪いを癒すことはできないがね」

レインの賛辞を否定するフェルズ。

二人が思い出すのはかつての出来事。フェルズとレインが初めて邂逅した時の話。

『――すまない。これは賢者（わたし）の手にも負えない代物だ』

『そう、か』

レインの瞼に白骨の指を触れるフェルズは悔しげにそれだけを呟くことしかできな

かった。その時にレインが浮かべたなんとも言えない笑みは未だにフェルズの内に残る後悔の一つだ。

「……それは気にする必要はないと前にも言った筈だ」

「だが……」

レインは割れた仮面を手に取る。紅く鋭い瞳が完全に晒された。放たれる威圧感にフェルズはない筈の心臓が激しく脈打つような感覚が生じる。

そんな魔導士(メイジ)に向けてレインは仮面を投げ渡す。

「だからお前は仮面(それ)を作ってくれたんだろ?」

二度目の邂逅。賢人と再会を果たした際に渡された魔道具(マジックアイテム)。かつて賢者と呼ばれたフェルズが執念の果てに完成させた一品である。

「ふむ……」

納得はしていないがレインの賞賛に満更でもない様子のフェルズは、受け取った割れた仮面を懐にしまい。新たな仮面を黒衣の内側から取り出しレインに手渡した。

かつては制作に時間を要した魔道具(マジックアイテム)であったが、いまや賢者の手にかかれば量産も容易になっていた。

両者の間に無言の時間が生まれる中、話を切り替えるためにフェルズわざとらしい咳払いをした。

「んんっ……改めて依頼に応えてくれた事を感謝するよレイン。報酬は――」
「必要はない。俺の手で依頼が完遂されたわけじゃないからな」
フェルズが懐から用意していた報酬を取り出そうとした時、レインはそれを拒否した。
闘技場から逃げ出したモンスターは九体。その内、八体はレインが射抜いたものの最後の一体であるシルバーバックを仕留めたのはベルである。
何より私心に走り猛者（おうじゃ）との戦闘に身を置いていた。レインにその報酬を受け取る資格はない。
「……そうか」
レインのある意味頑な部分はフェルズも理解している為、大人しく用意していた物品を黒衣の中にしまった。それを確認したレインは新たに渡された仮面を身につけながら立ち上がる。
「――さて、俺は戻る」
当初、軽く迷宮（ダンジョン）に潜ろうと思っていたレインであるが日が中天にまで登った今からでは碌に進めない。大人しく本拠（ホーム）へと帰ることを決めた。
「……もう彼等に会うつもりはないのか？彼等は君が来ることを待っているよ」
フェルズの問いにレインは背を向ける。仮面の内側にある彼は一体どんな表情を浮

かべているか――。

「言った筈だ……俺は、奴らの待ち望む希望ではない」

「そんな事はない……！君こそが彼等の――」

異端児（ゼノス）と呼ばれる彼等の拠り所となれる存在。彼等と交友を交わし、今なおフェルズ達に協力しているレインこそが希望である、とフェルズは断言しようした。

しかし、振り返ったレインの仮面越しに見える瞳を見て言葉を止めてしまう。自身の掌を見つめるレインは静かに口を開いた。

「もしもの時のことはリドに伝えてある。アイツも承諾済みだ」

「――ッ!?それは……どちらの意味だ……？」

驚愕するフェルズ。レインの言葉を受けた魔導士（メイジ）の内側では最悪のシナリオが過ぎってしまう。

対するレインは自身の掌を何度も握り返す。彼が思い出すのは最も関係性を深めた蜥蜴人（リザードマン）。会うたびに握手を求める彼の掌は赤緋色の硬皮に包まれており明らかに人間とは異なっている。それでも――そこには確かな温かさがあった。

「決まっているだろう。俺は――冒険者だ」

自分に言い聞かせるように述べたレインの言葉を最後に二人は別れる。

レインの背を見送ったフェルズは黒衣の内側からオラリオの空を見上げた。

「彼が君の残した異端児（ゼノス）をどう見ているのだろうか。私には、もう分からなくなってしまったよ……なあ、ミネルヴァ」

呟いたかつての盟友の名は空に溶けていく。

協力者である筈の男が、最後の瞬間にどちらを選択するのかフェルズには見当もつかなかった。

◇

ロキ・ファミリアの本拠（ホーム）。黄昏の館の尖塔にある団長室ではフィンとレインが机を挟んで座っていた。静寂に包まれた空間では先ほどからコツ、コツという音だけが響いている。

「チェック」

机の上に置かれているのは黒と白に配色された遊戯盤（ボードゲーム）。

黒の騎士（ナイト）が白の陣営に踏み込み、王（キング）の喉元に刃を突きつける。

「甘いよ、レイン」

「――これなら、どうだ」

間髪入れずに次の手を指したフィンは白の魔術師（ビショップ）が騎士（ナイト）を討った。すかさずレイン

は女王(クイーン)を縦断させて魔術師(ビショップ)の駒を取った。再び王手をかける。
彼等は、共通の趣味であるチェスの真っ最中であった。

「まさか、こんな昼の時間から君と指せるなんてね」
「フン……其方こそ団長は随分と暇なんだな」
たっぷり三戦をほぼ無言で楽しみようやく一息つく両者。ちなみに結果は二勝一敗でフィンの勝利であった。なぜ、こんな真っ昼間から二人がチェスに興じているのかと言えば――。
「それで、僕に話とは何かな？レイン」
少し前、ボロボロな格好になって本拠(ホーム)へ帰ってきたレインがフィンに話があると言って団長室を訪れていたのだ。しかし先日の遠征もあり久しくチェスを行えてなかったフィンの方から気晴らしにと対局を持ちかけ、今に至ったのだ。
「……少しの間、迷宮(ダンジョン)に潜りたい」
「期間は？」
「早ければ三日、遅くとも一週間以内には戻る」
レインの申入れにフィンは「なるほど」とだけ述べて口を閉ざす。そしてレインの思

惑を悟り僅かに笑みを浮かべながら彼の側にある黒の王駒（キング）をボードの中央に置く。
「狙いはウダイオス、と言ったところかな？」
勇者（ブレイバー）の一言に仮面越しに見えるレインの目は僅かに細まる。レインは無表情でフィンは微笑を浮かべて見つめ会うなか、レインから諦めのため息が聞こえた。
「はぁ……なぜ、分かった？」
「ロキが少し前に、君がステイタスを見て怖い顔してたって教えてくれたからね。それに君の場合、前科四犯だ。覚えがないとは言わせないよ」
過去に四度、レインは偉業を成す為に大物の単独討伐へ向かったことがある。酷い時は遠征の前日に偉業を成して帰ってきて、仕方なく遠征メンバーから外れると言った事態になった事もある。昔はレインの無鉄砲ぶりに最古参の三人はとことん頭を抱えたものだ。
（まあ事前に伝えようとするだけ、前よりは周りに目を向けるようなった証拠かな）
微笑を浮かべていたフィンであったが、やがて真剣な顔つきでレインを見つめた。
「君は僕と同じように力押しの相手には滅法弱い。どちらかと言えばその類であるウダイオスとは決して相性は良くない筈だ」
技と駆け引きに重きを置く両者ゆえに、圧倒的な暴力による蹂躙には遅れを取りがちであった。

「……確かに、当初はウダイオスは避けようと判断していた」
階層主（モンスターレックス）という選択肢だけでもモンスターは他にもいる。レインが有利に立ち回れるであろうモンスターも数多くいるが――。
「だが、それでは真の偉業になり得ない。俺の目指す先は絶対の強者。ならばいい加減、その程度の苦手意識は越えねばならん」
（全く。君はいつも的確に痛いところを突いてくるな）
誰かの姿を思い浮かべているようなレインの宣言にフィンは内心で苦笑いを浮かべる。そしてファミリアの団長としてどう立ち回るべきかを思案する。
（レインは……恐らく止めたところで勝手に行くだろうね。まあ君の場合、準備は万全だろうから問題は少ないだろうけど……そう言えば――）
フィンが思い出すのは少し前の出来事。
代剣をへし折り落ち込んで帰ってきたアイズと得物の修復のための借金（ローン）があるティオナ。そして何かと頼みを聞いてくれるティオネ。
（――これは丁度いいかもしれないね）
手で抑える口元の下で笑みを深めたフィンはゆっくりと口を開く。
「君の申入れは許可しよう」
「ああ。すまない、迷惑を――」

「ただし、条件がある」
レインの言葉を切るフィン。
「何人か同伴者（プレイヤー）をつける。手は出させないが、見届けはさせてもらうよ」
勇者の浮かべる笑みに、レインは顔を引き攣らせる他なかったのであった。

第二章【リヴィラ攻防戦】
第十話［出立］

――オラリオ北西区　市壁上部

「――この音……」
ベルがいつもの如く市壁の頂上を目指して歩いていると、空気を切り裂くような響音が聞こえてきた。そのまま進んでいくと益々その声音は勢いを増して聞こえてくる。
市壁の頂上まで登ったところで朝焼けが差し込みベルは細めながら音の響く方へと目を向けた。
「うわぁ……」
思わず感嘆の声を上げるベル。彼の前で広がるのは太陽を切り裂かんとする銀光の剣尖。一切の無駄がない動きは鋭さと美しさを併せ持つ姿。初めて見るレインの剣技にベルは引き込まれていた。
「――いつまでそこに立っているつもりだ、クラネル」

「あ……お、おはようございますっ！レインさん！」
　レインがあまりに滑らかな動きで此方に振り返ったため反応に遅れるベル。盗み見していた事もあり、少し気まずげに挨拶を述べた。彼はレインが鞘へと戻そうとしている白剣へと目を向けた。
「初めて見ました、レインさんの剣」
「ああ。昨日まで修理に出していたからな……それに、今日の鍛錬からはこいつも使う」
　レインは鞘に納まる愛剣の柄を肘でコツンと揺らした。この数日の鍛錬ではレインは無手であり、あくまでベルの動きを避け続けるだけだったが――。
「ただ避けるだけじゃない。防御もするし必要に応じて迎撃もするつもりだ」
　今までですら一撃も当てられていないにも関わらず訓練の難易度が上がる。レインの言葉にベルはごくっと大きく息を呑んだ。
「加減はしない。喰らい付いて来い」
「は、はいっ!!」
　ベルは主神（ヘスティア）から託された神のナイフ（ヘスティアナイフ）を引き抜いた。これまでのギルドの支給品のナイフとは違う業物。自分だけの得物とあり手に持つだけで未だに高揚感を覚える。
「行きます！」
　ベルはレインへ向けて真っ直ぐに駆ける。

対面するレインは目を見開いた。ベルの見せる昨日までとはあまりに違う加速に驚愕したのだ。

だがすぐさま抜刀し剣の腹で打ち抜く。ベルは反応する事もできずに一瞬で意識を落とすのであった。

「はぁ、はぁ……」

その後、意識を刈り取られるたびに叩き起こされながら激しい訓練を行っていたベルは息を絶やし膝を屈した。そんな彼の様子を見てレインは静かに剣を鞘に納める。

「ここまでだな」

ベルは未だに整わない呼吸で目の前に立つレインの立ち姿を見つめる。

（全然……今までと違う。攻撃が、当たる気がしない……）

今までの回避とは訳が違う。振るうナイフの軌道上に剣を添えられて完璧に相殺された。まるで未来予知のようにベルの動きが読まれている。

昨日ステイタスの更新をしシルバーバックとの一戦で勝利を飾って得た自信が完全に霧散した。

「……クラネル」

目を閉ざし僅かに黙考したレインは静かに口を開く。
「俺は今日から数日間、迷宮（ダンジョン）に潜る。しばらくはこうして付き合うことは出来ない。だから一つ、課題を残す」
レインの言葉にどうにか息を整えたベルは耳を傾ける。
「今日、俺は三度お前に剣を振るった。その三度には全て共通点がある、その意味を考えろ」
今日の訓練で三回ベルは気絶した。その全てはレインの一撃を身に受けたからだ。しかし、その三回に関連性があるようにはベルにはとても思えなかった。
「その時、お前が何を感じていたか。そして、俺が何を感じ取っていたかをよく考えるんだ。これは俗に言う駆け引き、その初歩になる」
戦闘は必ずしもステイタスの優った者が勝利する訳ではない。時には、駆け引きを制した者がレベル差を覆す事もある。
「駆け出しから抜けつつあるお前に、今一番必要なものだ」
上位の冒険者の中でもとりわけ読み合いに長けるレインだからこそ、その言葉には重みがある。期待と共に与えられた課題に、ベルは決意を改めて力強く頷いた。

◊

早朝の鍛錬を終えたレインは装備を整える為に本拠(ホーム)である黄昏の館にある自室へ戻った。建ち並ぶ尖塔により太陽の光があまり差し込まない外れの部屋であるが、案外レインはこの一室を気に入っていた。

彼は壁に掛かる長弓(ケラウノス)を背負い、矢筒を腰に据える。そして左腰にある鞘に納まった両刃剣(エリュシオン)にそっと触れた。

(……先程の動き)

レインが思い出すのは昨日とはまるで別人にでもなったかのような動きを見せたベル。

(経験値(エクセリア)を溜め込んでいたとしても、たかだか冒険者になって二、三週間の奴があそこまで成長するとは考えられない)

仮面越しに見えるレインの目は僅かに鋭くなる。

(特別なスキルか、魔法……だが、本人に自覚している様子は無い。そもそも人を騙せる性質ではない)

今日の鍛錬でさり気無く探りを入れたレインであるがベルは対した反応を示さなかった。ならば考えられるのは一つ――。

(神へスティア……か。存外、侮れない神物(じんぶつ)かもしれんな)

レインが彼の主神へ警戒を高めるなか、何処かでじゃが丸くんを売りさばくバイト女神がくしゃみをした。

不意に壁越し聞こえる足音にレインの耳がピクッと動く。すぐにコンコンと均一なリズムのノックが響き扉が開いた。

「――レイン、いる？」

「せめて此方が返事をしてから入って来い。アイズ」

扉からひょこっと顔だけを出すアイズ。割と自由に入ってくる彼女の姿にレインは呆れた様子で応じた。

（だが、昔よりはマシか……）

幼い頃のアイズはリヴェリアからのお説教を逃れる為に、レインの部屋に匿ってくれとばかりに避難しに来ていた。年下のくせに自分より実力のあるアイズが気に入らなかったかつてのレインであるが、不思議と彼女を拒む事は出来なかった。

「それで用件はなんだ？」

「フィンが、みんなで迷宮（ダンジョン）に潜るって言ってたから、むかえに来たの」

アイズの言葉にレインは深紫色の瞳を細めた。

「……お前も行くんだな」

「うん」

彼女の簡潔な返事にレインは僅かに顔を顰めた。不思議そうに首を傾げるアイズの前でレインは昨日、団長室でフィンと交わした会話を思い出す。

『何人か同伴者をつける。手は出させないが、見届けはさせてもらうよ』

『……それは、命令か？』

『ああ団長命令だ。従ってもらうよ』

仮面越しでもあからさまに不快な表情を示すレインであるが、フィンもまた譲歩するつもりはない。

あくまで要望を申し入れに来た側であるレインにはそもそもフィンの条件を拒絶する選択肢は無い。少しの間を置いてレインの諦めのため息が一室に聞こえた。

『分かった……条件を受け入れてやる』

『なら僕も君の挑戦を許可しよう。期待しているよ、レイン』

どの口が言う、と悪態の一つでも付いてやろうと思ったレインであるがフィンの団長という立場にも思うところがある為、大人しく席を立った。

『用件は終わりだ。俺は戻る』

『――レイン』

背を向け団長室を後にしようとするレインにフィンは声をかけた。後ろを振り返ら

ない彼にフィンは諭すように言葉を述べる。

『ウダイオスと対峙するまで数日ある。その間によく考えるんだ。君が先に偉業を成すことの意味を、ひいては彼女を追い抜くことの意味を――』

レインはフィンの言葉に反応を示す事なく団長室を後にした。

「……フィンからは何と聞いている？」

「お金が足りないから一緒にダンジョンに潜ろうって……」

（さすがに本来の目的は隠したか……）

レインの偉業への挑戦という本命の目的はアイズに伝わっていない。ある意味それは、フィンのアイズに対する配慮であった。

本来、冒険者の成長は自己責任である。

ファミリア内での競争などは別に珍しくは無い。家族であり同業者であり好敵手（ライバル）。ある意味それが眷属（ファミリア）達としての理想的な関係性。

だが、レインにとって年下でありながらずっと自分の前を走っていたアイズは少し複雑な相手である。レインがファミリアに加入した時、当時八歳であったアイズは既にＬｖ．２へと上がっていた。

徐々に彼女との差を詰め遂には追い付いたレインである。だが追いつかれた側のア

イズが、レインとの成長速度の差に少なからず焦燥を感じているであろう事は想像に難しくは無い。

（……アイズの内側にある黒い炎（渇望））

強くなりたいという願い。果てなき道へと彼女を駆り立てる原動力。満たされることのない想いを持つアイズだがその心は、その体は未だ幼さの残る少女のそれ。下手に刺激すれば破滅へと向かいかねない。

（俺は……それでも止まれない）

渇望を、野望を身に潜めているのはレインも同様。例え、命を天秤に掛けたとしても成し遂げると決めた事がある。優先順位が変わることはない。

「……そうか。ならさっさと向かうぞ」

「うん。みんな待ってると思う」

レインは廊下へ出て、事前にフィンと集合場所に決めていた中央広場（セントラルパーク）へ向かう事にする。そんな彼の背後をアイズは相変わらずの無表情で付いて行った。

後ろを歩くアイズへと意識を向けながら顔を覆う仮面を軽く触れる。

（――だが）

フィンの懸念にはレインも思うところがある。それにレインと言えど付き合いが長ければ情も湧く。本人は口にしないが、幼い頃から見てきたアイズの事はまるで妹のよ

うに――。

これが引鉄となり彼女が壊れてしまうことは、レインも当然望んではいない。

（ただ強くなるだけは不十分、という事か……）

脇目も振らずに上に登ることを考えてきたこれまでには無かった思考。更に高みへ至る事によって組織に生まれる弊害。そして、強者ゆえの責務。

もし偉業が成されればレインはＬｖ．６にランクアップする。それは最古参の三人に肩を並べる事を意味する。ロキ・ファミリアにとってそれは、レインが思っている以上に大きな意味を持つのであった。

「あ～二人ともやっと来たーっ！お～いこっちこっち～！」

日が中天に登る直前、アイズと共に中央広場（セントラルパーク）に辿り着いたレインは揃っている面々を見て割と本気でげんなりとした表情を見せた。

大きく手を振り呼びかけるティオナにレインは渋面を浮かべたまま答える。

「時間には遅れてはいない筈だが……」

「アンタ風情が団長を待たせてる時点で遅刻よ！身の程を知りなさいっ！」

「……いや、貴様の基準は聞いてはいない」

元々正午に集合する予定であった為、レインに非はないのだがティオネの裁定では有罪らしい。とうのフィンはいつもの如く苦笑いを浮かべるだけであった。

「――あ、あのっ！」

不意にその場にいた同胞から声をかけられた。最初からその少女が一団の中にいたのはレインも知っている。しかし、彼方から話しかけてくるなど考えもしなかった。

呆気に取られた様子でレインは、声をかけてきたレフィーヤ・ウィリディスの方へ顔を向ける。

「き、昨日は手を貸してくれてありがとうございますっ！きょ、今日からも、よろしくお願いしますっ！」

両手で杖をギュッと握りながら頭を下げるレフィーヤ。

今まで同胞（エルフ）から敬遠されてきた。同じファミリアの者であったとしても距離を置いていた。レフィーヤもそちら側だとレインは思っていた。

あまりに予想外の展開に流石のレインも思考が止まってしまう。

「あ、ああ……よろしく頼む」

それだけを返すのがレインの精一杯であった。

気まずい雰囲気になる二人の間にレフィーヤの隣に立っていたリヴェリアが入る。

「今回レフィーヤを推したのは私だ。お互い思うことはある筈だろうが……今の姿に目

を向けてほしい」

それはリヴェリアの心よりの嘆願。同胞(エルフ)達が互いに背を預け合うことを彼女は望んでいる。レフィーヤが変わろうとしている事を知ったからこそ今回リヴェリアはパーティに彼女を加える事をフィンに進言したのだ。

「――それはともかく」

言葉を切ったリヴェリアがレインの側に歩み寄り彼の肩に手を置く。

「私の目が黒いうちは無茶はさせんからなレイン……!」

彼の目の前には鬼がいた。それは怒れる鬼(ママ)の形相。美人ほど本気で怒ると怖いのである。

この場ではフィン以外で唯一、レインの挑戦を知っているリヴェリア。何度も無茶無謀を繰り返してきたレインが、またもややらかそうとしていると聞いて既に沸点に到達していた。

「……」

レインは答えない。フィンから許可を取っているのに何が問題なんだと言わんばかりの態度である。

彼女の掴むレインの右肩に力が込められる。徐々に強まっていく握力。遂にはギギギという軋む音を奏で始めた肩骨。体感ではなぜか猛者(おうじゃ)に頭を鷲掴みにされた時より

も痛い。
「ああ……分かった。頼むから……もう、離してくれ……」
「ふん……」
　レインの承諾の言葉を聞きリヴェリアはようやく手を離した。圧迫感から解き放たれた右肩。あと少しで迷宮（ダンジョン）に潜る前に使い物にならなくなるところであった。
「よし。じゃあ話がまとまったところで早速迷宮（ダンジョン）へ向かおうか」
　しれっとそう述べるフィンと視線が合う。ものの数分で色んな感情に襲われたレインは心底疲れ果てた様子で彼にジト目を向ける。しかしフィンはそんな視線もどこ吹く風と言った様子で微笑を溢すだけであった。
（こんのっ……小賢しい小人族（パヴァム）が……）
　最大限の恨み節を心の内で述べたレインは、諦めて大人しく共に迷宮（ダンジョン）へと向かうのであった。

第十一話［リヴィラ攻防戦〔序〕］

――迷宮（ダンジョン）第１８階層

迷宮（ダンジョン）内部とは思えない暖かな光と清浄な空気に満ちた大空間に足を踏み入れる。地上を出立してからそれなりの時間が経ち、レイン達は安全階層（セーフティポイント）の一つであるここ１８階層に辿り着いていた。

「いつ来ても綺麗ですね、この階層は」

「うん、そうだね……」

周囲の木々や細やかに流れる小川、そしてこの階層の名物でもある光り輝く水晶の天井（空）へと目を向けて顔を綻ばせるレフィーヤ。

「ねぇねぇ、どうする？このまま１９階層行っちゃう？」

「街（リヴィラ）に立ち寄る方が先よ。来るまでに集めたドロップアイテムを売り払っておかないと、どうせすぐに荷物が一杯になるわ」

１８階層には迷宮（ダンジョン）内部唯一の街が存在する。

階層の西部にある紺碧色の湖に浮かぶ大島。その湖岸から架かる橋を渡った所に『リヴィラの街』はあった。

「あー、この街に来るのも久々のような気がするなー」

面々は木の柱で組まれたアーチ門を潜る。門には三百三十四という数字が刻まれている。それはこの街がモンスターの襲撃などの異常事態（イレギュラー）により壊滅しそこから復活を遂げた回数である。しぶとい冒険者達の意地により存在し続けたこの街を侮蔑と称賛の意味を込めて『世界で最も美しいならず者達（ローグタウン）の街』と呼ぶ者もいる。

同時にギルドの監視下にないこの街は後ろめたい事がある者にとっては何かと都合の良い場所でもあった。

「宿はどうするの？またいつもみたいに、森の方でキャンプ？」

「ンー、今回くらいは街の宿を使おうか。野営の装備も待ってきてないしね」

「この街で宿を取るなど正気か？言っておくが金は出さんぞ」

「黙れ貧乏エルフ。ですが……団長、レイン（こいつ）の言う通り一週間もリヴィラ（ここ）で寝泊まりすれば結構な金額になると思いますよ？」

客層が冒険者に限定されているリヴィラの街の物価は恐ろしく高い。地上の数倍の値で物品が取引される。第一級冒険者であり並の冒険者よりは遥かに稼げる彼等ですら時折り戸惑いを覚える程である。

「いいよ、宿代は僕が全部出そう。君達はお金を貯めなきゃいけないみたいだしね」
代剣の分の借金（ローン）があるアイズは「……ごめん、フィン」と申し訳なさそうに謝る。初めから金を出す気などさらさら無いレインは街の様子へと目を向け僅かに目を細めた。
無言で周囲の様子を窺っていたリヴェリアが静かに口を開く。
「街の雰囲気が、少々おかしいな」
「ああ……静か過ぎる」
リヴェリアの呟きに応じるレイン。普段は冒険者が行き渡り活気に満ちるリヴィラであるが、今は広場にすらほとんど人影が無い。
レインは一度目を閉ざし鋭く尖った耳へと意識を集中させる。街の中を駆け巡っていくかのような感覚。街の中心地を超えた辺りで密集した冒険者の集団を感知した。
『こんなに集まって何があったんだ？』
『ヴィリーの宿で殺しだってよ』
『はぁ!?一体誰が――』
人集りの後方にいた冒険者達の会話を聞き取ったところで、レインは閉ざしていた瞼を開いた。すかさずフィンはレインに問う。
「何か分かったかい、レイン？」
「……どうやら、殺人があったようだな」

レインの一言に皆が驚愕を示す。基本的にこの街は冒険者しか行き来する事はできない。なら加害者も被害者も必然的に――。

「場所は?」

「西の端にある宿の前に人が集まっている。現場はおそらくそこだろう……どうする?」

「街で宿を取る以上、無関心でも無関係でもいられないだろう。行ってみよう」

フィンの命を受け場所を特定したレインが先導し件の宿へと向かう。やがて路地裏に密集する群衆の姿を発見した。集まる冒険者達の先にある洞窟の壁には『ヴィリーの宿』と書かれた看板が掛けられていた。

「うわ〜、ちょっとこれ、進めなさそう……」

「宿の中はっ、入れないんでしょうか?」

様々な亜人種が連なる野次馬の列。その後ろから首を伸ばしてどうにか宿の方の様子を伺おうとするティオナとレフィーヤ。

「ちょっと僕が見てくるよ。リヴェリア達はここにいてくれ」

小人族特有の小さな体躯ですいすいと人混みの足元を抜けていくフィン。「おぉ」とアイズやティオナが感心する横で、フィンに一途なアマゾネスはひどく取り乱した。

「団長っ、待ってください!?――ちょっとあんた達、退きなさいよ!」

「ひっ、ろ、ロキ・ファミリア……!?」

鬼気迫る形相を浮かべるティオネの姿に気づき怯える冒険者達。一斉に左右に割れる人混み。思い人（フィン）を追いかけるティオネを先頭にレイン達も洞窟の入り口をくぐった。

先行したフィンとも合流し六人で通路を進む。受付の長台（カウンター）のある広々とした玄関（エントランス）を過ぎ、宿屋の奥へと向かう。そして三名程の冒険者が入り口で待機する部屋を見つける。近寄るのがロキ・ファミリアの面々と理解したじろぐ冒険者達をよそに彼等は室内の様子へと目を向けた。

「……っ！」

「ぐろ……」

最初に目に入ったのは真っ赤に染まる床に転がる頭部の無い男の死体。首から上は握り潰された果実のように原型を留めていない。険しい表情を浮かべるアイズとティオナ。

その呟きに気づき、死体の横で現場検証を行なっていた男は顔を顰めながら入り口の方へと振り返った。

「あぁん？おいてめぇ等、ここは立ち入り禁止だぞ!?見張りの奴等は何やってやがんだ！」

「やぁ、ボールス。悪いけど、お邪魔させてもらっているよ」

黒い眼帯に筋骨隆々の体躯が目を引く人間（ヒューマン）の名はボールス・エルダー。リヴィラの街で買取所を営む上級冒険者であり同時に、このならず者達（ローグタウン）の街の実質的な大頭（トップ）である。
「僕たちもしばらく街の宿を利用するつもりなんだ。落ち着いて探索に集中するためにも、早期解決に協力したい。どうだろう、ボールス？」
「けっ、ものは言いようだな、フィン。てめぇ等といいフレイヤ・ファミリアといい強ぇ奴等はそれだけで何でも出来ると威張り散らしやがる」
ボールス不遜なの物言いに後ろで控えていたティオネはグルルと鋭く威嚇する。今にも飛び出しそうな彼女をレフィーヤは「お、落ち着いてくださいっ」とどうにか宥めていた。
「それで、どうなっているんだい？この冒険者の身元や、手にかけた相手については何か分かったことはあるのかい？」
「チッ……ああ、容疑者の女についてはまだ何も分かってねぇが、この野郎の身元については体に直接聞くところだ。――おい、『開錠薬（ステイタス・シーフ）』はまだか!?」
ボールスが廊下に向かって叫ぶと、ヒューマンの冒険者がちょうど駆けつけてきた。慌てた様子で入ってきた男は真紅の液体の入った小瓶を携えていた。
ボールスは遺体を無造作にひっくり返すと、待機していた小男が小瓶の中に入る液体を上裸の背に垂らす。

「『開錠薬（ステイタス・シーフ）』って、確か……」
「眷属（われわれ）の恩恵（ステイタス）を暴くためだけの道具（アイテム）だ。正確な手順を踏まなければ、それ単体だけでは神々の錠（ロック）は解除できないがな」
　疑問を抱くレフィーヤに面前の様子を険しく見つめるリヴェリアは簡潔に説明した。清廉潔白な彼女にとって死者の身体を無闇矢鱈に弄ることはあまり受け入れられるものではなかった。
「ボールス。できた」
「おう、でかした……って、いけねぇ、神聖文字（ヒエログリフ）が読めねぇ」
　遺体の背に溶液の線を走らせていた小男が呟くと、神聖文字（ヒエログリフ）の羅列が浮かび上がってくる。しかし、ボールスも小男も神々の文字を解読できないため部下を呼び出そうとした。
　そんな彼の前にリヴェリアとアイズが歩み寄る。
「待て。神聖文字（ヒエログリフ）なら私が読める」
「私も」
　それを聞いたボールスは退き、二人は遺体のそばへと進み出て、複雑な神の筆跡の解読を始める。そんな光景を見守るだけしか出来ず暇を持て余していたティオナはレインに声をかける。

「ね～、レインは神聖文字(ヒエログリフ)読めたりしないのー？」
「……奴らほどでは無いが、少しは分かる」
「えっ!?誰かに教わったりしたの？」
　レインの思わぬ答えにティオナは興味津々な様子で更に尋ねてくる。意外な事実に同族であるレフィーヤも思わず其方に耳を傾ける。
　ティオナの言葉を受け少しだけ男の背に浮かぶ文字列に目を向けたレインは彼女に疑問に答えることなく突然、静止した。
「――ハシャーナ・ドルリア」
　目を見開き仮面越しでも明らかに驚愕しているのが分かるレインは、骸となった男の名を静かに呟く。
　そして、側に控えていたフィンはレインのあからさまな変化を見逃すことはなかった。

◇

『へえ、お前が黒衣(フェルズ)が言っていたレインか、よろしくな。俺はハシャーナ・ドルリアって言うんだ』

褐色の肌の男が差し出す握手にかってのレインは応じなかった。
その男とは幾度か、フェルズを介してウラノスから出される厄介な冒険者依頼（クエスト）を共にこなした事があるだけの間柄であった。
ウラノスの神意を理解している数少ない同士の一人であるが、あくまで他のファミリアの冒険者であるため、レインの方からの接触はできるだけ控えていた。
しかし――。
『なあレインよぉ。この冒険者依頼（クエスト）終わったら、一緒にナン――んん、飲みにでも行こうぜ』
『ふざけろ。そんなもの貴様一人で行けばいいだろう』
『バッ、お前、俺一人で行っても女の子が寄ってこねぇから言ってんだよっ！』
『死ね』
ハシャーナの誘いにレインは一度たりとも乗ったことはないし、会話もレインからは最低限のものしかなかった。
だが、一度だけレインが気になった事を尋ねた事がある。
『――何故貴様はこんな厄介事を引き受ける？幾ら主神（ガネーシャ）がウラノスと協力関係であっても、貴様に利は一切無いはずだろう？』
『んー、まあそんな深い理由はないぜ。俺は主神（ガネーシャ）に拾ってもらった恩があるからな。他

の奴がやりたがらない事でもなるべく果たしてやろうって思ってるだけだ』

そのハシャーナの言葉に嘘はないのだろう。現に彼は上級冒険者になってなお面倒な都市の門番などの役割も担っている。それは一重に主神（ガネーシャ）への尊敬ゆえなのだろう。

そんな裏表のない人物だからこそ、ガネーシャもウラノスも実力以上に彼を評価していた。

そんなハシャーナ・ドルリアの顛末は、一夜を共にするはずだった女に欺かれ殺される、そんな呆気ないものであった。

フィンの命によりリヴィラの街を一望できる高台から様子を伺うレインは、死体となり再会した男について想いを馳せる。

（女に誑かされて死ぬとはな。貴様らしい末路だ、嗤ってやる）

仮面の下に笑みを貼り付けるレイン。しかしその瞳は鋭さを増し、弓を握る左手にはより一層の力が籠る。

眷属（ファミリア）でも仲間でもない。ましてや友人などでもない。冒険者依頼（クエスト）を共にしたのも指の数程度のもの。それでも、他人ではない。

レインと言えど、何も思わないはずはない。

（――――!!）

感覚を広域に広げていたレインの耳がピクッと動く。街の出入口を封鎖しフィン達が広場にて一人一人のチェックを行なっている現状で、コソコソと動き回る気配をレインは察知した。

◊

男から拝借した全身型鎧（フルプレートメイル）を纏った人物は、人の集う広場から離れて行った三人へと視線を向ける。

（獣人の女が宝玉（たね）を持っているのは把握した、が――）

路地裏で会話を交わす三人。宝玉の入ったポーチを持つ獣人と杖を握る山吹色の髪のエルフには意に介すことはなく、その中心に立つ金髪金眼のサーベル使いを注視する。

（あの女は強いな）

負けるとは思っていないが、それなりの時間がかかると判断する。

ふと、女剣士とエルフに問い詰められた獣人はポーチを開き中にある宝玉を晒す。その瞬間、厄介だと判断した女剣士が口を押さえて崩れ落ちた。

獣の如き本能が告げる。迅速に事を成すなら此処だ、と。

金属鎧を纏った人物は爆発音を奏で地を穿ち蹴った。一気に女剣士の背後に迫り、大剣を振り上げる。

「あ、アイズさんッ!!」

エルフの小娘は突如現れた刺客に目を見開き、女剣士のものであろう名前を叫ぶ。しかし奇抜な宝玉の姿を見て襲われた目眩により女剣士は迫る襲撃者へと反応ができない。

「――死ね」

非情な宣告と共に迫る重厚な刃。鎧を纏った人物の規格外の身体能力も相まり、直撃すれば両断は避けられない。

不意に、風を切り裂く三条の音が響いた。

それは、襲撃者の知覚外から突如現れた三連の剛速の矢。

「な――――」

ほぼ同着で同箇所に降り注いだ三矢。その威力は金属型鎧（フルプレートアーマー）という重装備を纏っていても凄まじく、衝撃により襲撃者に反応を許すこともなく吹き飛ばした。

「れ、レイン……」

いまだ呼吸の整わないアイズは、高台から此方を見下ろす弓使いの名前を呟いた。名前を呼ばれたレインは吹き飛ばされ土煙が上がる方へと鋭い視線を向け続ける。

「チッ……面倒なやつが他にもいたとはな……」
鎧を纏った人物は大剣の一薙により土煙を切り裂く。
見覚えのある装備一式を眺めるレインは静かに口を開いた。
「ハシャーナ・ドルリアを殺したのは貴様だな」
「名など知らんが、あの間抜けな男の事を言っているのならその通りだ、弓使い」
嘲笑の込められた答えにレインは顔色一つ変えることはない。ただ淡々と普段と変わらぬ表情で弓を構える。
「ならば、貴様は俺が殺す」
鳴り響く雷鳴の如き轟音が、両者の開戦の狼煙となった。

第十二話［リヴィラ攻防戦〔破〕］

――迷宮（ダンジョン）第18階層

雷鳴の如き轟音と共に放たれた一射。

雷轟一殲（ライジング・ボルト）の補正の乗った強弓は金属型鎧（フルプレートメイル）の人物へと一直線に向かった。

「な、に――!?」

咄嗟に大剣を構える襲撃者。

しかし、破壊力を帯びた鏃は大剣を貫き分厚い装甲へと衝撃を届けた。重装備を着込む相手であるが容易く彼方へと吹き飛ばしてみせる。

激しい土煙の上がる着弾点に鋭い視線を向けたままレインはアイズ達のいる場所に降り立った。

「あの女の相手は俺がする。貴様らはフィンの下へ戻れ」

「ま、待って、私も残る。レイン一人じゃ――」

膝をつくアイズがどうにか立ち上がろうとする。だが、レインはアイズの首筋に躊躇

いなく手刀を放つ事によって、彼女の協力を一蹴した。
「アイズさん!?」
「……早く行け」
　レインの手により気を失うアイズ。側にいたレフィーヤは倒れようとする彼女を支えた。尊敬する人物に手を出されレフィーヤはキッとレインへ睨むように視線を向ける。
「――逃すと思うか？」
　立ち登る砂煙を突き抜けてレインの面前まで急速に迫るのは赤髪の女。その格好は先程までの重装備とは違い、最低限の布を帯びた軽装な装いであった。
（鎧をッ……想定より早い……!!）
　女の振り上げる拳に、レインは咄嗟に弓を握る左腕で防御体勢を取る。受け止めた腕は鈍い音を鳴らし弾かれてしまう。
「チッ……！」
（力も、俺より上か……ッ）
「終わりだ」
　衝撃に上体の体勢を崩すレイン。赤髪の女は間髪入れる事なく回し蹴りを放った。レインは勢いよく吹き飛ばされ背後の水晶群へと叩きつけられる。

「れ、レインさんッ!?」
「――次は、貴様等だ。宝玉(たね)は返して貰うぞ」
襲撃者の女はアイズを抱えるレフィーヤを冷たく見下ろす。女の狙いである宝玉(たね)であろう物を持つ犬人(シアンスロープ)のルルネ・ルーイは恐怖のあまり全身を震え上がらせている。
動き出せない二人に赤髪の女が手を伸ばした瞬間、高速で飛来した矢が迫った。女は身体を捻り無理やり回避をするが、更に二射、三射と矢が放たれる。
「――愚策だぞ。俺に距離を取らせるのは」
「ク、ソがッ……!」
続け様に迫る矢にさすがの女も悪態を吐きながら後退した。
反対側からは矢を番えたレインが姿を表した。レフィーヤ達を中心に同程度の距離を置いた二人は鋭い視線を交差させる。
レインは赤髪の女へと視線を向けたまま、レフィーヤへと口を開く。
「何度も言わせるな。邪魔だ、さっさと行け」
「――ッ……ルルネさん。行きましょう……!」
「あ、ああ」
レフィーヤは彼の物言いに悔し気に顔を顰めるが、二人との実力差は明らかであるためアイズを抱えて大人しく引き下がる。震えるルルネも何とかレフィーヤに着いて行

く。

弓を引き絞ったままレインは先程から感じていた違和感を口にする。

「大人しく見逃すとはな」

「邪魔する奴は皆殺しだ。貴様もあの女共も」

「……この街には俺と同格の冒険者が複数いる。先に限界が来るのは貴様の方だ」

「フン」

レインの言葉に赤髪の女は鼻を鳴らしながら自身の懐へと手を伸ばす。取り出したのは一枚の緑葉。彼女はそれを自身の口に当て単調な音色を奏でる。

（草笛？何かの合図か？だが、周囲に女の仲間らしき気配は――）

「――言ったはずだ。皆殺しだと」

「……ッ!?」

女がそう宣言した瞬間、突如地中から複数の這い出るような響音をレインの耳は拾う。

（――まさか）

地鳴りにも似た音にレインは既視感を抱く。

思い出すのは先日の怪物祭（モンスターフィリア）。それは、無手とはいえアイズやティオナ、ティオネなどの第一級冒険者に苦戦を敷いていた。女神（フレイヤ）が騒動を起こすために放ったモンスター

に紛れてなお異彩を放っていた存在。
「チッ……調教師(ティマー)か」
地面を突き破り出現したのは食人花の大群。
リヴィラ全体を巻き込んだ攻防戦が幕を上げる。

◇

「ここで、例のモンスターか……」
リヴィラの広場にいたフィンは、周囲を包囲するように出現した食人花のモンスターを見て呟く。そして顎に手を当てながら思考を回してゆく。
(明らかな意図を持った配置……報告にあった怪物祭(モンスターフィリア)の一件と言い、やはりあのモンスター達の手綱を握っている存在がいる)
少し前に聞き覚えのある雷鳴が響いた方角へとフィンは視線を向ける。
(雷轟一殲(ライジング・ボルト)……。あのスキルをレインが切ったと言う事は彼が対峙しているのは十中八九、モンスターではないね。けど、アレだけの威力を持つスキルを躊躇いなく使ったことを考えるなら相手はかなりの実力者か、あるいは今すぐに処理すべきと判断した、と言う感じかな)

実際には見ていないにも関わらず、現在のレインの状況を正確に判断するあたりさすがは勇者（ブレイバー）と言わざるをえない。

（援軍は――無理だな）

自身の面前に広がる戦況を見つめた勇者（ブレイバー）は迷いなく即断し、すぐさま周囲に指示を飛ばす。

「リヴェリア、あのモンスターは魔力に反応する、できる限り大規模な魔法で付近のモンスターを集めろ！ボールス、五人一組で小隊を作らせるんだ数で当たれば各班一匹は抑えられる！」

「分かった」

「お、おう!?」

フィンの指示を受けたリヴェリアはすぐさま詠唱を開始し、魔法円（マジックサークル）が広がってゆく。ボールスもまた、突然のモンスターの出現に慌てふためく冒険者達に怒鳴り散らすように指示をする。

「ティオナ、ティオネ。君達はリヴェリアの魔力に引き寄せられなかった個体を狩れ」

「はいっ！団長っ！」

「おっけー！いっくよ～っ！」

ティオナとティオネ、駆け出す二人の鋭い得物が次々と食人花を刻んでゆく。そして

フィンもまた広場に迫る個体を愛槍の一刺しで穿つ。
押し寄せるモンスターの群れに三者が無双とも言うべき活躍を見せる。
「やっぱ、バケモンだ……ロキ・ファミリア」
街の冒険者達をまとめ上げたボールスは、彼等の姿を見て呆れたように呟くのであった。

◇

「な、なんだよこれ、何でリヴィラにモンスターが……!?」
「あのモンスターは……」
レインと赤髪の女が対峙する場所から退いたレフィーヤ達はフィンと合流するために広場へと向かうが、突如彼女達の道を遮るように食人花のモンスターが姿を現した。
怪物祭（モンスターフィリア）での一件に巻き込まれたレフィーヤは、目の前に現れたのが同様のモンスターであることを理解するが、アイズやティオネ、ティオナが共に戦ってくれたあの時とは状況が全く違う。
（どう、すれば……）
面前まで迫る食人花の群れ。レフィーヤは未だに目を覚さないアイズの顔を見つめ

る。

（アイズさんを起こすしか……けど――）

レフィーヤが思い出すのは先程、ルルネの持っていた宝玉を見て崩れ落ちるアイズの姿。明らかにただならぬ様子の彼女に無理はさせられない。

やり方は不服だが、レインがアイズの状態を気にかけて戦線から外した事はなんとなくレフィーヤも察していた。

（あの人達ならきっと……）

レフィーヤが思い浮かべるのは、いつも自身を支えてくれるファミリアの幹部達の背中。それは、強く高潔な英雄達の姿。それは、レフィーヤの憧れだった。

強くなると決めたのだ。守られるだけの存在にならないと、そう誓った。

震える両手で杖を握りしめてレフィーヤは大きく息を吸った。

「――ルルネさんッ!!」

「な、なんだっ」

レフィーヤの突然の呼びかけにルルネはビクッと耳を動かして振り向く。

「私がモンスターを引きつけるので、ルルネさんはアイズさんを連れて広場へ向かってください！」

「だ、大丈夫なのか!?お前、私と同じＬｖ．３だろ!?」

「――ッ、大丈夫です！アイズさんをお願いします！」
「あ、ああ」
ルルネの言葉に一瞬だけ決意が揺らぐレフィーヤであるが、半ば強制的にアイズを彼女に託す。着実に此方に迫るモンスターの前に立ったレフィーヤは杖を力強く構えた。
（ただ詠唱を唱えるだけじゃすぐに捕まる。なら――）
レフィーヤの中で一つだけ浮かぶ打開策。
成功した事は一度もない。それでも魔法しか使えぬ彼女に選択肢はそれしかない。
渦巻く魔力の奔流が彼女の身体から溢れるのを察し、モンスターの触手が一斉にレフィーヤの方へと狙いを定める。
レフィーヤは詠唱を唱えるために大きく口を開く。そして――。
「【誇り高き戦士よ。森の射手隊よ】」
譜を声に乗せた瞬間、彼女は力強く地を蹴った。
食人花から逃げるように走り出したレフィーヤ。しかし、詠唱は途切れる事なく続く。
彼女の選択、それは並行詠唱。魔導師にとっては一つの到達点である。
これまで何度も挑戦してきたレフィーヤであるが、成功した経験は一度もない。分が悪い賭けであるがアイズ達を確実に広場へ届けるにはこれしか選択肢がなかった。

「【押し寄せる略奪隊を前に、弓を取れ】」
（行ってください！ルルネさんッ！）
レフィーヤは走り去りながら、視界の端にいたルルネに一瞬だけ視線を交差させる。
レフィーヤの意思を汲み取ったルルネは複雑な表情で頷き、アイズを連れて走り出した。
「【同胞の声に、応え、矢を、番えよ】！」
モンスターに追われながらの詠唱。一瞬でも気を抜けば魔力が途切れかねない極限の状況で、レフィーヤはなんとか詠唱を紡ぐ。
しかし、それも長くは続かない。
「【帯びよ炎、森の灯――――ぐッ!!」
（嘘っ!?足をっ!!）
追いかける食人花の蔓がレフィーヤの足を絡め取る。
全速力で走っていた事もありレフィーヤは転がるように倒れ込んでしまう。詠唱も当然のように途切れ、魔力が霧散してしまった。
「――ッ!!」
（も、もう一度詠唱を……！）
足を抑えられ身動きの取れないレフィーヤ。

食人花達は彼女の恐怖心を駆り立てるようにゆっくりと迫って来る。しかし突如、目と鼻の先と呼べる距離まで詰められたところで、食人花達の蛇のような触手が一斉に明後日の方向へと向きを変えた。

（この、風は……）

柔らかな風がレフィーヤの頬を撫でる。

その瞬間、レフィーヤの面前にまで迫っていた食人花が両断された。

『ギ――――ッ!!』

断末魔すら上げることが出来ずに灰となっていくモンスター。その上には風を纏う情景の姿があった。

「アイズ、さん」

「頑張ったね、レフィーヤ」

（――あぁ）

レフィーヤはアイズとすぐには視線を合わせられなかった。彼女もアイズが目を覚ましてくれた事にはとても安堵している。だが――。

（まただ……また守られてしまう）

それ以上にあるのは、悔しさ。結局、情景の彼女を頼ってしまったと言う事実。レフィーヤはそんな自分の弱さが許せなかった。

だが、彼女は気が付かない。これまでの自分であれば守られる事に恥ずかしさこそ感じても悔しいと言う感情はなかった。間違いなくレフィーヤは変わろうとしている。

「レフィーヤ……――ッ!!」

レフィーヤの様子に不思議に思うアイズであったが、背後から続々と食人花のモンスターが現れてきたためそちらへと向きを変えた。

「お～い！」

「え、ルルネさん!?」

アイズが来た方向から息を切らしながらルルネが駆け寄って来る。レフィーヤの側までたどり着いた彼女は、「はぁ、はぁ……早すぎだろ剣姫」などボヤきながらどうにか息を整える。

「ど、どうして戻って来たんですか!?」

「あんなの相手に置いて行けるわけないだろうっ!?た、たしかに怖いけどさ、それでも――」

「ルルネさん……」

レフィーヤの問いになんとも言えない表情で答えるルルネ。臆病な気質の彼女であるが、それでも必死に立ち向かおうとするレフィーヤの姿には思うところがあった。

そしてルルネは、レフィーヤが囮を務めた時に物陰で気を失っているアイズをひたす

ら揺さぶり、なんとか起こす事に成功したのだった。

「二人とも下がってて、すぐに終わらせるから」

食人花の群れを前に剣を構えるアイズ。彼女の指示通り大人しく背後で待機するレフィーヤとルルネ。

翠緑の魔力が高まる。アイズは自身の魔法を更に重ねるように詠唱を呟いた。

「【目覚めよ（テンペスト）】」

その瞬間、魔力を感知する食人花の群れがアイズへと明確に狙いを定めた。アイズもまた構えを取り迎撃に備える。

だが、突如――。

『――アァァァァァァァァァァッ!!』

アイズのエアリアル（魔法）に呼応するように、ルルネのポーチにある胎児のような宝玉がけたたましい産声を上げた。

◇

立ち並ぶ美しい水晶群。

此処は群晶街路（クラスターストリート）と呼ばれるリヴィラの名所である。だが、この美しい光景を破壊つ

くさんとする程の激しい戦闘が今行われていた。
「ハァッ!!」
「ガァァァァァ!!」
水晶の柱越しに矢を放つレイン。彼は遮蔽物のある立地と弓矢の技量を生かし女に間合いを詰めさせないように立ち回り続ける。
対する赤髪の女は、戦車のように立ち並ぶ障害物を全てを破壊し標的（レイン）へ向けて一直線に突き進む。
結果的に、両者が決め手に欠けている状況のため戦闘は膠着していた。
（ガレス並みの力に、ローガ程度には速度もある）
距離をとりながら弓を放ち続けるレインは、冷静に敵対者の力量を分析していく。
（それに加えて、人外じみた身体の強度）
先程から女は水晶群を体当たりで破壊しながら突き進むという荒技を見せている。水晶を破壊する事はレインにもできるであろうが、その状態で加速を維持する事はさすがに不可能だ。ガレスのような都市でも一二を争う規格外の力と耐久を持ち合わせて初めてできる芸当である。
（やはり接近戦では分が悪い、か――）
レインは思い浮かべる。

つい先日味わったばかりの濃密な敗北の記憶を。
（だが、奴ほどではないな）
それは、敵に塩を送られると言う苦々しい記憶であった。

『く、そッ！』
『噴ッ――!!』
レインの白剣が重厚な大剣によって呆気なく弾かれ、彼は石壁に吹き飛ばされる。
彼の類稀な聴覚による先読みによってレインはオッタルの隙を正確に突いている。だがオッタルは圧倒的な力と敏捷性で容易くレインの剣技を上書きしてしまうのであった。
『はぁ……はぁ……』
『……』
膝をつき息を整えようとするレインの姿を見て、オッタルは軽く剣を引く。レインの呼吸音のみが聞こえる静寂の中、オッタルが静かに口を開いた。
『――お前の読みは精度は高い。だが、お前自身があまりに遅すぎる』
『あァ!?』

散々痛めつけれた相手から突如貶されたレインはあからさまに苛立ちを示す。疲労と痛みも重なり素を晒しているが気がついてはいない。

そんなレインの様子を気にする事なくオッタルは言葉を続ける。

『お前の視線は間違いなく俺の急所を貫いていた。だが、俺の速度ならお前の斬撃が到達する前に叩き潰す事は容易い』

『……チッ』

オッタルの指摘に腹立たしげに舌打ちを打つレインであるが本人も自覚しているため言葉を返す事はしない。

『正解を求めすぎるな。常に俺達が冒険者であること心に刻め』

頂天を目指すのであれば、時として未知（リスク）へ挑む必要もある。厳しい戦いであればあるほど、正しい選択肢を模索する時間はない。

ゼウスやヘラという１０００年もの間、オラリオに君臨し続けてきた者達に挑んできたオッタルだからこそ与えられる助言。

『今のままでは俺すら越えられんぞ』

オッタルのその一言に、雷鳴が爆ぜる。

レインの放った雷速の突きは分厚い大剣に受け止められる。鍔迫り合いの最中、レインは睨むようにオッタルを見上げた。

『勘違いするなよッ！貴様は、ただの通過点に過ぎないッ!!』

レインは咆哮を上げながらオッタルへ白剣を振るった。

何度も転がされ、何度も返り討ちにあう。全身が言うことを聞かなくなるまで挑み続ける。

全力全霊を持って敗北した。ゆえに、それはかつてない経験となった。

水晶群を間を跳び間合いを確保するレイン。彼は空中で反転し、女へ向けて高速で三連射を放った。

（一射では話にならん。二射でようやく足を止め――）

水晶越しに突如迫る一矢目を女は回避する。だが、回避した先にはノータイムで二矢目が到達した。

その瞬間、レインは地を蹴り女へ向けて一直線に走り出す。

「クッ……！」

（三射でやっと攻勢に出れる）

二矢目を獣の如き超反応で叩き落とす女。そこに重なるように放たれた本命の三矢目。さすがの女も三射目に対しては体を傾けて急所を避けるのが精一杯であった。

矢が女の左肩を貫きながら僅かに体勢を崩したところで、白剣（エリュシオン）を抜刀したレインが急速に接近した。

「なめるなァッ!!」

迫るレインに女は右の拳を大きく振り上げる。空気を切り裂き、岩塊をも砕かんとする一撃。まともに当たれば致命傷は必然。多くの者が本能的な恐怖から回避を選択するだろう。レインの聴覚も女の一撃に警鐘を鳴らしている。

（完璧を求めるな。それは戦闘において、隙となる）

自分に言い聞かせるように心の内で呟く。

迫る剛拳に対してレインの取った対応は最低限、重心をずらすのみ。自身の攻撃を最優先にする。

「ぐッ……!」

仮面と共に頬の肉を抉るように掠めていく拳。

僅かな傷と痛みが生じる。しかし、その代わりに得たのは完全に開いた女の胴。すなわち完全なる隙。

「シィッ――!」

全身の捻りを乗せて放った下方からの切り上げは、女の上半身に鋭い斬撃を刻む。だが、女も間一髪で地を蹴り僅かに後ろへ下がったため致命にまで至ることは無かった。

「チッ！」
「……」
（アレで決められないか……ならば――）
刻まれた傷に忌々しげに舌打つ女。黙考するレインもまたこれまでの戦いで少なからず女の攻撃を喰らっている。
先程の一撃でようやく五分に持ち込めた。ここからどう組み立てていくか思考を組み立ていくレイン。
しかし、その時――。
『――アアアアアアアアアアアッ!!』
リヴィラ全体に響き渡る叫喚が二人の耳に届いた。それを聞いた女は再び「チッ」と舌打ちを打ち小さく呟く。
「……宝玉（たね）が共鳴したか。やはり、近くにアリアがいるな」
「アリア、だと……？」
思いがけない女の一言。その言葉にレインの脳裏には、何故か風に愛された少女の姿が過ぎる。
（いや、まさか――）
「その顔、心当たりがありそうだな」

「ッ――！」

レインが微かな動揺を見せた瞬間、急加速し詰め寄る女。

すぐさま構えを取るレインであるが、その途上でフラッシュバックしたのはハシャーナ・ドルリアの亡骸。そこに彼女（アイズ）の姿を置き換えてしまった。

心の揺れが、動きを鈍化させる。

「――終わりだ」

（く、そ――）

加速を乗せた女の剛拳は不完全な防御を取るレインの左腕をへし折り、その勢いのままレインの胸を貫く。

噴出する鮮血と共に、レインはその場に崩れ落ちた。

第十三話［リヴィラ攻防戦〔急〕］

――迷宮（ダンジョン）第18階層

アイズが魔法（エアリアル）を纏った瞬間、襲撃者の女が狙っていた宝玉（たね）が叫喚を上げポーチの中から勢いよく飛び出す。胎児のような見た目からは想像だにしない跳躍力を見せ、宝玉（たね）はアイズの足元にいた瀕死の食人花のもとへと着地した。

その瞬間、今にも灰と化しかねない程に死に体であった食人花が絶叫を上げる。

『オオオオオオオオオオオオオオッッ!?』

「な、なんだよ……アレ……」

「……ッ!?」

食人花に張り付いた宝玉（たね）はモンスターの体皮と同化するように寄生を始めた。呆然とその光景を見守っていたレフィーヤとルルネの面前で、寄生された食人花はその体躯を大きく膨らませてゆく。足元が大きく隆起しアイズも咄嗟にレフィーヤ達のもとへと退いた。変容を見せ始めた食人花は苦し気に体躯を震わせながら周囲に残存する個

体を摂り込み始める。

『アアアアアアアアアアアッ!?』

飲み込まれていく食人花の群れの叫びが辺りに木霊する。やがて小さな丘とも言うべきサイズにまで成長した食人花。その巨大な肉体の天頂では、蕾から花弁が開くかのように女体の上半身のような輪郭が姿を現した。

「あ、あのモンスターは!?」

「５０階層の……」

『――――ッアア!!』

アイズとレフィーヤは出現した女体型のモンスターの姿に遠征での記憶が過ぎった。見上げていた彼女たちの視線に気づいたモンスターは幾十にも及ぶ極太の触手を彼女たちへと向ける。

「――ッ、掴まって……!」

触手が此方へと迫った瞬間、アイズは両手に二人を抱えて後方へと駆け出す。しかし、水晶や家屋を薙ぎ倒して様々な方向から現れる幾つもの触手を相手に、二人を抱えた状態ではすぐに追いつかれてしまう。

（このままじゃ――）

「いっくよーっ!!」

アイズの背中に届こうとした瞬間、快活な声と共に極太の触手が真っ二つに断ち切られた。
「うわっ！なにあれ!?蛸(タコ)っ!?」
「ティオナさんっ!!」
アイズ達の前に着地したティオナは、食人花が絡み合って触手だらけとなった巨躯のモンスターの姿を見て「うげーっ」と若干引いた様子であった。
そんな彼女に更に触手が迫り、見かねたレフィーヤが慌てて叫ぶ。
「えいっ！」
無邪気な声と共に振われる大双刃(ウルガ)が触手を爆散させる。規格外の重量を持つダブルブレードを軽々と扱う少女はいつもと変わらぬ笑みで三人へと顔を向ける。
「まっすぐ行けばフィンがいるからさ。とりあえずここはアタシに任せてよ」
「……うん。お願い、ティオナ」
それだけを述べティオナの返事を待つことなくアイズは地を蹴った。
依然として彼女に抱えられたままのレフィーヤは、一人残るティオナの背を見た。その姿は、とても強く自信に満ちたものである。憧憬の彼女に信頼され頼られるような強さが欲しいと悔し気に奥歯を噛んだ。

「う～ん……狙いはもしかしてアイズなのかな？」

通路を覆いつくす無数の触手。その動きにティオナは不思議そうに唸る。彼女の呟きの通り、触手の群れは目の前に立つティオナではなく後方で遠ざかっていく三人へと狙いを定めている。

「――ま、いっか」

しかし彼女が頭を悩ませるのはそこまで――。

思考を止め、とりあえず面前に迫る触手の群れに向け大双刃（ウルガ）をフルスイングした。

炸裂音と共に、複数の触手がまとめて切り裂かれる。

「まだまだいくよ～っ！」

快活な笑みと共に次々と振り下ろされる規格外の斬撃。それは、津波のように通路を覆う無数の触手を単独にて押し返して見せた。

大質量の得物とレベル５の中でも随一の膂力を持つティオナ・ヒリュテだからこそ生み出せる光景。これこそが大切断（アマゾン）の本領。

『オオオオオオオオ――!?』

ティオナの斬撃の嵐に、モンスターが苦悶の悲鳴を上げた。巨躯を誇るモンスターにとってティオナのいる通路にある触手は身体の末端でしかない。だが、これほどまでに一瞬で大幅に欠損すれば話は変わる。突如、訳も分からず指先を失ったようなものだか

らである。
「お、やっとこっち見たっ」
『――ッアアア』
ようやくティオナを敵として認識したモンスターは今まで以上に苛烈に攻め立てる。
彼女を囲むように全方位から迫る触手。ティオナは大双刃（ウルガ）を両手で旋回させることにより、バッサバッサと大木のごとき太さの触手を切り裂いてゆく。しかし、それでも黄緑色の嵐は途切れることなくティオナを襲い続ける。
「って、キリないんだけど～っ!?」
「――あんたが考えなしに突っ込むからでしょッ！」
グチるティオナの前に現れたのは、一対の湾短刀（ククリナイフ）を華麗に振るい複数の触手を細かく刻む自身の姉であった。
「ティオネ!!」
「アタシだけじゃないわ」
ティオネの登場に続くように現れたのは黄金の穂先。次々と触手を穿つのは小人族（パウルム）の英雄フィン・ディムナ。彼は即座に二人に向け指示を飛ばす。
「話はアイズから聞いたよ。レフィーヤとリヴェリアの魔法であれを拘束する。二人は詠唱が終わるまでレフィーヤを守ってくれ。僕はリヴェリアの方へ行く」

「分かりましたっ！団長ぅ!!」
「りょ～かいっ！」
　指示を出すフィンの視線の先では、二人の魔導士が巨大なサイズを誇るモンスターの両端へと向かっていた。その姿を確認したティオナとティオネはフィンに返事をし、すぐさまレフィーヤのいる西側へと駆ける。そしてフィンは彼の指示で通路の最後方で待機しているアイズへと一瞬だけ視線を送り、リヴェリアのもとへと急いだ。
「……」
　ルルネを安全な場所へと避難させた彼女が立つのはモンスターの触手が届かぬギリギリの場所。仲間が戦っている状況で何もしないのはアイズにも思うところがあるが、同時に彼女は勇者（ブレイバー）の指示に絶対の信頼を置いている。
　その時を、剣姫は静かに待つ。

［ウィーシェの名のもとに願う。森の先人よ、誇り高き同胞よ。我が声に応じ草原へと来たれ］
　山吹色の魔法円（マジックサークル）の上でレフィーヤは目を閉ざし唄を詠む。
　その面前では魔力に吸い寄せられるように伸ばされる触手を、二人のアマゾネスが次々と切り裂き伸びる魔の手を阻んだ。

「【繋ぐ絆。楽宴の契り。円環を廻し舞い踊れ。至れ、妖精の輪】」
思い起こすは、彼女の師である最強の魔導士の姿。だがこの魔法は九魔姫（ナイン・ヘル）ですら持ちえぬ、彼女だけの特権。それは、千の妖精（サウザンド・エルフ）にのみ許された召喚魔法（サモン・バースト）。
「【どうか、力を貸し与えてほしい――エルフ・リング】」
詠唱の完成と共に山吹色の魔法円（マジックサークル）が、翡翠色に染まった。

「そろそろかい？」
「……ああ」
レフィーヤの膨大な魔力が立ち昇る場所から巨大なモンスターを挟んで反対側の位置でフィンとリヴェリアは待機していた。勇者（ブレイバー）の問いにリヴェリアは閉ざしていた瞳を開き応じる。そして彼女は握る長杖を構える。その瞬間、レフィーヤをも凌ぐほどの超大な魔力の奔流が渦巻いた。
「――行くぞ」
「任せたよ、二人とも」
不敵な笑みを溢すフィンの目の前で二つの詠唱が重なる。

「【終末の前触れよ――】」
「【――白き雪よ】」
唱えるは同一の詠唱。響き渡るは二つの声音。
「こいつらッ……!!」
「え～、まだ増えるの～っ!?」
二つのすさまじい魔力の反応にさすがにモンスターも焦りを見せたのか、更に増殖した触手の群れがヒリュテ姉妹を攻め立てる。
「――悪いけど、ここは通さないよ」
一方、リヴェリアの魔力を目指し放たれた無数の触手は、たった一人の守護者によって阻まれていた。モンスターがどれだけの手足を尽くそうと勇者（ブレイバー）の笑みを崩すことすらできない。
「【黄昏を前に風を巻け――】」
「【――閉ざされる光、凍てつく大地】」
二つの翡翠色の魔法円（マジックサークル）が大きく輝きを放ち始める。
最後のあがきとばかりにモンスターは手足とも言うべき触手だけでなく小高い丘のような体躯を動かし始めた。
『アアアアアアアアアアアッ!!!!』

「――シィッ！」

モンスター絶叫を上げながら巨躯を揺らし、リヴィラの大地を激しく振動させた。

不安定な足場での詠唱は、並行詠唱をこなせないレフィーヤに大きな負担を敷きかねない。見かねた勇者（ブレイバー）は迷わず黄金の槍を投擲した。

『アアアアアア――――――ッッ!?』

巨躯の天頂。女体型の上半身の頭頂部を黄金の穂先が貫いた。ぐったりと項垂れながらモンスターその動きを静止させる。

「【吹雪け、三度の厳冬――】」

「【――我が名はアールヴ】！」

二人の詠唱がいよいよ完成を迎えるその時、フィンは大きく息を吸い込んだ。

「総員、退避ッ!!」

スキルでアシストされたフィンの咆哮が周囲一帯に響き渡る。彼の声が届いた瞬間、ティオネとティオナは即座にレフィーヤの魔法の射線上から逃れた。

拡大する二つの魔法円（マジックサークル）。その中心で二つの唇が魔法の名を紡ぐ。

「【ウィン・フィンブルヴェトル】!!」

三条の――否、六条の吹雪が放射される。全地を覆う氷雪が街ごとモンスターを呑み込む。たった一瞬でリヴィラの大地に氷の霊峰が作り出された。

『――――――ッッ!?』

全身が凍結され身動きが一切取れないモンスターは、自身に急速に接近する存在を感知した。

彼女がいたのはモンスターの手足すら届かぬ遠間。しかしその場所は、触手による蹂躙で家屋や水晶が押しのけられて生み出された大路。標的へと一気に迫れる一直線（ストレート）である。

勇者（ブレイバー）が即席で立てた作戦。その決め手（フィニッシャー）は初めから決められていた。

「【目覚め（テンペスト）よ】！」

アイズは風に乗り、更に加速を増し加える。銀の剣尖を引き絞り突貫する。

放たれるは、剣姫が誇る必殺の一撃。

「リル・ラファーガ」

風の螺旋矢が、分厚い氷壁もろともモンスターを穿った。

◇

鮮血が噴き出しながら仮面の男は膝から崩れ落ちる。仮面越しに見える瞳は虚空を向いており明らかに気を失っている。

男の左胸に開いた穿孔からは赤黒い血液が溢れ出ている。致命的な傷。このまま放置したとしてもものの数分もすれば生き絶えるであろう。

（……確実に殺しておくか）

赤髪の女――レヴィスは崩れ落ちようとしていた男の首を掴んだ。目的であった宝玉（たね）が目覚めてしまった以上、レヴィスがこの場に留まる意味は無い。むしろ今、宝玉（たね）によって覚醒したモンスターと対敵している冒険者達に発見される方が面倒である。

それでも何故か、此処でこの男を殺すべきだと本能にも似た何かがレヴィスに告げていた。

「チッ……」

男の身体を持ち上げたところでレヴィスは僅かに顔を顰めた。女は目を落とし自身の肉体に刻まれた斬撃へと向ける。男の渾身の一撃はレヴィスの内臓の一部にまで到達していた。

レヴィスが普通の肉体であれば、あるいは弱点を見破られていれば、致死を迎えていたのは先に致死を迎えていたの此方であった。

「死ね」

男の首を絞める指先に握力を込めてゆく。しかし仮面の男は、ハシャーナと名乗った男よりも肉体が頑丈でありすぐにはへし折れない。

「――ッ!!」

喉元を掴まれたことにより息苦しげに仮面の男は目を覚ます。身体を動かし女の手を振り払おうとするが、死に体とも言うべき肉体ではレヴィスの人外の握力には及ばない。

「――――」

「どれだけ暴れようと無駄だ。貴様は此処で――ッ!?」

声にならない叫びを上げ激しく身体を動かす男に、レヴィスが非常の宣告を告げるその時、男の顔に張り付いていた白仮面が傾く。

露わになったのは――。

（なんだ……あれは……）

真紅に染まる瞳。

その目と交差した瞬間、レヴィスは全身が灼熱に焦がされているような感覚に襲われた。

「貴様ァア!!その目は一体――――ッッ!!」

レヴィスが本能のままに叫びを上げた刹那、男は矢筒から矢を取り出し、首を抑える彼女の手首に深々と突き刺した。腱を貫かれ女の腕は力を失う。女の手が首から離れ地に落ちる男は素早く転がりながら女から距離を取った。

（殺す……絶対に、殺してやる……!!）

少し離れた位置で仮面を付け直す男に向け、レヴィスは苦し気に胸を押さえながらこれまで以上に凄まじい殺意を解き放つ。だが――。

突如、腕に突き立たてられた矢が緋色の輝きを帯び始める。

（この、矢は――ッ）

「――爆ぜろ」

鏃に閉じ込められた魔力が解放され、爆炎が燃え盛る。

紅蓮の炎にレヴィスは呑み込まれた。

◊

「はぁ……はぁ……」

（一瞬、意識が飛んでいた……）

レインは膝をつきながら自身の矢筒の中を無造作に漁り、青色の試験管を取り出す。それはディアンケヒト・ファミリアが誇る最高品質の万能薬（エリクサー）。少量でも一本当たり５００，０００ヴァリスはくだらない。

「……ッ」

蓋を開けた万能薬（エリクサー）を左胸の傷口へ突き刺し直接体内に流し込む。液体が焼けるように傷口に染みてゆき苦悶の表情を浮かべるレイン。

（ギリギリ心臓は掠めるだけで済んだ、か……。あの局面で仕留め損なうとはな……存外、こちらの斬撃も通じていたようだな）

レインは面前で燃え盛り続ける大火の様子を確かめながら先ほどの戦闘を振り返る。

（魔弾を切ってようやく、か……あれ程の実力者、耳に入らないほうが不自然だが……）

魔弾は彼にとって切り札というべきもの。特にレヴィスに使用した炎の魔弾は破壊力だけなら随一である。切ろうと思ったことはあっても切らなければいけない局面などこれまで殆んどなかった。

（過去の亡霊か……いや、おそらく違うな……寧ろ気になるのは――）

一瞬だけレインの脳裏によぎったのは、暗黒期の終盤にオラリオを震撼させた一大事件。二つの巨悪へと立ち向かった日。まだ冒険者として日が浅かったレインもその戦いには身を投じていた。だからこそ此度の襲撃者は彼らとは根本的に毛色が違うことが分かる。

『貴様ァァ!!その目は一体――――ッッ!!』

レインの紅き瞳を捉えた際の女の激昂。レインは仮面に触れながら炎の海を睨みつける。

（この眼に、そう反応するか――）

彼の中で一つの仮説が組みあがっていく。しかし、その時――。

「――ッ!!」

いまだ燃え上がる炎を突き破り、魔弾によって仕留めたと思った女が突貫してきた。咄嗟に剣を抜きレインは振り下ろされる拳を受け止めた。そこで気づく、半身を焼け爛れさせた女の左腕が無いことに。

「腕を捨てたかッ！」

魔弾の魔力が解放される直前にレヴィスは矢の刺さる腕を千切り棄てたのだ。とてもではないが、まともな人間のできる判断ではない。

「片腕だろうが、貴様を殺すには十分だ」

競り合いで押されるのはレインの側。負傷の度合いで言えば万能薬（エリクサー）で回復の始まっているレインよりもレヴィスの方が重傷であるが、根本的なステイタスの差を埋めるほどの要素にはなり得ていない。

（くそッ……!!せめて弓を使えれば――）

「やーっ!!」「死ねオラ!!」

レインが押し負けようとした時、二つの声音と共に大剣と鋭利なナイフがレヴィスへ向けて振り下ろされる。女がギリギリで回避した地面に深々とした斬撃が刻まれた。

助太刀に入ったのは、黒髪を揺らす褐色の少女達。
「助けに来たよっ！レインっ!!」
「思った以上に追い込まれてるわね、あんた」
「ヒリュテ……」
「「ヒリュテでまとめんなっ～～!!」」
　相変わらずなレインの様子に怒りを爆発させるティオネとティオナ。特に怒りが収まらないティオネはレインの胸ぐらをつかみブンブンと振り回す。
「あんたはいっつもいっつも……言っておくけど、あんたなんかレフィーヤにお願いされなきゃ助けにも行かなかったわよっ！」
「……誰も頼んではいない」
「アアッ!?今なんっったクソエルフッ!!」
「……チッ。分が悪いか」
「あ、逃げた」
「「は……？」」
　三対一では不利と見たレヴィスは即座に逃走を選択する。その迷いのなさに三人は僅かに唖然としてしまう。
「さっさと追え！お前らそのために来たんだろッ!!」

「命令すんな!!何なのよ、あのクソ女!散々引っ掻き回しやがってッ!!」
「うわっ、速っ!!追いつけるかな～」
湖面へ向かい一直線に駆け抜ける女。その背をティオネとティオナが全速力で追いかける。ロキ・ファミリアでも屈指のステイタスを持つ二人でも差は一向に縮まらない。
その様子を聴覚で追っていたレインはだらりと力なく下がる左腕を無理やり持ち上げ弓を構えた。
「雷轟一殲(ライジング・ボルト)――起動(トリガー・オン)ッ!!」
激痛の走る腕を無視し、無理やりスキルを解放する。
轟音を奏でながら放たれる強弓。直線的な軌道を描くそれは、崖から湖へと飛び込もうとしたレヴィスの背を穿たんと迫る。
だが――。
「チッ……」
左腕の影響もあり間一髪のところで外してしまう。
やや遅れて湖面から水飛沫の上がる音だけをレインは拾い、レインは崩れ落ちるようにその場に座り込む。
全身の痛みが少しでも遠ざかるように目を閉ざし呼吸を整えるレイン。

「はぁ……疲れたな……」

その呟きを最後にレインは意識を手放した。

第十四話［誓い］

光と色彩が存在しない世界。
視界を閉ざされていた白き髪の少年にとって世界の色は漆黒の暗闇であった。

『……おい、また怪物（スヴァルト）が姿を現したぞ』
『見たか、あの醜い顔を』
『さっさと殺してしまえばいいものを……王家の方々は何を躊躇っておられるのだろうか』
時折、住処である洞穴から姿を表せば、待っていたのは同族からの罵倒。石を投げつけてくるものも少なくなく、酷い時では弓矢を放ってくる者もいた。
『あえ……う……』
少年は言葉を発する事が出来なかった。感情を表す方法を知らなかった。
幼い彼を育てる親もおらず、同族からは煙たがられているため少年には話し相手もいない故に、言語を知らないのも当然なのかもしれない。

『うう……うつ……』

少年は、人知れず洞窟の奥で嗚咽を漏らしていた。

なぜ悲しいのかは自分自身も分からないし、少年の縫われた瞼は涙を流すことも許さない。それなのに、胸の奥から悲しみが溢れて止まらない。

目も見えず、言葉を発することのできない自分が普通では無いことは少年も理解していた。

同族から疎まれている事は分かっていた。少年自身もこの世界で生き続けたいとは思っていない。それでも死というものを知らなかったゆえに自死という選択肢も無かった。

ただ意味もなく、誰からも望まれることのない人生。

『――うあ？』

そんな日々に変化が訪れたのは――。

『貴方が、本当に怪物（スヴァルト）ですか……？』

金の髪を揺らす、一人の同胞の少女との出会い。

これは、怪物が覚醒を果たす前。ただ無力な少年であった頃の記憶の断片である。

◇

――迷宮（ダンジョン）第１８層

「ん……夜、か……」

レインは、左手に温もりを感じながら目を覚ました。

視界に広がるのは見知らぬ天井。背中に感じる寝台の感触も自室のものでは無い。

（いつ見ても、くだらない夢だな）

先程まで見ていた夢の情景を思い出すレイン。

同族から拒絶されていた日々。あの時は自身がなぜ疎まれていたのかも知らなかった。ただの無知で無力な少年であった頃の記憶。彼にとっては最も忌まわしい日々である。

（――仮面が……）

意識が覚醒し始めたレインは自身の顔に触れる。そこにはいつも肌身離さず身につけている筈の仮面が無かった。仮面を探すために痛みの残る体を起こした彼は、左手に感じていたら温もりの正体を知り、小さく呟いた。

「アイズ……」

そこにはレインの左手を握りしめたまま、ベットに顔をつけて眠るアイズの姿があっ

た。

レインが、そっと黄金色の髪を撫でると彼女はくすぐったそうに僅かに身じろぎをする。

静寂に包まれた空間にアイズの規則正しい寝息のみが流れるなか、正面にある扉からコンコンと均一なノックが鳴った。レインが特に反応を示さずに扉を眺めていると「入るぞ」とだけ告げられ、扉が開いた。

「――目が覚めたようだな」

室内へ入ってきたのはリヴェリアであった。レインが起きていることに僅かに驚きを示す彼女であったが、すぐにいつもの凛とした表情で彼に声をかけた。

「……ああ。どれくらい寝ていた？」

「丸一日だ。その間、その子はお前に付きっきりだった。あそこまで狼狽えているアイズも久しぶりに見たな」

「……。」

然したる反応も示さないレインにため息を吐いたリヴェリアは、アイズの手が重なる彼の左手に視線を向けながら本題に入った。

「……お前も気がついているだろうが、私の魔法でもその左腕は完全に治せてはいない。それだけ骨に複雑な損傷を負っていては、それこそアミッドにでも頼らない限り完治は

難しいだろう」

左腕の損傷。

レヴィスとの攻防で既に折れていたところを、最後に放った雷轟一殲（ライジング・ボルト）の強制発動がトドメとなった。

骨が折れるだけでなく砕けてしまった。そのため最早、治すにしても治癒ではなく修復とも言うべき過程が必要なのだ。都市最高の魔法の使い手である九魔姫（ナイン・ベル）と言えど、そこまでの高度な治癒は難しい。

それこそ名前の挙げられたオラリオ一の治療師（ヒーラー）であるアミッド・テアサナーレの施術が必要になる。

「はぁ……全く。つくづく自分の惰弱さに嫌気がさしてくるな」

自身の現状を聞き顔を歪ませるレイン。

遠距離の戦闘を主とする彼の耐久ステイタスは低い。そもそもエルフという種族柄、獣人やアマゾネスと比べて身体の頑丈さにはハンデがある。今回の一戦は、そんなレインの根本的な弱点が露わになってしまったのだ。

「――――レイン。ウダイオスは諦めろ」

「……。」

「今のコンディションでは単独討伐など無謀だ。機を見て改めて挑戦すればいい。それ

に、来月には再び遠征を予定している。わざわざ今、無理をする必要はない」
　率直な物言いであるリヴェリアだが、それは紛れもなくレインの状態を気遣ってのもの。気高に振る舞ってこそいるが、彼女の翠緑の瞳は不安な色を隠せてはいなかった。
　リヴェリアとはレインがファミリアに加入して以来の関係である。当初は互いの出自ゆえにギクシャクしていた事もあったが、今では決して悪いものでは無い。彼女の心配はレインも理解している。だが、それでも――。
「――断る」
　この程度の損傷で退くという選択肢は彼には無い。
　憮然とした彼の態度に、溢れ出ようとする感情を抑えようとリヴェリアは大きく息を吐いた。
「はぁ……レイン。お前は今でも十分に強い。そして、まだ若い。何一つ慌てる必要は無いんだ」
　諭すような声音で述べるリヴェリアに対して、レインは「チッ」と舌打ちつつ忌々し気に返答をした。
「――ヌルりぃんだよ、お前らは。だからいつまで経っても猛者（おうじゃ）にすら届かねぇんだろ」
「なっ……！」
　レインのあまりの物言いに驚きを隠せないリヴェリア。そんな彼女にレインは苛立

ちをぶつけるように更に言葉を吐く。
「……たかがレベル5程度で満足したことなど一度も無い。俺が目指している高みはもっと上だ」
「く……! お前、は……! なぜそこまで生き急ぐ……!? 何がお前をそこまで駆り立てるッ……!?」
「……。」
レインの一言により、リヴェリアの抑えていたものが溢れ出た。猛者(おうじゃ)と自分達の差には彼女も思うところがある。
どうしようも無い感情を吐き出すような彼女の問いにレインは何も答えず視線を逸らした。
そんな彼の反応にリヴェリアは僅かに顔を俯かせながら僅かに震わせながら口を開く。
「……エルフ(私達)が、原因なのか? お前が多くの同胞達から酷い仕打ちを受けてきた事は知っている。それは決して許されるべきものでは無いだろう。だが、それでも……今のお前には、私達が――!」
「――リヴェリア」
思い詰めたように言葉を吐くリヴェリア。レインが生まれた時には既にリヴェリア

は里を出ていたため彼への迫害には彼女は全くの無関係なのだが、それでも、同胞として彼に抱く負い目は未だに拭えない。

そんな彼女の言葉を、レインはなるべく穏やかな声音で遮った。

（ああ……本当にあんたには頭が上がらないな……）

リヴェリアの表情を見たレインは後ろ髪を軽く掻きながら内心でため息をつく。かつてファミリアに入団したばかりの頃もレインとリヴェリアは何度も衝突した。その度に彼女は最後には申し訳なさそうな表情を浮かべる。彼女のあの表情にはどうしても毒気を抜かれてしまう。

「……そうじゃないんだ。あの頃に受けた仕打ちを忘れる事は決して無いが、過去（それ）は俺を前に進める原動力にはなり得ない」

「だが……」

リヴェリアの推測をレインははっきりと否定するが、それでも彼女の憂いが晴れてない事を悟ったレインは静かに目を閉じ思考する。

（当然、この答えではリヴェリアは納得しないだろう。ならばどうするか――）

迷いがあった。己の内を曝け出す事に。誰かに語ることに意味が無いと思っていたから。

それでも――。

（語らないと言う選択はただの俺のエゴでしかない、か……）

瞼を開く。紅の鋭い瞳が真っ直ぐにリヴェリアを見つめた。レインは僅かに息を吸ってから口を開いた。

「……俺は頂天を目指している」

己の目指す先。

「それは猛者（おうじゃ）のような仮初の玉座では無い。ゼウスやヘラの眷属、偉大なる英傑達を超えた先、誰も到達していない真の頂」

未だ届かない遥か彼方の地平。

「そこへ至り、俺は――」

分不相応な大望の終着点。それは――。

「――この手で〝隻眼の黒竜〟を討つ。それが俺の野望だ」

それは、かつて神時代の象徴でもあったゼウスとヘラのファミリアが敗れ去った黒き終末と呼ばれる最強のモンスター。誰も成し得ていない偉業を彼は成そうとしている。その為にも、過去の英雄達を超えなければいけない。

レインの決意を聞き、リヴェリアはただ驚愕していた。初めから自分達とは目指している視点が違かったのだ。

「だが……なぜお前は黒竜を狙う……？お前のことだ、名声などの為では無いのだろう

？」

隻眼の黒竜を討った者が現れたのなら、世界の救世主として幾代に渡っても讃えられ続けるだろう。だがそんな浅はかな動機では無い事は、リヴェリアにも容易に想像がつく。

「誓ったのさ。一方的にだけど、な……」

一瞬だけ壁に立てかけられた愛剣（エリュシオン）に視線を向けたレインは、濁すようにそう答えた。

目指す先は教えたが、その理由までは教えるつもりは無い様子である。

「はぁ……。その為に、これまでずっと走ってきたのか？」

「ああ……そして、この先も止まるつもりは無い」

リヴェリアは何度目か分からないため息を吐き、額に手を当て天を仰ぐ。困ったように天井の板を見つめるリヴェリアであるが、その表情は僅かな喜色が混じっているものであった。

少なくない間を置いてから、リヴェリアはゆっくりと口を開いた。

「――ウダイオスへの挑戦は認める。ただし絶対に死ぬな。それだけは約束しろ」

「当然だ。成すべき事を成すまで死ぬつもりは無い」

リヴェリアの強い言いつけに、レインは覚悟の乗った言葉で答えた。

それを聞いた彼女は「ただ」と述べながら、レインの側で未だに眠るアイズへと目を

向ける。
「ウダイオスの件は私から他の者に伝えておくが、その子にだけはお前の言葉で伝えておけ。これだけ心配をかけたのだからな」
「……ああ」
彼女はそれだけを告げ、後ろへ振り返り扉へと手を掛けた。だがそこで立ち止まり、レインに背を向けたまま、薄い唇を開く。
「レイン。私達は家族（ファミリア）だ。お前一人に全てを背負わせるつもりは毛頭ないからな」
「……。」
その言葉を最後にリヴェリアは部屋を後にした。
閉じていく扉へと目を向けていたレインは左手の温もりを感じながら、そのままの姿勢で再び眠りに落ちるのであった。

◇

翌日。目を覚ましたレインは先に起きていたアイズに、今回の自身の本当の目的がウダイオスに挑戦する為である事を説明した。
彼の負傷の状態を知っているアイズがそんな挑戦を許すはずもなく、一悶着あったの

だが、レインの側が少なからず妥協する形で説得を終えた。
　更に、フィンとリヴェリアの口からティオナとティオネ、レフィーヤにも説明が行き、彼女達にも詰め寄られる事になるのだが、団長と副団長の許可を既に得ていると言う事もあり、渋々ながらも了解を得た。
　一応は、今後の方針の固まったレイン達であるがすぐに下層に降りる事は出来なかった。このリヴィラ襲撃事件の中心にいた彼等は事態の収集のための対応を求められた。負傷者の救出、リヴィラの冒険者の地上撤収時の護衛、事件の顛末を主神（ロキ）やギルドに報告するなどの後始末をあり、彼等が再び迷宮（ダンジョン）に潜ったのは六日後の事であった。

「――でも壊した壁から超硬金属（アダマンタイト）が出てきた時はビックリしたなー！」
「アレだけで結構なお金になりそうですよね」
「うん！ちょっとは大双刃（ウルガ）の代金（お金）の足しになるかも！」
　ロキ・ファミリアの面々が白濁色の壁が続く深層域を進む。
　彼等が現在いるのは３７階層。白宮殿（ホワイトパレス）とも呼ばれるこの階層の中心地を目指して彼等は進んでいた。
　モンスターの出現が途切れたタイミングでレフィーヤと会話をするティオナは静かに足を進めるアイズへと顔を向ける。

「モンスターも相当倒してるし、結構お金も溜まったんじゃない？だからさーアイズもほどほどに――」

『オオオォォォ――――――!!』

「ッ……!!」

ティオナの言葉を遮るように、姿を見せる骸骨（スケルトン）の群れ。その一団に真っ先にアイズが飛び出して行った。

「あ～もうっ！空気読めっての!!」

「それは……ほら、モンスターですし……」

「……ったく、誰かさんのせいでいつも以上に暴走気味じゃない」

モンスターの登場に悪態をつくティオナをレフィーヤが宥める。

単身で切り込んだアイズの姿にティオネはレインの方を向いて苦言を呈す。アイズの変化の原因に心当たりがありすぎるレインだが、取り敢えずはスルーをした。

「数が多いな、僕達も行こう。背後は任せたよレイン、レフィーヤ」

「……。」

「は、はい！」

フィンの先導のもとティオナやティオネ、リヴェリアがアイズに加勢した。

彼等の戦闘を二人のエルフが大人しく見つめる。レベル３のレフィーヤはサポー

ターに徹しているのだが、レインもまた戦闘に参加しないのには理由があった。
『アンタあの赤髪の女に腕やられてんでしょ。なら、大人しく後ろに引っ込んでなさい』
『そうだよー、どーせ止めても聞かないんでしょ。なら、せめてそこまではアタシたちが守ってあげるからさっ』
　レインのウダイオスへの挑戦を聞いたティオナとティオネが出した条件。ウダイオスの現れる玉座の間までは前衛には出るなと条件をつけられたのだ。そこにアイズやリヴェリアも同調してきたため、レインは頷くほか無かったのである。
「……。」
（余計なお世話を、と言いたいが――）
　左腕は僅かに動かすだけで痛みがあった。そのため実際は余計な消耗を減らせるだけで少なからず彼女達には助けられていた。
　ふとレインは仮面越しに横に立つ同胞の少女へと目を向けながら声をかけた。
「……あの二人から聞いた。お前がリヴィラでの戦いの時にヒリュテ達に助けを求めてくれた、と」
「え、あ、いえ……じ。実際に向かったのはあの二人ですし……」
「それでもだ。礼を言う、ウィリディス。あのまま俺一人で戦っていたら、この程度の負傷では済まなかっただろう」

レインの言葉を受けレフィーヤは驚きを隠せなかった。彼女のイメージでは、レインは感謝の言葉をわざわざ伝えるようなタイプだとは思っていなかったからである。

これまで全くと言っていいほど彼と会話する機会のなかったレフィーヤは、思い切ってに気になっている事を尋ねる。

「あの……もし聞いても良ければなんですが……どうして、レインさんは冒険者になろうと思ったんですか？」

レフィーヤの思わぬ問いに今度はレインが少なくない驚きを示すが、すぐに彼は目を閉し黙考する。

（答えないのは簡単だが――）

今までのレインなら答えない。相手が同胞（エルフ）なら意にも介さない。ましてやエルフの中でも才に溢れるレフィーヤに対しては、少なからず苦い感情があった。だが――。

『今回レフィーヤを推したのは私だ。お互い思うことはある筈だろうが……今の姿に目を向けてほしい』

思い出されるは、リヴェリアの願いとも言うべき言葉。

確かに、過去を忘れる事はできない。だがそれは目の前に立つ少女にとっては全く無関係の出来事なのだ。

「……あ、あの、答えづらければ全然――」

「――憧れている人がいた。その人が冒険者だったから俺もこの道に進んだんだ」
鞘に収まる愛剣を撫でながら懐かしげにそう答えた。

◊

一行は、白宮殿（ホワイトパレス）の中心地に辿り着いた。そこは、明らかにこれまでのエリアとは違う空気を放っている。
「――行くんだね」
フィンの簡潔な問いにレインは頷きのみで答えながら前に出た。
その背にフィンが静かに語りかける。
「レイン。以前、豊穣の女主人で君は言っていた。本気でゼウスやヘラの眷属を越える気でいる、と」
思い出されるはレインの宣言。
それは実際の彼等を知る世代であればある程、容易く口にはできない目標であった。
フィン・ディムナはこの場の誰よりもそれを痛感している。ある意味で彼は越えることを諦めていた。だが――。
「ならば、この一戦で見せて欲しい。君の覚悟を、君の目指す先を」

彼は見てみたいとも思ってしまった。
だからこそ今回の無謀とも言える冒険（愚行）を許したのだ。
「――勘違いをするな。此処は途上、通過点に過ぎない」
フィンの言葉を一蹴するレイン。相変わらずの向上心である彼だが、「ただ」と付け足し更に口を開いた。
「これだけお膳立てをされたんだ――借りは結果で返す」
愛剣（エリュシオン）を引き抜いたレインは歩き出した。
その直後、大地が揺れ始める。
レインの面前で岩盤が割れ、地中から黒き巨大な頭蓋が出現する。現れたそれはそのまま広大なエリアの天井にまで伸びてゆき、１０Ｍに及ぶ強大な上半身を見せた。
アレこそが階層主（モンスターレックス）――白宮殿（ウダイオス）の骸王。
偉業を賭けた戦いが幕を上げる。

第三章【白宮殿（ホワイトパレス）の死闘】

第十五話［遠雷（レイン・スヴァルト）　対　白宮殿の骸王（ウダイオス）〔上〕］

――迷宮（ダンジョン）第３７階層　白宮殿（ホワイトパレス）　玉座の間

ウダイオスが地中より出現した瞬間、レインは迷いなく走り出した。

一直線に駆ける彼は、冷静な瞳で１０Ｍ（メドル）に迫る巨躯へと目を向ける。

（上半身のみを地上に晒すウダイオスは、その場から動く事は出来ない……！）

巨大な骨体の中央にある魔石の元に一気に迫ったレインは、エリュシオンを引き絞るように構える。

「――雷轟一殲（ライジング・ボルト）ッ!!」

雷鳴と共に超速の突きを放つが、その一撃は魔石を覆う漆黒の肋骨に防がれてしまう。

かのモンスターの左右八対の肋骨は素早く上下に動き核となる魔石を守る。加えてその肋骨の硬度は――。

「チッ……！」

レインの剣技による最大打点の一撃を持ってしても、ヒビを入れるのが精一杯なほどであった。

舌打つレインは更に追撃をなそうと踏み込むが地中から現れた黒き剣山が彼を襲う。

（ッ……逆杭（パイル）!）

間一髪のところでバックステップで回避するレイン。

だが彼に向け畳み掛けるように更なる剣山が連なる。後方への回避を続けるレインは剣を鞘に収め、弓を構えた。

「シッ――!!」

大きな後方への跳躍と共に放たれる三連射。ほぼ同時に放たれたのにも関わらず別々の角度から魔石に迫る矢。

だが、その全てが肋骨の防御によって弾き落とされる。

（チッ……ここまで距離が離れていては、肋骨にも損傷（ダメージ）は無しか）

遠距離からの速射ではウダイオスの骨に傷をつける事はできない。だが絶え間なく逆杭（パイル）が追いかけてくるため、雷轟一閃（ライジング・ボルト）もそう簡単には放てない。それに加え――。

『オオオオオオ――――――!!』

「――白骨戦士（スパルトイ）……!!」

着地の最中、レインは背後に湧出した人骨の軍勢に僅かに顔を顰める。

白骨戦士（スパルトイ）。第一級冒険者のレインにとっては歯牙にもかけない存在であるが、問題はその数。

王（ウダイオス）の号令により、一度に数十の兵隊（スパルトイ）が湧き出てくる。

（乱発は避けたいが――仕方ないか……!）

迫り来る黒色の剣山。そして背後を固める兵隊（スパルトイ）。挟まれる形となったレインはその場で反転。再び抜刀し白骨の群れに向かい、タメを作りながら構える。

「雷轟一殲（ライジング・ボルト）!」

逆杭（パイル）が踵を穿った瞬間、レインは迅雷の如き速度で隊列を組むスパルトイの群れに突っ込んだ。

退路を阻む全てのスパルトイを吹き飛ばしながら突破すると言う力業で剣山からの退避に成功するが――。

「……全く。やはり一筋縄ではいかないな」

広いエリアの端まで後退を強いられたレイン。

先程まで面前にいたはずの王（ウダイオス）は既に遥か遠くに。代わりに進路を塞ぐように構える

兵と壁(スパルトイ)のように連なり続ける逆杭(パイル)がレインに迫る。

一つ息を吐いたレインは足を止め、迎え撃つ姿勢を取った。

「短期決戦で決められるのならばそれに越したことは無かったが……仕方ない――」

足を止めたレインはスパルトイの群れに飲み込まれるが――。

「――徐々に詰めて往こうか」

ほぼゼロ距離で全方位をスパルトイに囲まれた状況で、彼は一切の傷を負う事なくモンスターを薙ぎ払う。

レインの剣技の持ち味は攻めよりも守りにあった。天性の聴覚を用いた先読み、それは未来視とも言うべき精度があった。とりわけ格下を相手にする場合は、その能力は絶対な効果を発揮する。

（――前方――膝蓋骨の音――2．1秒後飛びかかり。右側面――肩甲骨の動き――0．8秒後に剣による袈裟切り。左側面――全身の駆動――1．5秒後に投擲槍(ジャベリン)の射出。後方――腰椎の響き――2．5秒後に薙ぎ払い。地中――1．4秒後に逆杭(パイル)――）

際限なく次々と雪崩れ込むスパルトイと地中から穿たれてくる剣山。

その全ての動きを読み、捌く事によって、時には敵の攻撃をも利用して紙一重ながらスパルトイの群れの中を進む。

一歩ずつ一歩ずつと、亀の一歩とも言うべき速度だが、数百をも超えるまでに膨れ上がった軍勢の懐の中で、彼の歩みは止まることはなかった。

（――さてどうする？状況は膠着してゆくが、王（お前）はそのまま見ているだけか？）

遥か遠くで沈黙を貫くウダイオスに一瞬だけ視線を向けたレイン。

彼は待っていた。ウダイオスが動き出す、その瞬間を――。

◊

スパルトイの群れの中にレインが飲まれてから、少なくない時間が経過した。

玉座の間の入り口から彼の戦いを見守るロキ・ファミリアの面々。その中でリヴェリアは呟くようにフィンに問うた。

「……フィン。レインの狙いは何だと思う？」

「――恐らく、魔弾を撃つ隙を狙っているんだろう……と言うよりレインの持つ手札を考えた時、一撃で勝負を決める手段がそれしか無い」

断言するフィンに、ティオナが不思議そうに首を傾げながら尋ねる。

「でも、レインならやろうと思えばすぐにピュッと撃てるんじゃないの？」

「確かに彼の速射なら放つ事はできるだろう。だが、距離が離れていてはウダイオスの

肋骨が矢を弾いてしまう。魔石を直接狙うなら確実な間合いに詰める必要がある」

冷静な分析を述べるフィンだが、彼には一つ懸念材料があった。

（――レインの持つ魔弾の威力なら、ウダイオスの肋骨ごと魔石を狙う事も不可能では無いが……）

小人族（パウルム）の鋭敏な瞳は、先程からあまり使われていないレインの左腕を凝視していた。

◊

玉座の間の中心に居座るウダイオスとの間合い。

壁際にまで後退した時から一時間以上の時を掛け、レインは半分程の距離を詰めた。

「――ッ！」

その瞬間、極大な骨の軋みを聴き取ったレインはすぐさま愛剣を鞘に収める。そして側面から迫るスパルトイの槍の柄を掴み取り、周囲一帯のスパルトイを薙ぎ払った。

『ルオオオォォォ――――――!!!』

大気が震撼する程の咆哮を上げたウダイオス。その８Ｍ（メドル）にも及ぶリーチのある左腕が振り上げられた。巨大な掌骨の影が勢いよくレインと周囲のスパルトイのもとに迫る。

（地中には逆杭（パイル）。周囲一帯は兵（スパルトイ）。加えて上空からは王（ウダイオス）の掌。逃げ場は、無い――――――訳じゃない）

右手に持つスパルトイの槍をレインは引き絞りつつ、左手は矢筒の中へ。

「雷轟一殲（ライジング・ボルト）オ!!」

黒色の掌骨が振り落ちる刹那、レインは雷轟一殲（スキール）の推進力を用いてスパルトイの群れを貫きながら、間一髪でウダイオスの一撃を回避した。

そして背後の地面を叩いたウダイオスの腕に向け、レインは取り出した矢を投げる。

（さすがにこの使い方はどうかと思うが、背に腹はかえられん……！）

「――爆ぜろッ!!」

ウダイオスの手に突き刺さった矢。その鏃が紅く発光し魔力を解き放った。魔弾が爆炎を上げながら、ウダイオスの腕を粉砕し周囲のスパルトイを一掃する。

『――――――ッオオオ!!!!』

左腕の肘から先を失ったウダイオスがけたたましい叫声を上げるが――レインの本命は片腕を奪うことではない。

ウダイオスの一撃。レインの魔弾。この二つの攻撃により周囲のスパルトイは一気に数を減らした。それによって生じた空間（スペース）。

そして一度に多くのスパルトイが絶命する事によって生まれた多量の灰がレインの

周囲に巻き上がった。その灰は数秒ではあるが煙幕のようにウダイオスの視界からレインの存在を掻き消す。

（俺に向けて逆杭（パイル）は出せないだろ？アレは地中に埋まる下半身から生じる身体機能の一部だ。ゆえに射出の判断はあくまでウダイオス本体の視線によるもの。つまり奴はは今、俺に攻撃する術を持たない――――これで、王手（チェック）だ）

灰に紛れ身を隠すレインは膝をつきながら弓を構え、渾身の力で弦を引き絞る。そして番るは黄色の輝きを放つ魔弾。

即ち、雷轟一殲（スキル）と魔弾の併用。まさしくレインの持つ最強のカードである。

「雷轟一殲（ライジング・ボルト）――魔砲（フル・ブラスト）ッ!!」

雷鳴と共に放たれた矢は、黄色の魔力を解放しながら舞い上がる灰を突き破る。そして文字通り雷速と呼ぶべき一瞬でウダイオスの面前に到達し、強靭な肋骨もろとも、その身体を貫いた。

『オオオオオオ――――!!!』

咆哮を上げるウダイオス。

その姿を見たレインは――苛立ちを隠せずに舌打つ。

「チッ！クソが――」

悪態をつくレインの視線の先には角が削れただけのウダイオスの魔石が見えた。

確かにレインの放った雷速の魔弾は魔石を守る肋骨の一本を破壊し、ウダイオスの内部を貫通したが――。

「――外したか」

矢を放つ寸前、弓を持つ左腕がブレた。千載一遇のチャンスで損傷を残したままの左腕が仇となった。

舞い上がっていた灰も晴れ、逆杭（パイル）が再びレインに狙いを定める。更に兵隊（スパルトイ）が湧き出し、周囲に群がり始めた。

（くそッ……左手こそ奪ったが、また振り出しだ。また同じシュチュエーションを作れるか？）

レインはすぐさま自身の状態を整理する。

左手は違和感があるが損傷（ダメージ）そのものは未だ軽度。だが反面、装備が悲鳴を上げ始めている。

副武装であるエリュシオンは良くて第二等級武装。レインの技量を持ってしてもスパルトイの軍勢との長期戦により刀身の限界が近い。

主武装であるケラウノスも通常の矢もまだまだ使うことができるが、問題は奥の手である魔弾。あと残すは氷と雷の魔弾が一本ずつしかない。

（――もう一度耐え抜き、次で勝負を決めなければ勝ちの目は無くなる。集中しろ……

!!）

自身に喝を入れたレインは、迫り来る逆杭（パイル）とスパルトイを対処するためにエリュシオンを引き抜いたが――。

（何だ、この音は……？）

不意に地中から響き始めた音にレインは少なくない困惑を示す。

そんな彼の前でウダイオスは地中へと残った右腕を突き刺した。思いもよらないウダイオスの動き。

ロキ・ファミリアの遠征でこれまで何度も対敵してきたウダイオスであったが、そんなアクションは見覚えが無かった。

「何を……ッ――!!」

地中より引き上げられたウダイオスの右手には漆黒の極大剣が握られていた。その全長はウダイオスの巨躯とほぼ同程度の長さがある。

（――ウダイオスの武装――そんな情報はどこにも――リーチの拡張――魔力を帯びて――いや、そんな事よりもまず距離をッ――!!）

想定外の事態に動揺を隠せないレインは後方へと下がろうとするが――。

（壁――いや、逆杭（パイル）かッ…!!）

退路を塞ぐように囲む剣山。そこに迷いなく飛びかかってくるスパルトイ。そして、

咆哮と共に大剣を振り下ろすウダイオスの姿。

『オオオオオオッ――――――!!!』

轟音と共に炸裂する衝撃。それは景色を塗り替える王の一撃。

自身の身体の一部である逆杭（パイル）も、無数の兵隊（スパルトイ）も、玉座の間に侵入した不届き者（レイン）も。王の剣は無慈悲に全てを薙いだ。

アレだけの数いたスパルトイや剣山が連なっていた玉座の間は、たったの一撃で更地となった。

片腕ながら未だ王（ウダイオス）は健在である。対する挑戦者（レイン）はと言うと――。

「――――か、は……ッ！」

レインは白壁の上方にめり込んでいた。

ウダイオスの黒剣の直撃を受けたレインはエリアの端にまで吹き飛ばされた。這い出るようにどうにか壁の内側から脱出するレインだが、そのまま立ち上がる事も出来ず、落下した。

『オオオオオオ――――――!!』

そして、再展開される兵隊（スパルトイ）の軍勢が倒れたままのレインにジリジリと迫る。

（――――――）

だが立ち上がる事もできずに、レインの意識はそこで途絶えた。

◇

パチっと言う音が聞こえ、彼は目を覚ました。

最初に目に入ったのは、ゆらゆらと揺れる焚き火の炎。その熱が冷たくなった身体にはとても暖かく感じられた。

（……外？）

何故か屋外にいる自身の姿に驚きながらも、ゆっくりと身体を起こす。

『――あら、目を覚ましたのね』

焚き火を挟んで反対側に座るエルフの女性が彼に声をかけた。

『体調はどう？』

『……。』

女性の問いに彼は何も答えない。そして周囲を警戒するようにあちこちと目を向けていた。

そんな彼の姿に女は一度、息を吐いてから別の問いを尋ねた。

『……貴方、名前はなんて言うの？』

同胞（エルフ）の女から掛けられた問いに、彼は苛立ち気に顔を歪ませながら言い放つ。

『――うるせえ……殺すぞ、ババア』

それは、当時の彼が知る中で最上級の汚い言葉であった。

『バ……!?口の聞き方からたたき込む必要がありそうね……クソガキ』

そんな年端も行かない少年を相手に女は本気で向きになる。憤怒の形相でパキパキと指を鳴らしながら近づく彼女の姿に、強がっていた少年もさすがに震えがあった。

結局、拳骨に加え、更には頬を思いっきりつねられた。この時、もう二度と女性の事をババアと呼ばないようにしようと少年は心に誓った。

『まあ、貴方の眼を見れば大体の事情は察するわ。深くは聞かないよ……私、こう見えて気遣いの出来るお姉さんなのでっ！』

やけにお姉さんの部分を強調してくるが、とりあえず少年は無視した。

『――あんたこそ……名前は……？』

『あんた呼びも気に入らないけど……まあ、とりあえずいいわ』

自称、気遣いの出来るお姉さん。どうやら度量はそこまで広くない様子であるが、すぐにふっふっふっ、とほくそ笑みながら彼女は高らかに名乗り上げた。

『私の名前はミネルヴァ。世界をまたにかけるミステリアスな美女よっ！』

『……いや、名前しか聞いてねぇから』

これが、後にかけがえの無い存在となる師との出会いであった。

第十六話［仮面の内側］

ミネルヴァと名乗る同胞（エルフ）と出会った少年は、故郷から逃げ出した身であり他に行くあてが無いため、仕方なく彼女の旅に同行する事となった。

彼のこれまでの事情をあらかた伝え終えたところで、ミネルヴァが口を開く。

『――てかさー怪物（スヴァルト）って呼び方、私嫌だなー。なんか良いのない？』

『……雑に振るなよ。そもそも別の名前なんて考えたこともない』

『そっかー……ふーむ』

わざとらしく考える素振りを見せるミネルヴァは、僅かな間を置いてからひらめいたとばかりに手を叩いた。

『――なら貴方の名前、これからは〝レイン〟ってのはどう？ちなみに意味は、西の方の言葉で〝雨〟を意味するわっ！どうよ？私のセンス神懸かってないっ!?』

『……なんで雨なんだよ』

『そりゃ雨降ってる時に拾ったからに決まってんでしょ』

『捻りもクソもねぇな』

あまりにど直球過ぎる言葉のチョイスに呆れ果てる少年であったが――。

『……レイン、か』

怪物（スヴァルト）と言う記号じみた蔑称では無い。生まれて初めて自分のために考えられた名前。

それはまるで自分自身の存在を認められたかのようであり、決して悪い気分では無かった。

ミネルヴァとの旅。

その最初の目的地は、迷宮都市オラリオであった。世間知らずであった当時のレインですら名を聞いた事がある世界の中心地。何故そこに向かうのかをレインが尋ねたところ、思わぬ答えが彼女から返ってきた。

『――私の友達なら、レインの〝眼の呪い〟。何とか出来るかも』

『……は？』

『オラリオにね、むかーし賢者なんて呼ばれてた私の友達がいるの。とりあえず診てもらうだけさ、試してみる価値あると思わない？』

ミネルヴァの突然の提案に驚きを隠せないレインであるが、魔法に長ける王族（ハイエルフ）達ですら恐れをなす代物をどうにか出来る人間がいるとはとても思えない。

『……いや、けど――イタッ』

口困り躊躇いを見せるレインの言葉を、ミネルヴァはデコピンをして遮った。

『はーい、ウジウジするの禁止ー。そもそも私の友達はそんな目ん玉一つ見たぐらいじゃ怖がらないから。むしろあの子の姿を見たレインがビビって漏らさないかが心配よ』

『さすがに漏らしはしないだろ……』

ミネルヴァの物言いに呆れるレインであったが、僅かな期待もあり大人しくオラリオを目指すのであった。

一月程をかけてオラリオに辿り着いた二人。

聳え立つ巨塔や都市丸々を覆う城壁に圧倒されるレインであったが、そんな彼の背を突如掴んだミネルヴァはそのまま大跳躍し、迷宮都市の城壁を飛び越える。あまりにも大胆過ぎる不法侵入であった。

『――本気で死ぬかと思った……ってか普通に門から行けば良かっただろ』

『いやー……えーと……なんと言いますかー……』

珍しく歯切れの悪いミネルヴァの様子にレインは首を傾げる。

『なんだよ』
『もうっ、とにかくっ！今は門番の人たちと話したくない気分だったのっ！』
いつもとは違うミネルヴァの態度に疑問符を抱くレインであったが、初めて見る賑わう都市の様相に胸を躍らせる彼はそれ以上に追及をしなかった。

『――すまない。これは私の手にも負えない代物だ』
『……そう、か』
白骨の指がレインの瞼から離れ、〝賢者〟はそう静かに告げた。
ミネルヴァの友人――フェルズと名乗る魔術師（メイガス）。ローブの下に見えた白骨の顔面には流石に驚かされたレインであるが、そんな事よりも彼の中では期待が裏切られたという気持ちの方が強かった。
『――ま、フェルズでもダメなら仕方がないわね。諦めなさい、レイン』
失意を抱くレインに向けて、初めから分かっていたかのようにあっけらかんと述べるミネルヴァ。
『諦めろって……治せるって言ったのはアンタだろ!?』
『治せるとまでは言ってないわ。可能性があるかもって言っただけよ』

『同じだろ!?俺は普通になれると思って……そう期待してアンタに着いて来たんだッ!!』

彼女の態度に憤りを露わにするレイン。ミネルヴァにもフェルズにも非はないという事はレインも分かっている。

それでもやはり期待してしまっていたのだ。同胞達から疎まれる事がない。恐れられる事が無い。ただのエルフになれることを。

『――レイン。私からしたらアンタは何処にでもいる普通のクソガキよ』

『はぁっ!?……んな事を言ってんじゃ――イテっ！』

再びデコピンをお見舞いしてレインを黙らせたミネルヴァは何事も無かったように言葉を進める。

『同じよ。他の同胞（エルフ）達がアンタを目の敵にしてるのはそいつらがただ弱いからよ。まあ私からしてみれば誰が相手だろう対して変わらないけどね』

『……何でだよ』

『私が最強だから。例え世界中の人間から憎まれようと笑っていられる自信すらあるわ』

笑みを浮かべながらそう言い切ったミネルヴァは、一転して真剣な表情で諭すように続きの言葉を述べた。

『――何で物語の英雄達がキラキラと輝いて見えるか知ってる？』

そう語る彼女の声音は――。

『彼等はみんな強いからよ。心か体は人それぞれだけど、英雄は誰にも負けない強さを持ってるの』

どこか誇らしげで――。

『レイン、強くなりなさい。誰よりも強くなれば貴方を否定できる人はいなくなるわ』

少しだけ、寂しさの含まれたものであった。

『――フェルズ！私、久々にあの子達に会いたいわ～っ！』

二人のやり取りがひと段落ついたところで、突如ミネルヴァがフェルズへ向けてそう述べた。

『……私は構わないが、この子はどうする？この場に置いていくわけにもいかないだろう』

『そんなの一緒に行けば良いだけの話じゃ～ん！』

フェルズの問いに軽い口調で返すミネルヴァ。

恩恵（ファルナ）すら刻まれていない子供を迷宮（ダンジョン）に同伴させるなど本来はあり得ないのだが――

何となく彼女の答えを予想できてしまっていたフェルズは白骨の指を額に当てため息を吐く。

『はぁ……そう言うところは相変わらずだな、ミネルヴァ』

『ふふーんっ、褒めても何も出てこないわよ～っ』

『安心しろ、君が吝嗇なのは昔からよく知っている』

ミネルヴァとフェルズのそのようなやり取りを終えたのち、三人はフェルズの魔道具（マジックアイテム）であるローブで身を隠し密かに迷宮（ダンジョン）へと潜った。

そこに辿り着いた時、何も聞かされていなかったレインにとっては予想だにしない歓迎を受けた。

『――お、冒険者っぽい気配がしたから慌てて来てみればフェルズか。それと――』

『わ～！久しぶり、リドーっ!!』

突如姿を表したモンスターに警戒を表すレインを他所に、ミネルヴァが抱きつくようにそれに突っ込んだ。

『うぉッ……ミネっち！久しぶりだな～っ！』

ミネルヴァを受け止めたのは赤緋色の鱗を持つ蜥蜴人（リザードマン）。人とは異なる顔ゆえに表情

は分からないが、その流暢な声音は再会を喜ぶ喜色に満ちていた。
『――モンスターが、喋ってる……』
『ふふ、驚いたかな?彼の名はリドと言う。容姿こそモンスターと同様であるが見ての通り彼等には明確な理知を持っている』
『彼等って……他にもいるのか』
『ああ。これから他の者も紹介できるはずだ』
怪物(モンスター)は人類の敵である。それは全世界の共通認識。幼い時を洞窟に閉じ込められて過ごしたレインですら知る常識だ。
そんな定説など初めからなかったように、ミネルヴァはリドと呼ばれる蜥蜴人(リザードマン)と抱き合っていた。

『――で、そこにいる生意気そうなチビがレインよ』
再会もそこそこにミネルヴァは後方で控えていたレインを紹介する。
彼女の言いように顔を顰めるレインは、手を伸ばしながら近寄る蜥蜴人(リザードマン)へと目を向けた。
『へーよろしくなー――って、ゔぉッ!?何だその眼ッ!?』

レインの瞳がリドの全体像を捉えた瞬間、彼は自身を襲う焼けつくような感覚に驚き身体を背けた。

自身から離れていく手をレインが驚愕しながら見送っていると、ミネルヴァとフェルズが慌てた様子でリドを守るように立ち塞がった。

『――ごめんなさいフェルズ。まさかモンスターの身体にまで影響があるなんて……』

『いや気が付かなかった私にも落ち度がある……リド、身体に問題はないか？』

フェルズがリドの身体の状態を心配し声をかける。

そんななか、先程のリドの拒絶とも言える反応を見てレインは呆然としていた。

（――ああ、まただ）

少年の内で思い出されるのは、故郷である里を出た日の記憶。

『――その眼……！じゃあ、貴方は本当に……っ!?』

閉ざされた瞳が開かれ、己の名（スヴァルト）の意味を知った日。

そして、唯一親身に接してくれた同胞の少女から恐れられた日。

（もう、あんな思いは二度としたく無かった……だから俺は――）

彼女の怯えた目が、恐怖に震える体躯が、今も焼き付いている。

そして今、怪物（モンスター）にすら拒絶された。

（けど、やっぱり……俺はただのばけも――）

『――だ、だいじょーぶッ!!』

少年の心が暗い思考に落ちかけたその時、フェルズに支えられるリドが声を上げた。

『こんなもん全然痛くねぇ！苦しくもねぇ！だから大丈夫だ!!』

『え……？』

声音は震え、口元も歪んでいる。誰が見てもその叫びは痩せ我慢であると分かるが、それでもリドは声を上げレインのもとへゆっくりと歩み寄った。

『――だ……ダメだッ!!』

『そうだ、無理をするなリドッ！』

目を抑え顔を逸らすレインと身体を支えていたフェルズの制止を振り払い、リドはレインの前に立つ。

『無理なんて……してねぇ……！なぁレイン！お前の目を見て俺は分かったぞッ!!』

目を隠すように覆っていたレインの手をリドは無理やり掴む。

『や、やめ――』

『ずっと人から憎まれてきたんだろ！ずっと世界から拒絶されて来たんだろ！』

リドは両手で包むように握手する。それを必死に拒もうとするレインであったが――。

『オレ達もそうだった』

そのリドの一言にレイン動きを止める。
『こんな姿だからよ人間にあえば当然襲われる。それに普通のモンスター達からも攻撃されちまう。きっと迷宮（ここ）にオレ達の居場所はねぇんだって思った事もある。けど――』
リドはレインから視線を外し、見守るミネルヴァとフェルズに目を向けた。
『そんなオレらを、ミネっちは見つけてくれたんだ。だから――』
リドはギュッとより力強く手を握る。
『絶対にオレもひとりぼっちなお前を見捨てたりはしねぇ』
ザラザラとしてるのに温かい掌。その感触を少年は生涯忘れることはなかった。
そしてそれは怪物（スヴァルト）と恐れられた少年が、怪物（モンスター）であった者――異端児（ゼノス）との絆を結んだ瞬間でもあった。

その後、ミネルヴァとフェルズ、そしてリドの案内でレインは隠れ里と呼ばれる異端児（ゼノス）の住処へと向かった。
だがリドはともかく他の異端児（ゼノス）を必要以上に刺激しないためにもそのまま行くわけにいかず、レインはフェルズが即興で作成した目隠しを身につけて向かう事となった。
こんな怪しい格好をした人間を歓迎するのか、と不安に思うレインであったが結果は

――。

『レイン！いっぱい食えよ、ほら！』

『人間は食べないと大きくなれないと聞きます。遠慮せず食べてください、ミスター・レイン』

『レイー、私久々に貴女の歌が聞きたいわ～』

『しようがありませン。でハ、歌いましょう。新たな友であル、レインとの出会イを祝して』

熱烈な歓迎を受けた。これまでの人生からでは考えられないほど楽しく華やかな時間をそこで過ごした。

そしてレインは聞いた。異端児（ゼノス）達が抱く夢を。彼等が待つ者の姿を。

宴が終わり異端児（ゼノス）達はまた別の隠れ里へと移動するため、レイン達は地上へと戻るため、その場で別れることとなった。

『レイン』

『……？』

『握手』

牙を剥き出しにしてニッと笑うリドの姿に、レインも釣られて穏やかな笑みを溢し

た。

『またな、レイン』

『……ああ、また』

再会を約束し、リドは同胞達を率いて里を後にした。

暗闇に消えるその背を見送った後、ミネルヴァが茶化すようにレインの肩を小突いた。

『てっきりまだ一緒にいたい～とか言うのかと思ったけど、案外あっさりしてるのね～』

そんなミネルヴァの言葉にレインはゆっくりとこの出会いに対する自身の思いを吐く。

『――初めてだったんだ。ああやって歓迎されたの。嬉しかった、本当に……だからこそ、アイツらの邪魔はしたくない』

異端児達（ゼノス）の夢を知った。だからこそ惜しむ姿を見せずに別れようと決めた。今の無力な自分では彼等の重荷にしかなり得ないから。

『そっか』

ミネルヴァは笑みを浮かべるのみでそれ以上レインに尋ねることはしなかった。

『よーし、さて私達も地上に戻りましょうか』

こうして三人もまた迷宮（ダンジョン）を登り、密かに地上へと帰還をするのであった。

『――これからどうするつもりだ？ミネルヴァ』
地上に帰還して程なくして、フェルズはミネルヴァに問うた。
ミネルヴァは自身の腰にかかる愛剣を撫でながら口を開く。
『……前にも言ったでしょ。私にはやらなきゃいけない事がある。だから今はまだ冒険者には戻れない』
『……そうか』
彼女の目を見たフェルズは言葉を重ねる事には意味はないと悟る。彼女の旅の目的を、彼女の苦悩を分かっているからこそフェルズは大人しく引き下がった。
フェルズが一歩引いたところで、ミネルヴァはレインの前に立ち二本指を立てる。
『レイン。今、あんたには二つの選択肢があるわ。一つはこのオラリオに留まること。冒険者になるのも良いだろうし、他の道を探す事もできるとは思う。ま、けどこっちはあんまりオススメしないわ』
『……何でだよ』
『だってアンタ、世の中のこと何も知らなすぎだもん。今、はいさよならって別れたら一ヶ月後には路頭に迷ってる姿が容易に想像できるわ』

世間知らずな自覚はあるレインであるが、そこまで自分は酷いのかと思わず絶句してしまう。

ちなみに、『いや、最低限のサポートは私にもできるが』と述べるフェルズに、『はい、そこ黙ってて！』と返すミネルヴァのやり取りがあったのだが、レインの耳には入っていなかった。

『で、もう一個の選択肢は私の旅に同行する事よ。丁度これから世界を一周しようと思ってたところだったからね。見聞を広めるには良い機会じゃないかしら？それに私も丁度、雑用係が欲しかったところだし』

『雑用係かよ……』

『んー、ま、雑用係兼助手兼荷物持ちとついでに弟子ってところかしらね』

『結局ほぼパシリじゃねぇか』

ミネルヴァの物言いに呆れ果てるレインであったが、ふと彼女の言葉を思い出す。

『――私が最強だから。例え世界中の人間から憎まれようと笑っていられる自信すらあるわ』

最強を自称する傲慢とも言うべき自信。周りの目に怯えていた少年にとってそれはあまりに眩しく見えた。だから――。

『……あんたに、着いていく』

『そ、なら決まりね』

始めからレインの答えが分かっていたかのようにミネルヴァは変わらぬ笑みを浮かべるのであった。

少ない荷物をまとめた二人は、フェルズに別れを告げそそくさと迷宮都市を後にする。

こうして師弟として世界を巡る旅が始まった。

世界を巡る旅。その道中で二人は様々な出来事や事件に巻き込まれた。

魔法大国では不法侵入したり、極東ではミネルヴァが朝廷に喧嘩をふっかけたり、ラキア王国ではミネルヴァが軍神をぶん殴ったりと大概、騒ぎを引き起こすのは彼女の側であったが。

それだけではない。黒き砂漠を踏破したり絶海を越えた事もあった。更には、北の果てに鎮座する黒き巨龍を目にした事も――。

また、旅の中でレインはミネルヴァから様々な英雄譚を教えられた。古代の物語から神時代を賑わせてきたゼウスやヘラの眷属の逸話まで。ミネルヴァは事細かに語ったのであった。

そして数年の旅を経て世界を一周した二人は、再び世界の中心地へと足を進めていた。

『――もうすぐオラリオね』

『……ああ。長かったようで振り返ってみればあっという間だった』

小高い丘で腰を下ろす二人は、オラリオの象徴であるバベルの塔を見上げながら言葉を交わしていた。

『――で、これからどうするつもり？』

それは、旅の間ミネルヴァが尋ねることはなかった問い。世界を巡り様々な光景を見せてきた彼女であったが、それを見たレインが今後の人生をどのように歩むかは本人の委ねた。

『……俺は、冒険者になるよ』

『なぜ？』

『――俺はアンタから沢山の物語を聞いた。ゼウスやヘラの眷属の物語も……けど、一人だけ詳細を教えてくれなかった英雄がいた』

バベルの塔から視線を切ったレインは、横に座るミネルヴァの横顔を見る。

『ゼウス・ファミリアの雷霆（ケラウノス）……これアンタだろ』
『……その根拠は？』
『雷の魔法を操るハイエルフの魔導士ってとこだけでほぼ同一人物だとは思ってたが……確信したのは北の果てに行った時だ。あの竜を見た時のアンタの表情で、だいたい察した』
北の果てに赴いた時、不毛の大地と化したその場所に鎮座する黒龍を二人は遠くから見た。遥か遠くからでなお圧倒的な存在感を放つそれを目にした時、レインは恐怖のあまり、縋るように隣に立つミネルヴァへと目を向けた。
そして見た。普段は飄々とした笑みを浮かべる彼女の、絶望と後悔に溢れたその顔を――。
『……ま、そりゃバレるわよね。別に隠してたつもりは無いのよ。ただ……仲間をみんな死なせて、そのくせ無様に一人生き残った女の話をしても気分がいいものじゃないでしょ。それだけの話よ』
いつもの笑みとは違う自嘲を浮かべた表情でミネルヴァはそう答えた。
『……別にアンタが話したくないならそれでいい。けど、アンタ前に俺に言ったよな。誰より強くなれって……だからな、俺は決めた』
レインは立ち上がり空を見上げた。そしてバベルの頂上を越えた先、雲ひとつない蒼

空に手を伸ばす。

『――俺が隻眼の黒竜を倒す』

『……！』

その宣言に驚いた表情で見つめるミネルヴァに、レインは自分の決意を語る。

『最強ですら果たせなかった偉業を成し遂げて俺は誰よりも強くなる』

空から視線を外したレインは、師である女がどんな表情をしてるのかを確認するために振り返る。

いつものように冗談めかして馬鹿にしてくるなら、負けじと言葉を返してやろうと思った。

あるいは真剣に受け止めてくれるなら、しみじみとこれまで受け取った恩への感謝を述べようと思った。

しかし――。

『そっか……』

そこには、心底安心したようなホッとしたような微笑みを浮かべる彼女の姿があった。

◇

――迷宮（ダンジョン）第３７階層　白宮殿（ホワイトパレス）　玉座の間

「――――ッ!!」

目を見開き、即座に意識を覚醒させる。

聞き取ったのは迫り来る幾十もの足音。それは虫の息となった獲物（レイン）確実に仕留めるために包囲を固めた兵隊達（スパルトイ）。

（クソッ、すぐに立て……ッ!!）

王（ウダイオス）の大剣が直撃してなお手放さなかった愛剣（エリュシオン）を地に突き立て、それを支えに地に伏す身体を起こそうとするが――。

「グッ――――!」

あまりに重い体躯。その全身からもはや熱すら感じられない。

ここまでの戦闘でおった負傷と疲労が重くのし掛かる。これ以上は戦えないと身体と心が告げてくる。

「――――オ」

乾き切った喉を切り裂かんばかりに息を吸い上げる。

そして、全てを吐き出す。

「――――オオオオオオオオアアアアアアッ!!!」

あらん限りの声音で咆哮し、血反吐を吐き散らす。
弱り果てた肉体に、諦観を告げる心に、活を入れる。
魂を燃やし、身体を持ち上げた。
「俺は……誓ったッ!!頂天に至ると、アンタを越えると、そう誓ったアッ!!」
自身の誓いを叫び、鉛のように重い体躯を奮い起こす。
「ガァッ――――!!」
歯を食いしばり、全身の力を持って地を駆け、白骨戦士（スパルトイ）の群れに突っ込む。
剥き出しの本能を剣に乗せる。大振りで無駄が多いそれは合理を極めたこれまでの剣技とは対極のもの。レインがオラリオでの成長と共に内に秘した獣性を露わにした剣。
自壊すら辞さないその動きは確かに包囲を固めるはずだった軍団（スパルトイ）を押し返した。だが――。
「――――――ッ!!」
肉体を戦士としての本能に委ねてなお、底にある理性が、これまで培った経験則が告げる。これではあまりに足りない、と。
現状、死に体であった身体が意思力で息を吹き返しただけに過ぎず、戦力差は何も変わっていない。追い詰められた王（キング）が盤上（ボード）を逃げ惑い続けるような、愚かで見苦しい時間

稼ぎでしかない。

何より次に王(ウダイオス)が大剣を振るえば、確実にレインは敗北するだろう。

現状では可能性すら存在しない。そう、現状では――。

「ぐ……ッ！」

一つだけまだレインが切っていない手札が存在する――否、彼の生涯において自らの意思で切ったことの無い手札が一つだけ。

それを切れば勝てるというものでは無い。だが、0だった可能性が1にはなる。

（――俺は誓った。誰よりも強くなると……そう誓った。ならば、こんな所で無様に負ける訳にはいかない……!!）

自身に言い聞かせる。

勝つ為に、頂点に登る為に、あの日の誓いを違えないために。

己の仮面(仮)に手をかけ――そこで止まった。

（何故、外せない……!?）

自身の身体の筈なのに、言うことが聞かない。

仮面に伸ばした手は、それを外す事を断固として許さなかった。

そして、背後からそれが聞こえた

『うぅ……うっ……』

幼き無力な少年（自分）の泣き声。

縫われた瞼を抑え蹲るだけの過去。同胞からの迫害を恐れた弱さ。

その全ては不要なものだと、過ぎ去った記憶だと切り捨てたつもりだった。

『――俺は普通になれると思って……そう期待してアンタに着いて来たんだッ!!』

ミネルヴァと出会った後も少年（レイン）の本質は変わってなかった。

誰かに認められたい。普通に生きていて良いと肯定されたい。それが弱者である己の願いだった。

『……だったじゃないだろう?今もお前は何一つ変わってはいない』

弱さが囁いてくる。

（いいや、俺は変わった!ミネルヴァに誓いを立てたあの日から、俺は妥協せず走り続けたッ!もう弱者（貴様）のような醜態は晒すこともない!!）

そんな自身を嘲笑うように、それは断言してくる。

『――誓（それ）いが君の本当の願いなら、なぜ仮面（枷）を着けている?それがあればより目指している頂天に近づくと、お前自身が何より理解しているのに?』

（ッ……!）

『答えは簡単だ。お前は恐れているんだ。また怪物（スヴァルト）として扱われることを。結局お前は、洞窟の中で蹲るしか無かった無力な少年（自分）からは一つも変わってはいない。他人の目を気にして生きているだけ』

仮面（枷）を外そうとして初めて向き合う己の本質（弱さ）。

突きつけられる現実（それ）に何も返すことができない。

『そもそもあの誓いだってそうだ。何故お前は黒竜を討つなんて大それた事を誓った？名声が欲しかったか？同胞（エルフ）共に己の存在を示したかったか？黒竜に恨みがあったか？違う、お前はそんな動機じゃ動かない』

核心をつくように、告げられた。

『――お前はただミネルヴァ（あの女）を喜ばせたいがために、そう誓った。親に認められたいと願う子供のような浅慮な動機だ。だがお前は、それを聞いた彼女の顔を見て悟ってしまった』

（……そうだ。あの時のミネルヴァの顔が――）

『余りにも安心したような、重すぎる荷をようやく下ろせたようなそんな表情を見たお前は、自分の誓いの重みを理解した』

ゼウスやヘラの眷属達が失敗した隻眼の黒竜討伐。

その戦いを生き残ってしまったミネルヴァという冒険者は意味もなく世界を放浪し

ていた訳では無い。彼女はずっと探していたのだ。黒竜を討つ手段を。何年も一人で。
世界の中心を知り尽くした自分達が届かなかったのなら、世界中を探せば、きっと答えが見つかる。そんな藁にも縋る思いで彼女は旅をしていた。
『そんな彼女の思いを理解し、愛剣を託されたお前は気づいた。止まることは許されない、と。だからこそお前は事あるごとに自分の内側で止まるなと、誓いを忘れるなと唱え続けてきた。そうしなければ失いかねないほど脆弱な思いだからだ』
（……。）
『理解したか？己の愚かさを、自身が忌むべきものと定めた過去から何も変わってはいないという事を』
言いまかすことはできない。
その弱さは確かに本物であり、仮面の内側に蓋をし、目を瞑ってきた事実だから。
だが、それでも――。
（――認める。確かに俺の始まりはくだらない動機から生じたものだ。だが……）
正面から弱さを見据える。己に刻みつけるように。
（お前は誰でもよかったのか？己を認めてくれるのならば、愛してくれるのならば誰でもよかったのか？誰が相手でも同じことを誓えるか？違う、そうじゃない。そうじゃないだろう？）

己の中で蘇る二人で世界を巡った日々。

その言動に呆れることがほとんどだったが多くを学び、多くを受け取った。数えきれない程の恩がある。

（俺は、あの人だから喜んで欲しかった。笑って欲しかった。あの人が責務に押しつぶされそうになっているのは理解していた。あの人の笑みが心の底から生じているものではないことは分かっていた。だから絶望に打ちひしがれるあの人が少しでも救われて欲しいと、そう願った）

強さを求めた己の誓いであり、弱さを抱える己の願いでもあった。

なら初めから過去（弱さ）を切り捨てるなど出来るはずもない。

レインは膝をつき、蹲るだけの無力な少年（自分）に手を差し出す。

（――俺は、強くなりたい。誰よりも。あの人が心の底から笑える日を作るために。弱さを無視し、否定してきた俺が今更、こんな事を言うのは都合が良過ぎるだろうが……どうか、力を貸してほしい）

幼き自分（己）が声を震わせながら尋ねる。

『――嫌われたり、怖がられたりしない？』

その問いに、レインは穏やかな笑みを浮かべて答える。

（その時はその時だ。安心しろ、お前（お前）は俺が守る。それに――）

共に背中を合わせてきた仲間達の姿を思い出す。
（アイツらはきっと、そんな奴らじゃないさ）
その言葉に心底ホッとしたように少年は笑みを浮かべ、彼の手を取った。
「――さあ、一緒に往こう」
二つの影が一つとなる。彼等は迷いなくその一歩を踏みしめた。

数百にまで膨れ上がった兵隊（スパルトイ）が迫る。
もはや剣だけでは捌き切れない。
広間の入り口で見守るロキ・ファミリアの面々も各々武装を構え、いつでも救出に迎える体制を取っている。
誰が見ても逆転不可能の状況。そんな中で先ほどまでの荒々しい剣技が鳴りを潜めたレインは涼しげな笑みを溢しながら呟く。
「――悪いな、フェルズ」
旧知の間がらである魔術師（メイガス）への謝罪と共に、かの賢者の逸品である魔道具（マジックアイテム）――破邪の仮面（ベール・ディスベル）を外し捨てた。
『――――ギィッ!!??』

ジリジリと差し迫っていた軍団(スパルトイ)の足が止まる。本能的な危険を察したかのように、警戒心を表すにする。

「動かないか。ならばこちらから行くぞ」

瞳が開かれる。

紅き眼光が白骨戦士(スパルトイ)の大群を射抜く。

――その刹那。レインの前方を包囲していた数百の軍勢(スパルトイ)が全て灰塵と化した。

「【魔眼グレイプニル――起動】」

それは、魔を殺す眼。決して消えることはない呪詛(カース)。

真紅の瞳が、鎮座する王(ウダイオス)を捉える。

「――決着をつけようか、ウダイオス。どちらがより怪物かをな」

怪物同士の死闘が幕を上げる。

第十七話［怪物（レイン・スヴァルト）　対　怪物（ウダイオス）〈下〉］

――迷宮（ダンジョン）　第３７階層　白宮殿（ホワイトパレス）　玉座の間

包囲を固める数百の軍勢（スパルトイ）の隙間から紅の光が迸った。
解き放たれる眼光に射抜かれた怪物（スパルトイ）の体躯は一瞬にして砕け散る。
巻き上がる降灰の中央でレインはウダイオスを睨んだ。
「――決着をつけようか、ウダイオス。どちらがより怪物かをな」
その宣言に――いや、その紅の瞳に呼応するように、ウダイオスは大地を震わせるか如き雄叫びをあげる。
『――オオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!!!』
その咆哮に乗せられた感情は、臣下（スパルトイ）を殲滅された事への怒りか、あるいは怪物（モンスター）としての闘争本能に従ったものか――否、どちらも違う。
ウダイオスの絶叫に乗ったそれは喫驚であり嫌悪であり、隠しきれない恐怖であっ

た。

「――行くぞ」

兵隊（スパルトイ）が消失し、開かれた王（ウダイオス）への一直線をレインは駆ける。

満身創痍の肉体。一歩を踏みしめる事に異音の響く身体でありながら、加速を止める事なく彼はウダイオスの面前へと差し迫った。

レインとウダイオスの再戦が幕を上げるなか、それを見守っていたロキ・ファミリアの面々。特にレインの事情を一切知らないティオナとティオネは突然変化した戦況に困惑しながら呟く。

「――な、なにが起きたの？突然、スパルトイが全部消えたんだけど～っ」

「ええ……アイツが仮面を外した瞬間、雰囲気が変わったと言うか……空気が重たくなったと言うか……」

「ん～っ、そうかな～？」

ティオナとティオネでは今のレインに抱く印象が僅かに違うようだが――それ以上に、後ろに立つレフィーヤは彼を見てあからさまに顔を青ざめていた。

「こ、の感じ……じゃあ、レインさんは……本当に――」

息苦しく締め付けられるような圧迫感。

それをこの場でとりわけ強く感じているのは魔法種族（マジックユーザー）であるエルフの二人と特殊な

出自を抱えるアイズであった。
「――リヴェリア」
「……ああ、間違いない。だが怪物（モンスター）にまで効力があるとはな」
目の前で広がる光景に得心するフィンとリヴェリア。
「フィンとリヴェリアは何かしってるの～!?」
ティオナの問いに、リヴェリアは答えづらそうに顔を顰めた。
そんな彼女の態度にフィンは肩をすくめながら述べる。
「教えても良いんじゃないかな、リヴェリア。彼が自主的に仮面を外したという事は、少なくとも彼女達には知られて良いと考えたんだろうしね」
「……分かった。私の口から話せる事は教えよう」
黙考の末、リヴェリアは口を開く。
「――レインの身につけていた仮面。アレは素顔を隠すためのものではない。あの仮面はレインの眼の力を封じるための魔道具（マジックアイテム）だ」
「あっ！よく見たらレインの目が赤いや！普段は紫っぽい色なのに！」
「ったく、そんな事よりもっとあるでしょうが……この息苦しい感じとかも、アイツの眼の影響ってわけでしょ」
「え～？あたしは別になんとも無いけど～？」

呆れるティオネが述べた言葉にティオナは不思議そうに首を傾げる。
そんな妹の様子に「どんだけ鈍いのよ、アンタ」と更に呆れ果てるティオネであったが、リヴェリアが首を振り異存を述べる。
「――いや、ティオナの感覚に異常は無い。そしてティオネの感じているそれは、私やレフィーヤも強く知覚している。ティオネにあってティオナには無いものが関係している」
「？」
リヴェリアの言葉に疑問を浮かべるヒリュテ姉妹は、とりあえず自身の胸部に目を向けた後、互いの顔を見合わせた。
「ふっ」
「むぎーっ！」
勝ち誇りつつ鼻で笑うティオネの態度に歯を食いしばり苛立つティオナ。
危うく喧嘩が始まりそうな二人の様子にリヴェリアは額を抑えた。
「はぁ……全く、そんな事の訳が無いだろう」
呆れ果てる彼女の言葉に、ティオナは「大事なことだよっ！」と抗議するが、話が進まないのでリヴェリアは無視する。
「――ティオネは魔法が使えるがティオナには無い。いやもっと厳密に言うならティオ

ナには魔力が無い。お前たちの感覚の違いはそれが理由だ」
「ほえー」と不思議そうに首を傾げるティオナに対して、ティオネは手のひらの握り開きを何度か繰り返した後、得心したように頷く。
「なるほど、ね……言われてみれば確かに辺りから魔素が消えてる。魔力のないアンタが何も感じないのも当然だわ」
「え～、じゃあフィンとかアイズも感じてるってこと～？なんかあたしだけ仲間外れにされてるみたい～っ」
「馬鹿ティオナ、別にそんな良い気分のものじゃないわよ」
　不貞腐れる妹の頭を軽く叩きながらティオネはあからさまに体調の悪そうなレフィーヤへと目を向ける。そこには顔を青ざめアイズに肩を支えてもらいながら何とか立っている彼女の姿があった。
　彼女同様、レフィーヤの様子に目を向けていたリヴェリアもまた耐えるように一つ息を吐く。
「――魔法に長けたものであればあるほど魔素の存在には過敏になる。魔法種族（エルフ）であればなおのことだ。私達のほとんどの者は生まれたその時から魔力を持っている。そんな私達にとって魔素の存在しない空間というのは、いわば一切の空気が存在しない水中に居続けるようなものだ」

「まぁ、ほとんど魔法を使わない私でも気分が良いものじゃ無いんだから、そりゃそうよね」
「ん～？けど、その事とレインに何の関係があるの～？」
何となく察し始めたティオネとは違い、魔力の無いティオナは未だに皆目見当もつかない様子であった。
そんな彼女達に、リヴェリアは静かに答えを告げる。
「――レインの眼、いや魔眼はあらゆる魔力を封殺する。あの瞳の前では一切の魔法が意味をなさない」
その瞳は、魔力を殺す。
たとえどれほどの大魔法であろうとも、紅の眼光は例外なく切り裂く。
それこそが〝貪り喰らうもの〟の意を持つ魔眼（グレイプニル）の能力である。
「それって……」
「ええ、魔法種族（エルフ）にとっては最悪の天敵（相手）ね」
ヒリュテ姉妹が二人のエルフへと目を向けながらそう述べる。
リヴェリアはともかく、レフィーヤやアリシアなどのエルフの団員とレインの間には少なくない溝がある事は二人も感じてはいたが――。
「――ああ。あの魔眼を誰よりも恐れていたのは同胞（私達）だ」

リヴェリアの言葉にレフィーヤは顔を俯かせる。
同族意識が強いエルフの中に生まれたレインという異端の存在。それが同胞からどんな扱いを受けてきたのかをヒリュテ姉妹やアイズも容易に想像できてしまった。
「っ……。」
「……。」
「チッ……」
「え～と……」
申し訳なさげに視線を落とすレフィーヤとなんとも言えない表情を浮かべるアイズ。そして僅かな苛立ちを示すように舌打つティオネに気まずい空気に焦るティオナと各々様々な反応を示す。
リヴェリアも彼女達の反応が予想できていたのか、特に何かを返す事なく目を閉じた。
「――レインがこれまでどんな屈辱を味わってきたのか、どんな葛藤があったのかは彼にしか分からない」
ここまで静観を貫いていたフィンは、ウダイオスに挑むレインに視線を向けたまま己の意見を述べた。
「だが、僕たちが注目すべき箇所はそこではないよ。そのような生い立ちを持つ彼が、自

身に仮面という制約を課していた彼が、なぜここで仮面を外すという選択をしたか。僕たちが目を向けるべきはそこだ」

重要なのは今まさしく変わろうとしているレインの姿であると、そうフィンは告げる。

フィンの言葉を最後に再び面前で行われる死闘に目を向ける六人であったが、不意にティオナが首を傾げながら呟く。

「――ん～？じゃあさ、レインのその目とスパルトイが一気に消えたのは何の関係があるの？」

「……おそらくだけど」

と、前置きをしたうえでフィンは自身の推測を語る。

「あの眼は、怪物（モンスター）の核――魔石にも影響を及ぼすんだろう。魔石は怪物（モンスター）にとって心臓部であると同時に魔力の源だ」

ゆえに、魔力（グレイブニル）を切り裂く眼光は魔石をも射抜く。

先程、軍勢（スパルトイ）が消し飛ばされたのはレインの魔眼の能力ゆえであった。

「……まあスパルトイは一掃できたけど、ウダイオスが未だ健在なあたり魔眼の効果にも限界値（キャパ）が存在するんだろう」

（だが――）

言葉とは裏腹に勇者（ブレイバー）の慧眼は正確に、面前で繰り広げられる戦況の変化を見抜く。
（……先程よりもウダイオスの動きが鈍くなっている。一瞬でウダイオスの命を奪うほどの力は無いが、あの眼は確実に魔力を削り続けている）
それはつまり、時間を掛けさせすればレインは視線一つで階層主（モンスターレックス）を屠れてしまうということを意味する。
あまりにも出鱈目だ、と歴戦の冒険者（フィン・ディムナ）が苦笑いを浮かべるしか無いほどに、かの魔眼は支配的な力を有する潜在性（ポテンシャル）を秘めていた。

◊

地中から軍勢（スパルトイ）が再展開され、それを即座に魔眼（グレイプニル）が射殺すという攻防が数度続いた後、王（ウダイオス）は攻め方を変えた。
対するレインの鋭い耳はすぐに戦場の変動を感知（キャッチ）する。
（――地中を蠢く音が消えた。雑兵（スパルトイ）に魔力（リソース）を割くのをやめたようだな）
またしても例外（イレギュラー）。
大剣（武装）だけに留まらず、王（ウダイオス）は破魔の怪物（スヴァルト）を退けるために手駒をも切り捨てた。
これで正真正銘の一対一。互いに死力を尽くすのみとなった。

「――来るか」

『オオオオオオオオ――――――!!!』

咆哮と共にウダイオスの大剣が振り上げられる。肩、肘、手頸の位置にある核が光を放ちながら、膨大な力を帯びた王の一撃が再び振るわれようとした、が――。

「無駄だ」

鋭い眼光を向けるレインの宣告と共に、黒大剣に纏われたウダイオスの魔力が霧散する。怪物の魔眼が王の剣を殺した。

魔力を失い速度も威力も落ち切った斬撃をレインは容易く掻い潜り、一気に王（ウダイオス）の面前へと迫る。加速の刹那、愛剣を引き絞り構える。

「雷轟（ライジング）……ッ!!?」

力を溜め、あとは雷轟一殲（スキル）を解放するだけとなったその時――レインの知覚を超える速度で突如として地中から逆杭（パイル）が突き出てきた。

「――チッ！」

剣山――否、もはや極大の大槍を彷彿とさせるような射程（リーチ）を誇る高速の逆杭（パイル）。それを間一髪のところでエリュシオンで受け止め串刺しは免れたレインであったが、強制的に１０Ｍ（メドル）ほど上空に弾き飛ばされてしまう。

（――大群（スパルトイ）の展開と大剣の出力上昇へと用いていた魔力を逆杭（パイル）のみへと用いた結果、規

格外の速度と射程をもたらしたか）

ここで更なる例外（イレギュラー）。この数十分だけでウダイオスは幾度も想定外の行動を取ってきた。

それは逆に言えば、例外的な行動を取らねばならないまでに王（ウダイオス）が追い詰められているということ。

『オオオオオオオオオオ――――――!!!!』

身動きの取れない空中にいる己に向けて、ウダイオスは極大剣を振り下ろさんと構える。

状況は絶望的である――にも関わらず、レインは僅かに笑みを溢した。

冒険者としてこれまで培ってきた感性が告げている。

（――この一撃を越えれば、勝てる）

最善を尽くして挑み、それでもなお追い込まれた状況から魔眼という手札を切り、戦場に混沌（カオス）をもたらした。

片腕を奪い、魔力を殺し、雑兵（スパルトイ）を葬った。そこまでしてようやくウダイオスという怪物の底が見え始めた。

あとは、迫り来る極大剣を対処するのみ。

（魔力を封殺しているが、それでもなお膂力には圧倒的な差がある。正面切ってあの一

撃を受け止めるのは不可能だ）

愛剣を鞘に収め、代わりに背負っていた弓を構える。

（さらにこの眼（グレイブニル）を使っている以上、魔弾は使い物にならない。ならば――）

矢を番える。

狙うべき標的は、三つ。大剣を持つ右腕の関節にて光を放つ三つの核である。

それなりに距離があるゆえただの速射では確実性に欠ける。

ゆえに求められるのは、速度と威力。

「ぐッ……!!」

（己の限界を越えるだけだ……!!）

歯を食いしばり渾身の力で弓を引く。眼を見開き、揺れる白髪の隙間から狙いを定める。

『オオオオオオオオオオオオオオッ――――!!!』

「雷轟一殲（ライジング・ボルト）――」

大気を切り裂かんと振るわれた黒大剣。

その凶王の一撃に対抗するように放たれたのは、迅雷の三重奏。

「――三霆撃（トレス・アークス）ッ!!」

それは破壊的な一撃をもたらす矢――雷轟一殲（ライジング・ボルト）を速射にて三連射する荒技。勝機を

もたらすために限界を越えて新たに至った境地。

放たれた三射は、肩、肘、手頸に埋め込まれた核を穿った。

『――――――ッ!!?』

大剣を振るっていた右腕が力を失いながら脱落する。レインに狙いを定めていた凶刃は自由落下をする彼の下を過ぎてゆき、白き大地に突き刺さりながら静止した。

対するレインも、強撃の三連射の反動ゆえに受け身を取ることも出来ずに墜落する。

「ッ……！」

地面に突っ伏しながらレインは痛みを発する右腕の状態を確認した。

（……指が裂け、肩は千切れかけている。これではもう弓は使えんな。だが――）

これまでの疲労と痛みが全身に重石のようにのし掛かる。まるで死体のように体躯は冷え切っていた。それでも――。

利き手ではない左手で剣を抜き、地に突き立てながらレインはゆっくりと立ち上がった。

「――牙はへし折ったぞ。これで、今度こそ王手（チェック）だ」

『ウウウウウウウウウウ――――――ッ!!!』

両腕を失った王（ウダイオス）の叫びが木霊する。だがその声色は敵対者への咆哮ではなく、死に怯える絶叫に変化していた。

「……ッ」

（――これで、最後だ。全てを出し切れ……!!）

崩れ落ちそうな己の体躯を鼓舞しながらレインは一直線に駆け出す。

ウダイオスも最後の抵抗とばかりに超速の逆杭（パイル）を展開するが――。

（同じ手は、二度も食らわん……!!）

これまでよりも速く突き放たれるなら、そのタイミングを読み切って躱せばいいとばかりに、進路を阻まんとする逆杭（パイル）の隙間をスルスルと抜け出してゆく。

そして遂に、王（ウダイオス）の面前に挑戦者（レイン）は辿り着いた。

『オオオオオオオオッ――――!!』

王（ウダイオス）を守るように展開される逆杭（パイル）を跳躍にて躱し、王の心臓（魔石）を守る鎧である肋骨によじ登った。

左右八対の肋骨は上下に動き魔石を守護するが――一本だけ先程レインの放った魔弾により破壊されていた。すかさずそこにレインは使い物にならなくなった右腕を捻じ込んで肋骨の鎧に隙間を作り出す。

「俺の――」

逆手で持った愛剣（エリュシオン）を振り下ろす。

拳ひとつほどの隙間を正確に刺し通した刃は、紫色の光を放つ大結晶を貫いた。

「――勝ちだ」

『――――――』

静かな勝利宣言を受けたウダイオスもまた自身の敗北を理解し力なく崩壊した。

足場であるウダイオスの体躯が崩れ、ひっくり返るようにレインは地に落ちてゆく。

失われてゆく意識のなかで彼は白壁の天井に手を伸ばした。

（――まだ、足りない。もっと強く）

彼の中にあったのは、勝利の余韻ではなく更なる高みへの渇望。

野望を果たすその瞬間まで彼は決して止まらない――否、止まれない。

呪縛ような決意を更なるものとしレイン・スヴァルトはまた一歩、頂天への階段を登るのであった。